930-Sh27ウ
1200500759640
930
H.27
ウ

始

930
Sh27
I724

アメリカ文學序說

志賀　勝　著

時論社版

アメリカ文學研究

志賀　勝　著

朝倉書店

國立圖書館
昭和23.5.-1
購入

はしがき

この書物は數個の部分から成り立つてゐるが、それを通じて明らかにしてみようとした問題はアメリカ文學をどのやうに考ふべきか、どのやうにそれに近づいて行くべきか、といふことである。即ちそれは不完全ながらアメリカ文學研究の方法論といふことができよう。それによつて讀者にアメリカ文學へのイントロダクションを供給してみようと思つたのである。

アメリカ文學はその本質と發達の上から、その研究にも特異な用意を必要とする。それは大陸文學やイギリス文學と著しく異つた面をもつ。しかも文學の鑑賞には單なる理知でなく微妙な感情が關與するので、問題は一層複雑になる。それを意識的に、或は學問的に、考察し組織だてようとした試みは、彼地の學界にもまだ乏しいやうである。それは吾々の如く遠く隔つた國土と民族の中に居り、しかも泰西文學の研究に常に熱意をもち、アメリカ文學の特性をもそれら文學との比較に於て一層明らかに見る立場にあるものが、却つて最も自己に必要な（そして適切な）仕事として取りあぐべきものかも知れない。日本に於けるアメリカ文學の研究が、かういう方面に向つて前進することは、まことに望ましいのである。

本書のうち初めの「アメリカ文學の輪廓」は、終戰後間もなく、季刊雜誌「双樹」のために草したものである。つぎの「アメリカ文藝思潮」は、昭和十四年弘文堂の教養文庫として發表したものの一部で、今度必要な加筆をした。これは私として、始めてアメリカ文學に方法論的な考察を加へたもので、自分の氣持では記念的なものであり、小さな仕事ながら何かの意義はもつてゐると思ふ。これは歴史的に追つて行つて、第一次大戰後二〇年代初期の頃で筆をとめたのだが、

今度そのあとに置いた「アメリカ現代小説」の一文は、丁度その年代のあとを受けて、重要な思潮を説明することになつた。讀者もその連續の氣持で讀んで頂きたい。これは今度初めて活字にするものである。そのつぎの「宗教性」の文は、昭和二十一年二月號の雜誌「基督教文化」にのせたもの、それと平行する「ヒューマニズム」は今度初めて發表するもので、あとがきの「民主々義文學」の論も同様である。私はこれらの文で、アメリカ文學の要素の把握を一層確實にしたいと思つた。その上にアメリカ文化と吾々の交渉がますます複雜になつて行く今日、このやうなアメリカ文學の分析が一層重要な關聯をもつことは言ふまでもない。

最後に、この「序說」と一緒に、私が昨年發表した「アメリカ文學史」（高桐書院刊）及び「アメリカ現代作家」（創元社刊）を讀んで頂くならば、三者相補足して問題が一層明瞭になるだらうと思ふ。

昭和二十三年春

志賀勝

目次

はしがき

アメリカ文學の輪廓……一

(1) その發達
(2) その性格
(3) その展望

アメリカ文學思潮……四一

一、アメリカ文學の獨立、
二、ピュリタニズム、
三、ヤンキイズム、
四、南部の傳統、
五、フロンティア精神、
六、產業主義、
七、機械時代

アメリカ現代小說……一三五
一、一九二〇年代
二、一九三〇年代
三、その性質と特色
四、結語
アメリカ文學の宗教性……一七一
アメリカ文學とヒュマニズム……二〇九
デモクラシーと文學―あとがき―……二三一

アメリカ文學の輪廓

一、その發達

アメリカ文學とはイギリス文學の分派或は出店の如く考へる人がある。之は過去の或る時期にさうであつたかも知れない。しかし現在では決してさうでない。アメリカ文學は英語で書かれてゐることは事實である。しかし、その英語は現在イギリス人の話す英語ではない。そこには十七世紀のアメリカ植民時代に持つて來られた古めかしい英語と、その語法がそのまゝ殘つてゐるとともに、その後のアメリカ人、及びその中の移住民の內から自然に發生した新奇な言語が豐富に混つてゐる。それは唯言葉の上だけのことでなくて、言葉の味はひや臭ひに於てもさうである。そしてそれは一歩進んで考へると、當然文學の精神或は感覺にも關係することである。何故なら文學は勿論表現であり、言葉の差異は文學の差異に本質的な影響を持つものであるからである。殊にイギリス人が現今のアメリカ文學を讀む場合、彼はその言葉が、自分たちと違つた發音とア

クセントを持つて語られてゐることをさへ直感するであらう。

このことはもとより言語だけの問題ではない。アメリカ人はイギリスの傳統の文化、社會生活思想習慣のすべてを受け繼いだものであるとは言へ、アメリカに移住したイギリス人が中產或は下層階級のものが多かつた關係上、その繼承は勿論完全ではない。その上アメリカに於ける新らしい生活、そこに發展して來た產業と社會組織の形態は、次第に非イギリス的なものを醸成して行つた。氣候風土が移住民の精神と肉體に對してさへ深い影響を與へ、彼らの文學的センスや表現にまで變化を見せることになつたのは當然である。初め移住民の住地が大西洋沿岸の南北に長い狹小な地帶に限られてゐた間は、丁度一つのプールにせきとめられたやうに、イギリス傳來の文化が平和に豐富に開花して行つた。そして一般教養や美術、演劇等に至るまで、本國イギリスに劣らぬ水準の發達を見せた。哲學者バークレイが暫くロード・アイランドに滯在中、愉快な交友と知性的な談話を持つに不自由しなかつたと傳へられるのもこの當時のことである。けれども十八世紀の末獨立戰爭の終つた頃から、アパラチア山脈の障壁を越えて、遂に移民の大群がミシシッピの沃野に散開するやうになつてから、アメリカ文化の樣相は根本から變動を受けることゝなつた。西へ西へと三千哩に擴がる新しい領域に向つて、無限の富或はその希望を追うて前進する

New England Renaissance

New England Renaissance

る彼らには、傳統文化の蓄積や完成はその仕事でなく、現實的な生活とその中から必然に造り出される社會形態の內に、おのづから生長して來る全く新らしい文化を自己のものとしなければならなかつた。かくして文學にもそのやうな變動と新しい展開が當然に眺められるやうになつた。

エマソンを中心とするニュー・イングランドのルネサンス、いはゆるアメリカの浪漫時代は、勿論アメリカの文學精神の獨立を示すものであつたが、當時の文學者には猶イギリス傳來の趣味教養が深く、その作品にもイギリス的な性質が甚だ濃くあつたことは否定出來ない。恐らく明らかにアメリカ的なる文學は彼らの間から少し遲れて出て來たホイットマンの詩歌に、初めて充分な現はれを見せたと考ふべきであらう。この傾向は更にその世紀の末のマーク・トウエーンに至つて一層に强化せられる。けれどもこの間にもアメリカ人の、文化殊に文學や美術の中心がイギリスにあると言ふ觀念は容易にすたらず、大衆は勿論文學者自身もイギリスの識者や批評家の判斷によつて自分たちの文學の評價をも定めようとした。このやうな植民地的劣等感は、實に今世紀の始めまで續いたと考へられるのである。けれども總てそのやうな現象にも拘らず、アメリカの國家と社會生活の强力な發達とその獨自な展開は、必然に純粹なアメリカ文學の生長を促進して行つた。それは文學精神とともにその表現にもあらはれ、質の上のみでなく、更に量の上の豐

富さは充分舊來のイギリス的なる文學を壓倒するやうになつた。この傾向は第一次世界大戰後飛躍的に強化せられる。即ちアメリカはこの戰爭に最も有利に參加することによつて政治經濟に於ける世界的なヘゲモニイをイギリスより奪ふことになるのであるが、同時にアメリカ人は文學に於ても初めて充分な獨立的自覺を持つやうになつた。彼らはイギリス人を離れてアメリカ人として考へ、又作り得る。アメリカ人の中でも純アメリカ人に限らず外來人も考へ作り得る。さう言ふ自覺を持つやうになつた。その上に大戰後のアメリカの富の增加と一般的な教養の擴大は、アメリカの作家が、十分アメリカだけで認められ、アメリカで賣れる、即アメリカ讀者のみを相手にして自立することが出來るやうになることを示した。そして文學の出版がボストン中心に限らず、廣く道德宗教の自由な地域にも普及するやうになつた。大戰後のこれらの現象は、相寄つてアメリカ文學（知性）の獨立を確固たらしめた。

かういふ新らしい現代文學は世紀の始めから芽ぐみはじめ、實に世界大戰の眞中（一九一五年頃）に初めて明らかに出現を見せはじめたのであり、それは大體に於てアメリカの傳統的な文化思想社會生活に對して批判的な現實主義の傾向を持つものであるが、その傾向は大戰後のアメリカの富と產業の躍進、その中に營まれる國民生活の豐富さと激烈さを背景にして、格段に強化されて

行く。そこには都市と村落が同樣に批判され、資本家と勤勞者、父と子、戀愛と生活、禁酒と道德、さういふ問題が、率直な露骨な描寫と批判にさらされる。その自由で奔放な文學の活動は世界のどの國の文學にも見ることの出來なかつた程度のものである。或る意味で大戰前のアメリカ人のリベラリズムは政治的經濟的關心にあり、大戰後そのリベラリズムは精神的生活乃至教養の方面に移行したと言ふことが出來る。そしてこの文學の變貌には、地理的にはシカゴを中心とする中西部の勃興、社會的には無產階級、勤勞階級の自覺と關聯するところも深いのである。

更に注意すべきことは、新文學發生に參加した純アメリカ人にあらざる外來人の貢獻である。アメリカ大陸への移住民はその初期からアングロ・サクソンにあらざる血統のものが相當にあつたのであるが、その傾向は逐年に强化し、現在アメリカ國內には五十數種の異人種が雜居し、その內白人ばかりでも四十餘種が算へられる。一八九〇年頃までは北歐人種（英・獨・愛蘭）、その以後は地中海種（伊・佛）スラヴ族（露・バルカン）の移民が激增した。一九三〇年の調査によれば、非アメリカ白色人種の人口は三千八百七十餘萬、即ちアメリカ全人口の約三分の一に達する。これら異民族はそれぞれ特定の地帶と產業を占めるとともに、ニューヨークの如き中心都市にも實に多數に混在する。（同市七百萬の人口中約五百萬が外國系で、イタリア人のみにて百萬人）。このやう

な異人種の混入は必然に文學の性格に影響せざるを得ない。それは民衆が提供する文學の素材、或ひは精神として影響するばかりでなく、しばしば有能な作家自身が外國系なのである。（例へばドイツ系のドライザー、ドイツ及びアイルランド系のスタインベックの如き。）かくして一九二〇年後の文學は、南北戰爭以前のアメリカ文學よりも却つて、佛露獨の文學に似てゐるとさへ考へられるのであつて、それは殊に一八八〇年以來の移民の大侵入によるところが大きいと見られるのである。

×

以上吾々はアメリカ文學の獨立性の確立を辿つて來たが、このことは勿論アメリカ文學がイギリス文學から絶縁してゐることを示すものではない。アメリカ人がイギリス人から受ける血と精神の濃厚さは絶對的なものでありそれは十七世紀植民の初めから現今に至るまで一貫した強力な流れをなしてゐる。アメリカの政治や文化の指導的立場に立つた人々が、ニュー・イングランドの正統的アメリカ人の血から出たものが如何に多いかは、吾々の意想外に上る事實であるし、（例へば一九〇〇年まで、二五人の大統領中、唯四人を除く外は、すべて十七世紀のアメリカ人までその系圖を遡る

ことが出來る。）宗教思想としてのピューリタニズムは、その初期の神政政治的な權威を失つたとしても、その根本精神はアメリカの國民性の背骨となつて續いてをり、彼らの理想性と實踐性の兩面に、最も鮮明な現はれを見せてゐる。元來彼ら清教徒は、單にイギリス國教に反逆し、之を見棄てたものではなく、むしろ英國國教の精神と制度を一層完全な形に發展さすべき自由の天地を求めて大西洋を渡つたのである。同樣に他の文化の面に於ても、アメリカ人はイギリスと單純に絶縁したのでなく、しばしば母國の特質を一層强化する方向に進んで行つた。かくしてアメリカ文學にあつても、その精神と表現の奥深いところは勿論イギリス文學に連なり、その文藝復興期から中世紀に至るまで繼承の脈は遡るのである。從つて吾々はイギリスの古き文學乃至文化の傳統の、充分なる知識と理解なくしては、アメリカ文學を味はひ、又これを評價することは出來ない。更に重大なことは、アメリカ文學はイギリス文化のみならず、一層廣く古い背景に於てヨーロッパ全部の文化に接觸し、そこから生命の流動を引いてゐることである。即ちヨーロッパの文化はイギリス文化を一つの飛石として大西洋を渡つたものとも考へられるのであり、それはこの文化が西へ西へと進展するいはゞ本能的な傾向にもとづくのである。その動きは人類的で深いものがある。そしてルネサンスはこのやうな動きの一契機を示すものであり、コロンブスのアメ

リカ發見でさへも その一つの結果に過ぎない。かくしてアメリカ人はイギリス文化を受けるのみならず、廣くヨーロッパ文化を受けて、これを新らしい土地と風土と更に血の混和の中に發展大成しようとしてゐるものと言ふことが出來る。既に事實に於て、現在のアメリカ文學が如何にヨーロッパ大陸の文學に近似し、その特色を一層新鮮な形で提示してゐるかは上にも述べた如くである。かくしてアメリカ文學はイギリス乃至ヨーロッパ文學の一つの重大な延長として見らるべきであり、そこに又それが持つ使命があると考へられる。唯こゝにあくまでも警戒すべきことは、それ故にアメリカ文學の獨立性を輕視し、イギリス乃至ヨーロッパの批評眼を以つてアメリカ文學を評價しようとすることである。そして歴史の時間的關係とその段階的進歩の事實を無視し、ヨーロッパ文學殊にイギリス文學とアメリカ文學を比較して、或る一時代を横斷的に結びつけ、それによつて後進アメリカ文學の貧弱さを笑はんとするやうな態度である。アメリカ文學はイギリス文學を繼承しつゝも、勿論それ自身の發展の經路を持ち、異つた環境と時代の空氣の中に、自己としての完全な生長を遂げようとするものであつて、その事實は決して上のやうな機械的な審判に任さるべきでない。吾々はどこまでもアメリカ文學の獨立した發生と生長の跡を辿りそれの持つ個性の特色に充分な同情と理解を持つべきであり、このやうな努力によつて吾々はア

メリカ文學の全貌を初めて明確に把握することが出來るであらう。即ちどこの國の文學でも同じやうに、吾々は文學の歴史的展望と現實の批判に於て、その文學を一個の有機的な生物と見る如き、どこまでも科學的な周到さと知性ある研究の態度を必要とするのであり、その文學に對する純粋な愛乃至理解もこのやうな態度の上に初めて正しく生長するであらう。殊にアメリカ文學の如き甚しく重大な環境と特殊の歴史の中に、極めて異色ある發展を遂げ、否むしろ將來に於て遂げようと激動を續けてゐるやうな文學にあつては、吾々の理解と批判にはこのやうな反省と認識の必要が痛感されるのである。

アメリカ文學の獨立性について　餘談的に一つの例證を擧げるならば、イギリスの奇警なエッセイスト、G・K・チェスタトンは、大戰後のアメリカを訪問して一冊のアメリカ印象記(『ホワット・アイ・ソウ・イン・アメリカ』)を書き殘したが、その中の一章で彼は、世人の考へてゐる如く大戰によつて大西洋は決して狹くなつたのでなく、アメリカ人とイギリス人の間の國民的差異は却つてますます深まつてゐるのが事實だと言つてゐる。そして彼は先づ文學について彼の個人的な經驗を語るのだが、彼は少年の時、アメリカの一つの古典とも言ふべきホームズの『朝食卓の獨裁者』を讀んだ。そして書中の機智や辭句が、英國の傳統文學のそれと少しも變らぬことを感じ

た。もとよりそこにはいくらかの地方色があちこちに見られるが、それも全く偶然的なもので、例へばイギリス人がたまたまスイスやスエーデンに住まつてゐる場合、當然に出て來るやうな地方色に過ぎなかつた。それの言葉はラスキンと同じ程度に英語的であり、カーライルよりはずつと多く英語的であつた。ところがチエスタトンは後年ホームズに劣らぬ流行を獲ち得たオー・ヘンリの短篇集を讀むやうになつた。これは誰が讀んでも、アメリカ人の物語であることを、一瞬間も忘れることは出來ない。第一にそれはアメリカ人のアクセントで話され機敏で魅力ある外國人の音調がまぎれなく聞える。その後大西洋を渡つて評判の傳はつて來たアメリカの書物はいろいろあるが、そのどれも同じく全くアメリカ的である。例へばエドガー・リー・マスターズの『ザ・スプーン・リヴァー・アンソロジー』について、吾々は唯新らしい書物といふだけでなく、アメリカから來た新らしい書物だと言つた。恰もそれはロシアやイタリアから注目すべき現實的小說の出現が報ぜられたやうな場合と全く同じであつた。——チエスタトンはこのやうに自分の經驗を語り續けてゐるのだが、吾々はそのやうな經驗をもち、又文學的センスによつて充分信賴するに足るイギリス批評家の言葉を、アメリカ文學、殊にその現代文學の獨立性への證言としてこゝに引照するのである。

二、その性格

このやうな獨立した立場に於て見られるアメリカ文學は、それではどのやうな特性を持つものであらうか。

先づ吾々はその內面的性質、廣い意味の文學精神について見たい。アメリカ文學を養ひ、又これをつくつてゐる精神は、アメリカの國民性の要素をなしてゐるものと當然に同一であるべきである。卽ち吾々はそこに（一）ピューリタニズム、（二）フロンティア・マインド（開拓地精神）、（三）コスモポリタニズム（世界主義）、（四）人道主義、（五）個人主義、（六）民主主義等の傳統精神の流れが、豐富に又交錯しつゝ流れ込んでゐる狀態を見る。ピューリタニズムは神の畏れと罪の反省を基調とし、そこに眞摯な精神性の色調をかもし出すものであるが、その反面、その不寬容な性格から來る束縛と形式化は、當然知性と藝術心の反抗を呼ばなければならぬ。例へばホ

ーソーンの『緋文字』（一八五〇）や『七破風の家』（一八五一）は、いづれもこの罪の自覚と清教徒的制度への非難を宿したものである。そしてこのピューリタニズムは現在のアメリカ文學に至るまで、その外形は變はりながらも、眞摯な精神性、理想性として働き、アメリカの人間や制度の虚偽に對する烈しい批判として、殊に社會的な文學の面に表はれてゐる。しかも他の側に於てはピューリタニズムの傳統的な道德主義、そこから來る藝術への無理解乃至壓迫の態度に對して現在のアメリカ文學は絶對な拒否をなすものであり、その意味に於てピューリタニズムは作家と批評家の頑强な敵として、絶えざる攻擊を受けてゐる。そしてその反作用が又アメリカ文學の一つの性格を作つてゐることは興味ある事實である。次に開拓地精神は、勿論西部移住農民の困難な努力の生活と荒々しい自然力との交渉の間に生れた精神であり、一面實踐的でむしろ餘裕のない行動精神であるとともに、他面はそれを償ふまでのロマンティックな想像と虚無的と言つていいほどの誇大性が伴ふ。そしてそこから當然幅の廣い野性を持つた文學が出現する。古典の中ではクーパーのアメリカ、インディアンを扱つた數篇のロマンスが擧げらるべきであらうが、この精神の流れはアメリカの荒野の廣さの如く、廣く一面にアメリカの國民生活のあらゆる地域と階層に行き亘つてゐる。例へばそれはそのやうな荒野の中央に奇蹟のやうに出現したシカゴの今日

の大都の中にも、その性格又は雰圍氣として紛れないものを見せてゐるであらう。そして吾々は太平洋岸のカリフォルニア地帶に至るまで、この精神の文學が樣々な形に發生してゐるのを見るいま現代文學に於て、鮮明な開拓人タイプと傳統的ニュー・イングランド人との接觸を主題とした作品で甚だよき効果を擧げたものを一例として示すならば、ムーディの戯曲『大分水嶺』（一九〇六）がそれであらう。

第三のコスモポリタニズムは世界を家とするアングロ・サクソンの傳統精神にふさはしいものであるとともに、アメリカ國民に混入する多くの異人種の要素は、當然この傾向を强化する。アメリカ人が旅行好き、冒險好きであり、樣々な異鄕を訪問して、生活の豐富と刺戟を樂しまうとする特色は充分その文學に反映する。その一つの特殊な現はれは前世界大戰後パリを中心としたアメリカの若い藝術家たちの間に見られたものである。彼らはいはゆる「破滅の世代」（ロスト・セネレイション）として大戰後の虚脱の氣分の中にパリを去りやらず、殊にアメリカ出の老女性作家シュタイン女史の指導の下に、一つの教養的享樂的なグループをつくつたものである。ヘミングウェイやドス・パソスなどはそのメンバーであるが、彼らの當時の作品には當然かういふ意味の世界性が反映してゐる。又ブロムフィールドは大戰後もフランスに滯在して自らフランスを第

二の母國と呼んだが、彼は又インドに興味を持ち、しばしばインドを訪問して親しき交友をつくり、その結果は『雨來る』（一九三七）『ボンベイの夜』（一九四〇）の諸作となつた。このやうなコスモポリタニズムは或る點いはゞ病的な性格を持つのであるが、コスモポリタニズムの正常なものはしばしば理想的な人道主義の精神と結合する。そして世界同胞的な感情となつて現はれる。吾國であのやうに愛讀されたパール・バックの『大地』三部作（一九三一——三五）は、その適例であり、こゝに中國庶民の苦勞と運命が、縱には人類がアダムの昔から負つてゐる呪ひの重荷を通じ、橫には現代の世界的な資本主義進出の中に置かれる後進民族の苦惱を通じ、豊かな人間的同感を以つて描き出されてゐる。吾々がこの作品をよく理解し、愛讀した所以は、それが唯ロマンティックな異鄕の題材と味はひを持つてゐるためだけでなく、この時と處を超越した普遍的な人類愛の感動によるところが深いと考へなければならぬ。

次の精神的要素としての個人主義と民主主義とについては別に言ふ必要もないであらう。むしろその性格の全部であり、彼らはその徹底した個人的權利の自覺と明瞭な個人的福利の追求とともに、しかも極めて高度な集團的協同的精神とその習慣を持つてゐる。それはアメリカ人の持つ多くの矛盾の内でも、殊に著しいものであるが、このやうな矛盾の中に二つの精神は却つて交々

に刺戟され、强化されてゐるのであり、それが文學の作品の中に取り入れられる時は、その複雜な陰影と波動は、一層興味ある（いはば藝術的な）効果をつくり出す。そしてこの現象は殊に前世界大戰後の現實的なアメリカ文學、傳統批判と社會批判に進んだ文學に於て、殆んど例外なく現はれてゐるところである。

×

猶これら精神的要素と呼ぶべきもの以外に、吾々はアメリカ人の「氣分」に於て多くの鮮明な特質を見るのであり、文學作品に於ては勿論このやうな氣分が最も影響するところ深く、作品の文學的價値をもしばしば決定する。それはアメリカ國民性の觀察に於て當然觸れて來る問題であるが、第一にアメリカ人はその民族的發展の初めの境遇からして經濟的な傾向を濃厚に特つのであり、アメリカ人は經濟人と稱してもよいのであるが、このやうな國民に於てその行動は當然經濟的な動機に支配され、その思考や感覺さへもが實際的な面を離れられなくなる。それは例へば後のアメリカ哲學に於けるプラグマティズムの發生とも關聯することなのであるが、文學に於てこのやうな卽實的な傾向は極めて强く、その中の人物の性格や生活に現はれるだけでなく、作品

の氣分として濃厚な現はれを見せる。どのやうな行動も、思想感情も、現實に出發し、現實の面を遠く離れることなく、むしろ現實の面の上を滑走し、馳驅してゐる狀態である。

この事實性と密接に結び合つたものであるが、吾々がアメリカ人が對象からの刺戟を喜び、その興奮の中に生の悅びを感じてゐる如き狀態を注意しなければならぬ。アメリカ人はしばしば金を儲けることよりも、金を儲ける過程そのものに興味を感じると言はれるが、「彼らは一つの定まつた行動の結果よりも、その行動の進行中の刺戟を喜ぶ。そしてそこに觸發される自己の生の力に喜び或ひは誇りを感じる。」かういふ彼らは感情の發表を恥としない。それは誠に、喜怒哀樂を現はさざる吾々東洋人の美德と對蹠的なものであるが、すべてこのやうな特色を語りつゝ、先に擧げたチエスタトンは、アメリカ人をたとへて「帶電した針金」（ライヴ・ワイヤ）だとし、大砲の彈のやうなドイツ的ミリタリズムとの差異を巧妙に指摘してゐる。ともあれ吾々はこのやうなアメリカ人の感覺性が彼らの日常の生活に於てスポーツ・ラヂオ・映畫等の面に鮮明に浸出してゐるのを見るのであるが、そのことは文學に於ても同じ程度に眞實である。吾々はそこにこの活動的な民族、日々の社會生活と享樂の中に絶えず自ら刺戟をつくり、刺戟を求めて止まぬ民族の生々とした感情と、それに伴ふ精力或ひは速度の感じが明瞭に反映してゐることを見る。

次に今一つ擧げて置きたいことは、アメリカ人の陽氣な氣分である。アメリカ人ほど自分の生活について樂天的であり、又他人に對して寛大で友情的な民族はないであらう。これはアメリカ人が西部發展をなすやうになつて後の物質的豐富（或ひは豐富の期待）から生れたもので、彼らはこれによつて初期のピューリタニズムの暗鬱な世界觀と瘠地に生活を打ち立てようとする努力から來る絶えざる壓迫を逃れることが出來た。かくて彼らは常に未來を信賴し、人間の能力が無限に延びてゆく樣を樂しみつつ、自他の生存を是認することが出來た。そこには自然に、酷薄な氣持で他人を苦しめたり、無用な勞働や戰爭で人間の肉體と生命を浪費しようとするやうな行動が拒否せられる。卽ちそれはヒューマニズムの一つの表はれと言はなければならぬ。人間を暖い血肉を持つた人間として愛好し、その一度しか受けることのない生涯を尊重し、日々を出來るだけ幸福に明るく生きさせようとする要求は近代人の共通に持つ本能的なものなのであるが、それがアメリカ人に於ては、その有利な環境に助長されつゝ、極めて明瞭に現はれてゐるのを吾々は見るのである。フランス人のトクヴィユ（『アメリカのデモクラシー』の著者）は一八三〇年代のアメリカを見て既にアメリカ人の特徴として「安樂な生活の愛」と言ふことを擧げてゐるが、このやうな性向はその後の物質的繁榮と科學的技術の進歩に比例してますます强化され、彼らの生活

の面に具現されるやうになつた。彼らの優秀な飛行機や自動車・ラヂオ・蓄音器・電氣冷藏庫・洗濯器その他あらゆる家具や裝身具にまで現はれてゐる便利性と明朗な氣分は實に比類がない。いはゆるコンフォータブルネスは彼らの生活の身上であり、その深い背景は前述した人間愛の精神に連なるのである。かうしてこの氣分は、アメリカの文學作品に、柔かい精神的な特色と卑近な日常生活の色彩として、豐かに現はれてゐる。またそれに關聯して、アメリカの文學自體がラヂオや映畫の如くアメリカ人の日常生活にコンフォートを與へるものとして要求され、從つてそのやうな性格を帶びる場合が多いと言ふ事實も注目されねばならぬ。

次にこの樂天性に隣るものとして、アメリカ人のユーモアについて一言したい。ユーモアは各民族、各文學によりそれぞれ獨自の特徴を持つものであるが、アメリカ人のユーモアは纖細で鋭い機智を持つたフランス人のユーモアや、又實効本位のイギリス人のユーモアや、妙に大仰なドイツ人のユーモアとも違ふ。アメリカ人は純粹に滑稽なものを題材として、憎しみや、とげとげしい氣分を包まない。そして眞面目な顏で語りながら、突然何の惡氣もなくわつと哄笑する。このユーモアはアメリカ人の獨特な民主的氣分にもとづくものであり、從つて彼らがそのユーモアをもつて笑倒せんとする相手は、しかつめらしい禮服を着たやうな人爲的な階級やもつたいぶつ

た僞善者の類であり、彼らはユーモアによる形式の破壞によつて、その民主的精神を滿足させやうとする。このことは『アメリカ魂』の著者ヴァン・ダイク、『アメリカ人』の著者ミュンステルベルヒの等しく指摘してゐるところである。かういふアメリカ人は同じ笑ひにしても喜劇と言ふよりもむしろ笑劇を喜び、その味はひはマーク・トエーンの作品に殊に濃厚に現はれてゐるが、現代作家ではコールドウエルの『煙草街道』や、シュタインベックの『トーティラ・フラット』などに出てゐる粗野な笑ひの中に同じものが見られる。

×

次に吾々はアメリカ文學の性格としてそのやうな內面的な精神的な要素から離れ、それが言語乃至文體の表現にまで現はれた「味はひ」について考へたい。文學は勿論表現であり、この味はひこそはそれぞれの國民文學の性格と價値を決定するものなのである。

このアメリカ文學の味はひをどういふ風に分析し、どういふ風に呼ぶかは、何人も未だ充分な決定をしてゐないやうであるが、私はこの味はひの根底を粗野性と呼んでゐる。粗野性には荒つぽい野性のまゝの原始性或ひは素朴さを意味する一面があり、他面では又新鮮さ、若々しさ、或

ひは現代性を意味する。この原始性と現代性の結合こそはアメリカ文學の特色の大部分を覆ふものと言はなければならない。

次にこの粗野性の要素を更に分析して考へるならば、(一)生命或ひは活力の豐富。(二)傳統又は形式的抑制への反逆。自由な横溢。(三)內面的、瞑想的反省無し。外面へ、事實へ擴がり行く。(四)洗練さ、仕上げの缺乏。(五)一種の粗暴さ、苛烈さ。(六)單純に一方向に突進せんとする力は精神的であるとともに、肉體的であり、その精神的な面はピューリタニズムや開拓地精神や又自由な政治的組織の影響と關係するところが深いと考へられるが、その肉體的な面はアングロ・サクソンの特質及び新らしきアメリカ人の體力的優秀さと關係する。實にアメリカにあつては作家自身がしばしばスポーツマンであり、强健な肉體の持主なのである。(例へば(ミングウェイ、コールドウェル、ファレルの如き。)(七)アメリカ人の嗜好として原色的、明るさ、乾燥。これは氣候風土の影響と關係するところが深いのであるが、そこに新開地的な一種の無洗練、バーバリズムが出てゐることも否定出來ない。——かくて粗野性を美として分析すれば、力と豐富と單純の美と言ふことが出來よう。それは未完成の生命の姿であり、そこに混亂しつゝも將來の完成に向つて溢れて行く若々しい生命の美が見られるのである。過去の完成、ち仕上げよりも、未來の生長に

向ひ、現在は唯未來への素材として用ひられることは、アメリカ人の共通態度であり、アメリカ文化の根本的特色である。

更に吾々は現在この粗野性に加はらんとする新らしき秩序の美があることに注意しなければならぬ。それは一つの明瞭な現代性である。即ち例へば自動車、飛行機、ヨット等の形態から來るいはゆる流線型の機能的な又は造型的な美がそれであり、又料理皿、化粧瓶、彈丸等に現はれる均一で堅固明確な機械製品の美がそれである。力と速度と明晰な輪廓或は線の構成と言ふことが出來よう。これは機械文明、技術文明のもたらす美であり、野性(自然)に加へられた實用科學的理知の秩序感である。從つてその直接基礎とするところは自然(機械の加へられた自然)であり、古典美、教養美に比すれば矢張り一種の素朴美、粗野美を持つてゐる。吾々はこのやうな美がアメリカの文學の樣々な部分に現はれて、一種のスマートで新鮮な味はひを加へてゐることを見るのである。

以上吾々が見て來た粗野性の特色は、當然アメリカ文學の表現形式の中に流出し、そこに新らしいアメリカ的文章を創造しなければならない。即ちそれは(一)先づ生の眞實味と新奇性をもつ俗語の活用、そして言葉の形象等の明晰な排列、力と速度の單純な印象等によつて達成される

ものであり、ヘミングウェイの文章はそれの代表的なものであつて、イギリス文壇の注目をひきそこへ逆影響を與へてゐるとさへ見られる。(二)内面性のある文章、心理分析的ないはゆる「意識の流れ」の手法によるもの（例、ドス・パソス、フォークナー等）。(三)新らしい作品構造をもつもの、表現派的、むしろ機械的造型的構成（オニール、ライスの劇、ドス・パソス、フォークナーの小說）

かういふ文章の特質を要約するならば、それは事實描寫の細叙主義で、象徴主義の反對である

(一)象徴美、卽ち餘情美、餘白美の缺乏。——冗漫だが豐富な味はひ。(二)古典美、卽ち均整、節度の美の缺乏。——混亂するが活氣がある。(三)神秘美、卽ち濕潤、陰影、幽玄美の缺乏。——乾燥、しかし明晰である。すべてこのやうな長所及び短所はアメリカの民族性、その生活、感覺思考傾向と密接に關聯するものであり、かゝる特殊の美こそそのまゝに民族性の表現であり、そこからくる必然的なものと言へるのである。

×

吾々はアメリカ文學の本質を分析してほぼ全體を盡したと思ふが、なほ一つそれに關聯して觸れておきたい問題がある。それはアメリカ文學がその社會に對してどの樣な位置にあるか、機能

を發揮してゐるかの問題である。アメリカ文學が現實を離れられない性格を持つことは上に述べたが、その現實は文學の素材であるばかりでなく、逆に文學に働きかけその性格を決定する。そしてアメリカの社會が經濟的社會であり、經濟が政治や教育や宗教や凡ゆる文化に優位して支配的立場にあることは、文學の世界にも共通の影響を與へる。卽ち文學は經濟人の一商品として見られ、社會の需要に應じつゝ相當な利潤を擧げる手段となる。そしてアメリカ民衆はまさに映畫やラヂオの場合の如く、自己の生活に刺戟と樂しみを與へるものとしての文學を要求する。それはアメリカ人の樂天性及びその刺戟を喜び興奮を求める感受性に基くものであるが、活動的で多忙な彼等の生活が、さういふ慰安を求めることは當然であり、また夫が、オフィスにある間、退屈な時間に苦しむ主婦が、輕い明るい刺戟を文字の間にまで求めることも自然である。かうしてアメリカの產業家は、恰も化粧品や裝身具の如くアメリカ家庭の日用品として、大量の小說を魅惑的な粉飾を以て次々に生產してゆく。それは企業としても映畫產業の如く十分採算のとれる事業であり、それが豐富活潑なアメリカン・ジャーナリズムの背景と結んで、一層めざましい發展をする。そして文士達はその波に乘る以上容易に生活を立てることが出來、所謂ベスト・セラーの列にその作品が入るならば、彼は物質的な報酬に十分以上の滿足を味はふだちう。こゝに注意

せられることは、この様なベスト・セラーが大衆性を持ち乍ら、他面、しばしば藝術的にも優秀な作品であることで、この大衆文學と純文學との境界が殆ど無いことは、アメリカ文壇の著しい一つの特徴である。純文學として價値あるものは必ず大衆的な人氣をも博すると考へてもよい程である。そして作家も大衆的成功を恥とすることなく朗かに親しい態度を以て大衆にその作品を提供する。これはアメリカの經濟的社會と國民性の齎す結果であるが、それは必ずしも文學の卑俗化乃至墮落を意味するものでなく、文學が社會の需要に應へ得るといふことは、そこにその文學の機能的價値が證せられることであり、その限りに於てその文學は、存在の意味を持つのである。役立つものは良いとするのはアメリカ獨特のプラグマティズムの根本義であるが、大衆的な純文學の價値も同樣な見地から是認されないとも言へない。ともかくも實際に於て、アメリカの文學はその大衆性によつて餘り損はれる所はないのであり、却つて大衆を題材とし且つ大衆を對象とするところに、獨特の活氣を增し、その表現も生彩を帶びてくる。これは一面民主主義的社會の當然な現象とも云へるのであり、封建的社會にあつては文學は一部の裕福な教養階級の觀賞品となり、作家は一心に獨創と彫琢に沒頭する。その樣な長所を失ふことは殘念であるが、民主主義的社會に於ては文學はそれだけ明るく、開放的な成長の樂しみを味ふことが出來るのである。

そしてそこにアメリカ文學の持つ性格と表現の獨特な根據があり、又將來それがどのやうな伸展をなすかの展望が打建てられるのである。

なほアメリカの文明は物質的、科學的文明の色彩が濃ゆいけれども、必ずしも非精神的な文明を意味するものではない。精神はその物質科學或は技術の中に充分緻密な展開と生成を果しつゝあるのであり、逆に科學は精神を規定支配して、一つの科學的な世界觀をさへ成立させようとしてゐる。科學と物質はアメリカ人の生活、肉體的生活のみならず精神的生活、創意と創造と情熱に充ちた生活の中にとけ込んで、その巨大な民衆の世界を推進めてゐる。文明は物質的、文化は精神的と考へられるのは、一つの常識となつてゐるが、アメリカの社會學者の一部では、文明と文化は同義語であり、精神的物質的の差別はないものと主張されてゐる。このことはアメリカの社會、殊にその現代の社會を考へる時興味ある問題であつて、文化の差別なき所にアメリカ社會の本質はあると考へられる。そしてこの樣な世界に於て、文化の一部門である文學が、所謂物質文明と結び合ひ、或はそれに抱容せられることも當然である。卽ち文學は、過去の或文學者達が考へてゐたやうな反物質的なものでなく、又物質は粗雜で醜く卑しきが故に非文學的だと言ふべきでなく、文學は物質の中に物質と親しい交流をなして成長してゆく。從つて文學はしばしばそ

の社會の經濟的構成の支配を受けることもあるであらうし、政治や宗教の活動にも影響され、或は積極的に行動の文學としてそこに働きかけ、又廣く民衆の社會的な生活樣式によつて變改を受けるであらう。この樣な看點に立つ時、文學の發展は文化の發展に平行するものとして觀察される。そしてアメリカ文學は最もよくそのやうな研究方法に適した文學と言ひ得るのであり、そこにこの文學の特質が大きく反映してゐる。ヴァーノン・ルイス・パリントン（一八七一―一九二九）の『アメリカ思想の主流』（一九二七―三〇）はこの樣な文化史的方法によるアメリカ文學史の大著であり、劃期的な意義を持つものであるが、このやうな文學史がアメリカに生れたことは決して偶然でない。吾々はこのやうな事實からも、アメリカ文學が如何にアメリカの現實の中に成長し、現實に働きかけてゐるかの證明を得るのである。

三、その展望

以上吾々はアメリカ文學を考へて、（一）に於てはアメリカ文學の發達を、（二）に於てはアメリカ文學の性格を主題とした。從つて、或る意味に於て、（一）はアメリカ文學の過去を、（二）はアメリカ文學の現在を考へたといふ事が出來る。この（三）の部分ではアメリカ文學の未來に目を向けてみたいと思ふ。勿論それは未來についての大それた豫言ではないが、我々は十分の興味と利害の關係をさへ持ちつゝ　この文學の今日以後の發達と世界との交渉、殊に我國と文學との交渉について想像をめぐらしてみたいのである。

上に述べた處からも推定されるやうに、アメリカ文學の發達はアメリカ文化の發達と密接に連結する。今アメリカの文化は、殆ど全世界に進出し、廣汎な影響と建設の波をひろげてゐる。高度資本主義の經濟力と政治上の民主主義と思想上の自由主義は、その文化の本質として、明瞭に强力な積極的進展を示してゐる。古いヨーロッパの文化は、かくて大西洋を渡りアメリカ文化となつて非常な變化を遂げながらも、矢張りその文化の根本の動向を維持して、西へ西へと傳播しつゝ、遂に地球を一周し得たとみることが出來る。かくて今や世界史はかつて無き重要な段階に入つたのである。そしてアメリカ文學もそのやうな世界史の環境の中に、世界的な意味と役割を持たうとしてゐるのである。

アメリカ文化の影響はまことに强力である。アメリカ製の映畫や自動車その他の日用品が如何

に世界にひろがつてゐるかは言ふまでもないが、それはたゞ商品としてのみならず　そして單に吾々の生活の外面に接觸してゐるのみならず、吾々の精神や感情の中にまで侵入し、吾々の道德や嗜好、慣習をも規定してゐる。この事は今度の大戰の直前までの我國の社會にも見られた現象であり、映畫館から街頭に氾濫する青年男女の服裝や身振りにも、その印象は顯著であつたことがはつきりと思ひ出される。この樣に經濟的な進出に思想的精神的な影響を同伴することは現代のアングロ・サクソンの世界的制覇の特徴であつて、古きローマ帝國が單に露骨な武力を以てその野望を遂げようとした史實とは甚だ性質を異にする。しかもこのやうな精神的な影響は、民主主義乃至自由主義の思想を主體とするものであるが　それが上に言つたやうに吾々の日常生活の細部に於ける樣々な便益の道具を通じて、我々に與へられる感情や趣味の影響と混和してゐることが、また大なる特徴である。文學はもとより、映畫や自動車などと異り、直接普遍的に異國の民衆に享受されるものでなく、その言語的表現の理解といふ障壁を持つ爲に、當然その鑑賞者も限定され、又鑑賞の時間も遲れざるを得ない。けれども一面から言へばそれだけ文學の影響は眞摯であり深く又永續的であると考へることが出來る。そしてアメリカの文學は、まさにその樣な過程によつて、我々の生活と精神の間に侵入しつつあるのである。アメリカの文化はたゞその豐

富な物質的本質によるのみならず、その中から成長して來た獨自の科學性と技術性によつて、史上に前例なき新たな人間の生活とその世界觀をも生成しつつあることは、上に述べた如くであるが、文學の影響はその內容と表現の兩面に於て、この新たなアメリカ的特色と密接しつゝ異國の民の間にも獨自な影響を持たうとしてゐるのであり、少くともその可能なることが信ぜられる。

アメリカ文學の將來を考へる時も、その根柢となるものは勿論その民主主義的性格である。民主的文學とはどのやうなものであるべきだらうか。それは自由主義精神に基いて、人間の智能、健康等凡ゆる可能性の十分の發達を要求する。この樣な人間的教養は、封建主義社會にあつても一部階級の間に熱心に追求された理想であつたが、民主主義社會にあつてはこの理想を萬人のものとして平等の機會が民衆に與へらるべきものとする。かくてその民衆は精神的肉體的生活の兩面に於て自分の成長と生命の喜び或は自覺を十分に味はんとする。そして個人的家庭的な生活を社會的國民的生活の中に完全に融合交流せしめようとする。從つて個人の政治に對する關心は深く直接なものがあり、それが個人によつて社會が組織され、政治が發動されるとする民主主義思想の當然な現れである。かくて民主主義的文學は人間の生活の凡ゆる面に關心し、その家庭と社會の全ての面と現象に注意し、又精神の深き方面と共に生命本能の烈しく溢れる面にも興味を拂

ひ、即ち人間のすべての部分を忌避することなく平等に受け容れ、同時にそれに對して幸福な成長の刺戟を與へようとする。そして人間教養の理想（但しその民主的なる理想）の達成に助力しようとする。又このやうな文學が、殊に現代の如き時代に於て政治に關心するのは、當然なことであつて、それは政治の觀察者、分析者、批判者であると共に、しばしばその實踐者であり宣傳者である。かういふ意味の思想性と行動性は、殊に前世界大戰と今次大戰との間の二十年間に世界の文學に現はれた顯著な性格であるが、アメリカ文學にあつてはその社會と政治の民主性と國內的な烈しい經濟變動や政治的展開の爲に、獨自の鮮明な現れを見せてゐる。そしてこの樣な性格は今日愈々世界的な關聯の中に乘出したアメリカ國家の背景の上に、その文學の中にます〳〵尖銳な現れを見せるであらう。

このやうに今日及び今日以後のアメリカ文學を考へてみると、それがわが國の文學に持つであらう影響、或は持つことの願はしい影響は、決して少く或は淺いものでないことが考へられるであらう。即ちわが文學はわが國の政治と社會の從來の性格、殊にその濃厚な封建性によつて、民主的なアメリカ文學とは殆ど對蹠的特徵を持つてゐる。即ちそれは人間の生命、靈肉の完全な發達を十分に顧ふことなく　或　は本能や感情の一部を忌避し、或は思想や信念の或る物を抑壓し、

一面個人の尊嚴を深く認識することなきと共に、共同社會的生活の意義を把握する努力を缺からとする。かくてそれは人間教養の理想を完全に見つめてをらない。更に日本文學が政治的な思想性や行動性を持たないことは非常に著しい特徵であつて、武家政治時代の長い封建的束縛の中に民衆の政治的關心は完全に窒息させられ、文學者は或は實社會を逃避して風月を樂しみ、或は逆に市中の遊樂鄕に風流を追ふことによつて、自己の政治的根柢を持たない生活の心もとなさを忘れようとした。そしてそれが何時か文學の固定した性格となり、文學者が政治を考へず政治にたづさはらないことは當然なことであるとした。そこには彼等が意識しないでも强權からくるタブーがひそんでゐたのである。この狀態は、明治維新の後もなほ存續し、否むしろ却つて强化されたとさへも考へられる。タブーの長れはまさに逐年に加つていつた。かくて文學者の心は政治に對して完全に牡蠣のやうにふさがれた。この事は德川三百年から明治以後を通じ、わが文學をイ具的ならしめた大きな原因であり、それが私語的であり、或は女性的咏嘆的であつて、ひろやかな明朗性と男性的な健康性と或は深く思想に根ざした構築性を欠いてゐることは、この政治的な一面の欠陷に基くことが深いと考へなければならぬ。我文學がアメリカ文學から取り入るべき影響の重大なものがこゝにあると云へるのである。

吾々はなほ、これに關聯して注意すべき問題をもつてゐる。それは政治性や行動性はヨーロッパ文學もまた持つところであり、沈着なイギリス文學にさへそれがあり、一九三〇年頃から行動主義文學と云ふべきものが、若い世代の文學者の間に發生したが、それらの文學にあつては、その政治的社會的關心が頽廢的な或は虛無的な否定性をもつてゐる。それは殊に第一次大戰後の幻滅、自己絶望の虛脱から來たものであり、所謂危機の思想や西洋沒落の思想がこれを證示する。それは實際に於ては、古きヨーロッパ文化の長い衰退の結果であり、現代の危機に於て一層に尖鋭化され人類の救濟の貴重な武器のやうに考へられた「知性」でさへも、それが尖鋭であり纖細化されてゐるだけ、末期的な脆さとニヒルの味を包んでゐるのである。このやうな狀態に比較すると、アメリカ文學の政治性や行動性は、より素朴で粗野であるだけ、健康な建設性と自己治癒の活力をもち、その上に新しい科學と連絡する朗らかで明晰な企畫性とも言ふべきものを含んでゐる。それらは悉くヨーロッパ文化と對立する新鮮な文化の生む特質であり、大戰後の虛無感はアメリカの青年文學者の間にも現はれたけれど、それさへ强健な肉體に荷擔はれるやうにして、いつか次ぎに襲つてきた社會的困難への眞劍な關心の中に忘れられて行つた。それは民衆の生活の中に有機的に食ひ込む。かうしてアメリカ文學の政治性には、常に若々しい興味と熱意を以て

自己の實際的存在を企畫し建設して行かうとする生命力の印象が明瞭である。――そして吾々がわが日本、新しい更生の日本に、文學の政治性を求めるならば、それはこのやうな若々しい成長力をもつた政治性であるべきであり、それは結局、更生すべき日本民衆に、その古き傳統を忘れる程の若々しい目覺めの氣持を求めることであり、そこから出てくる眞摯で生き〳〵した政治的關心の中にこそ、民主主義精神も正常な發達を見せることが出來るであらう。ともかくも吾々はこのやうな關聯の中に從來の日本の文學者の概念とは甚だ相違した、廣い意味で現實的な文學者の出現を期待したいのである。

×

つぎに今日以後のアメリカ文學の價値に於て考ふべき點は、それが作りだす美の意味でなければならぬ。それは上に見てきた內容的性格に對して、表現或は形式と云ふべきだが、これこそ勿論文學の第一義的價値であり、それが世界の文學或はわが日本の文學に對してもつ意義も、十分注目しなければならぬのである。現代のアメリカ文學のもつ美は、先の章に粗野性その他の言葉を以て說明したやうに、あら〳〵しく生まの、力と眞實味をもつた美であり、色彩としては原色

的な單純さと、そしてまた明るく透徹した一種の知性美をもつものである。それは人間の生命本能の動きと現實の煩瑣な生活の波紋に、疲れることなく縛ふ所なく接觸してゐる美であり、高貴な超越や幽玄への深まりを求めない。かくしてアメリカ文學の美なるものは、古き或は傳統的な文學の美の通念に慣れたものから見るならば、直ちに美とは感ぜられ難い程新樣のものである。或はそれは美でなく醜であり、たゞの混亂であるとさへ思はれよう。そしてその意味で單純な排斥をも受けるのである。けれども實際に於て、この文學の美はそれ程難解なものではないかも知れない。少くとも現代の生活、このやうな政治と科學と經濟的活動の中にある人生の生活を是認し、そこの生を樂んでさへゐる人々にとつては、アメリカ文學の美はそのやうな生活の醸し出す當然のあやであり、從つてまたそのやうな人々の呼吸や脈搏に合つて彼らに快さを、即ち美の感じを與へるであらう。吾々は人間の生活の發展に伴ひ傳統的な美の觀念の捨てらるべき時期のあることを信じてよいのであり、またどのやうな生活でも人間の眞實に生きてゐる所には何らかの美の生るべきことを信ずる意味から、今日のアメリカ的な生活の中からアメリカ的な新しい美の生れることを當然なりと考へてよいのである。そして眞に美を味ふ廣やかで自由な感性をもつ人であるならば、この新樣の美は美としてたしかに捕へ味はれるであらう。この美、簡單に云へば

「粗野美」と名づけられようヲは、アメリカ文學の生命として推し進み流れてゐるものであり、たとへば日本の文學史を書くに、「あはれ」や「さび」を美の樣式とし、この文學の發展連環の契機として取扱ふやうに、粗野の美はアメリカ文學の發展の根本の樣式として、認識さるべきであらう。そしてこのやうな認識によつて、アメリカ文學の發展は初めて十分に把握され、またアメリカ文學の眞の理解或は愛も生れるであらう。

更にこの理解を推し進めて考へる時、アメリカ文學のもつやうな美が、將來の文學に對しても一つ意義が、ある程度明らかに推測される氣がする。即ち將來の文學は、文學が事實に即し、人間の生活（現實の日常の生活）に即し、むしろ人間の生きる努力にまじはりつゝ、文化全體の進展の中に完全に溶けこんで進展して行く故に、その美をも、そのやうな事實的な生活的な性質に於て持つ。そして美はそこに、人間の自己充實の生活、自己完成の努力と一つになつて、明瞭な生きるもの、人間に不可缺なものとして、感ぜられるであらう。それは將來の世界の、まず〳〵完全な意味に於ける人間的な生活、存在のあらゆる部分を生かした生活を樹てようとする人類にとつて、最も自然な美であるだらう。即ち吾々の古典的な美、一面に偏向しつゝ自己のうちに固い完成を求めようとする美の、到底代替することのできぬ美であるだらう。吾々は將來の文學と人間

生活の密接な關係を想像しつゝ、そしてそれが今アメリカ文學に於て最もよく具現されつゝある
ことを認識しつゝ、その文學がその獨特な美と共に、將來の世界文學の發展に持つ意義を思ふの
である。少くとも、文學に關心するものは、アメリカ文學を指標として、文學の性格と機能が、
その美と共に、徐々に着實に變動しつゝある事實に注目すべきであらう。

×

以上のやうな問題、この美の一つの事實さへも、今日の日本文學とは決して無緣ではあり得ぬ
のである。却つてそれは、日本文學の血肉の問題でさへあるのである。そしてすべては今後の世
界の動き、その民主主義大勢の中に自己を再建しようとする日本の努力の經過によつて決定され
て行くであらう。

日本は英語文學に親しむことが長い。アメリカ文學も明治の初期から讀まれ又飜譯された。け
れどもその後英語文學が日本文學に與へた影響の薄いことは驚くべきものである。日本文學の新
しい性格を決定したものは、ロシア文學であり、フランス文學であつたらう。英語はそれらの文學
を讀む仲介者に過ぎないやうでさへもあつた。ところが、數年前からいつかアメリカ文學がわが

國の文學愛好者の注意をひきはじめた。そしてイギリス文學さへ持たなかつた影響を、吾々に持
つやうにさへ見えてきた。今次大戰の直前まで、アメリカ文學の飜譯や紹介は次第に增して行つ
た。それは上にも觸れた、當時の（殊に映畫流行を中心に）アメリカナイズした日本人の生活や趣味
の變容に平行するものと云へる。ところがこの趨勢は、今次大戰の勃發と共に中斷され、アメリ
カ文學との關係もたちきられてしまつた。然し終戰後のアメリカとの交渉の復活は、たゞの平和
時への復歸とは全く異つてゐる。アメリカ文化の傳播は、有意的に行はれようとさへしてゐる。
吾々の生活へのアメリカ文化の滲潤の濃さに比例して、文學は一層直接なものとして吾々に作用
しよう。それは大戰前の親しさと、程度に於ても質に於てさへも、異るものとなるだらう。

吾々は上に、アメリカ文學のどのやうなものであるかを、かなり詳しく考へてきたが、この文
學との接觸に於て日本文學が彼のどのやうな性質をとるべきであるかは、上述の部分からしてお
のづから明瞭であらう。それはむしろ、吾々の自由でなく、吾々の今後の生活、アメリカとの接
觸交流の中に如何に生くるかによつて、必然に結果してくるものなのである。ともかく云ひ得る
ことは、アメリカ文學の影響は、今後に於て一層積極的に直接になることであり、文學なるもの
が純粹な誠實を素質とするものであるだけ、他の文化面に比して、その影響吸收は敏速でなくと

も、深く本質的なものがあり、又吾々の生活自體の變動につれて、文學は最も正直にその變動を文字の上に現はさずには置かないであらう。ともかくも吾々は、その精神に於て、氣分に於て、或はその生きた直接な言葉の驅使に於て、より民主的な性格が日本文學に實現されることを期待してよいと考へられるのである。

けれども、勿論日本文學はつひに日本文學である。この激しい文化傳播の潮流の中で作られる吾々の文學が、やはり古い東洋の傳統文化の特質に根ざしたものであらうと考へることも當然な豫想であらう。自然と戰ふ人間と、自然と融和せんとする人間との違ひ、ヨーロッパ的な「支配知」と東洋的な「解脱知」との違ひが、こゝでも感ぜられるのである。かうして文學に於ても、日本を東西兩洋の融合者だとする常識的な問題が、今や吾々の境遇から迫られたものとして、眞摯な解決を要求されてゐる。まことに日本文學は、今吾々の生活と共に、わが歴史の上でも類例の少い重大な轉機に立つてゐる。吾々はわが文學のその中からの眞實に健康な成長を希念するがそれは吾々の間の文學を愛する人達（卽ち眞實に生活を愛する人達）によつて、十分に成し遂げられるに相違ないとの期待をも持つのである。（一九四六・二月）

アメリカ文藝思潮

一、アメリカ文學の獨立

北米合衆國の最初の開拓者の一隊が、今のヴァジニアの海岸に上陸したのは、一六〇七年のことであつた。その後十三年たつて北の方マサチュセツに所謂ピルグリム・ファーザーズの一隊がたどり着く。この南と北の二つの植民地は、その風土氣候の差と成員の階級教養信仰の差によつて、それぞれ異れる產業方法と社會體制を生み、從つてまた相異る南北兩様の文化を生むこととなるのであるが、アメリカ文學なるものが全くこれらのイギリス人によつて、その植民生活のうちより新たに造り出されたものであることは、注目さるべき特色である。卽ち、アメリカには既に先住民としてアメリカ・インディアンの諸民族があり、彼らの間には神話的な叙事詩が傳承され、また狩獵農耕戰爭戀愛等を歌へる素朴な情熱と宗教的感情に溢れた歌謠が行はれてゐたのであるが、それは新來のイギリス人の耳に、文學的影響を與へるだけの魅力を感ぜしめなかつたら

しい。更に、この大陸にはフランス人やスペイン人の渡來があり、イギリス人と相爭ふ位置にあつたのであるが、今後の政治的運命はイギリス人をして壓倒的な勝利者たらしむると共に、この新世界から生れる文學を、イギリス文化を母體とする、イギリス語の文學として決定したのである。即ち、アメリカ文學なるものは、その傳統に於てその國土の風土民族に固有する原始的な遺產をうけないものである點に於て、他の多くの文學の常態にはづれてゐる。（たとへば同じ英語文學としてのアイルランド文學ともこの點で全く異つた性質をもつ。）そして更に上に云つた如く、他の渡來民族の文化と直ちに混和しその特質を中和させる如きことなく、全くイギリスの傳統を曠野の上に移植した植民地の文學として、その成長を開始するのである。

▲けれども、吾々は、この樣な出發の特異性と共に、アメリカ文學の成立の徑路について、その特色を注意せねばならぬ。即ちアメリカの文學はイギリス文學の傳統の上に芽生えつつ、その今日までの成長は、結局そのイギリス的な要素から次第に離脱せんとする經過であるとも解されるのである。それは勿論、アメリカなる國家がイギリス本國の束縛をはなれて獨立の地盤に立つことであつた根本的な變動に關聯するものであるが、しかも實際に於ては、アメリカの文學的獨立はその政治的獨立より一層複雜な、より長き年月を必要としたと云ふことが出來る。アメリカ文學がその獨立のために、先づ清算の對象としなければならなかつたものは、恐らくその初期の植民と共にもたらされたピュリタニズムの暗鬱で偏狹な信念であり、またそれに伴ふ封建的な精神であつたであらう。けれどもこれらは、その政治的獨立と、新しい產業經濟の成長によつて、半ば自然に脫却される性質のものであつた。これよりも强力にアメリカ文學をからめてゐたものは、イギリスの文學（又は文化）自體に對するアメリカ文學の尊敬であつた。即ちこれは威壓よりの離脫でなく、自己自らの愛情（又は信賴）の捨離であるが故に、却つて一層の困難を結果するものであつた。

▲フィリップ・フレノウ（Philip Freneau, 1752-1832）は、アメリカ文學を職業とした最初の人である。そしてその政治的な又は思想的な大作よりも、數篇の抒情詩によつて、アメリカの詩歌の歷史の上に、初めて眞實なアメリカ的なものをつくり出したと云はれるが、彼がそれらの抒情詩に見せてゐるものは、先づ傳統的な宗教に規制された形式的な概念による自然觀をはなれて、直接自然そのものに接しようとする態度であり、更にその自然の鑑賞にあたつて、從來のアメリカ詩の如く、イギリス本國の草花鳥獸を借りてそれを描寫しようとする如き無自覺な習慣に從ふことなく、現實のアメリカの風土のうちに成長し蕃殖する動植物の印象を捕へようとする態度であつ

た。即ちこれらの抒情詩には、アメリカの忍冬（ハニーサックル）があり南瓜（パムプキン）があり、蜜蜂（ハニービー）がありおほるり鳥（キング・バード）がある。そして勿論この様な部分的な素材的なアメリカ化は、背景そのもののアメリカ化を意味して來べきであり、更にある程度まで詩の全體的調子（トーン）としてのアメリカ的な特色を、フレノウのそれらの詩のうちに喚び起してゐるものであるが、ともかくもこの一人の詩人の業績について見る時、彼がその様にアメリカ自體の環境に注意を拂つたと云ふ極めて當然であるべきことが、彼の功（メリット）としてとりあげられると云ふことは、アメリカの文學一般が、過去の影響から自己を拔け出させるのに、どの様な困難な關係にあつたかを示す一例と云へよう。

×

アメリカ文學のイギリス文學に對するこの様な一種の隷屬的な精神は或は植民地的劣等感（コロニアル・コムプレクス）の名で呼ばれるが、この精神が支配する所、文學作品の批評に於ても、アメリカ人自身の判斷に信頼せずして、イギリス文壇の裁決に待たうとする様になる。恐らくアメリカ初期の文人は、その作品の思想や形式をイギリス文學の模範に從はせようとすると共に、イギリスの文人によつて（引いてその出版界、讀書界によつて）認識されることを大きな念願としてゐたであらう。たとへば、ワ

シントン・アーヴィング（Washington Irving, 1783-1859）が、『スケッチ・ブック』（The Sketch-Book）を一八一九年ニュー・ヨークで出版した時、非常な好評で迎へられた。しかも著者自身はイギリスの方の評判を最も氣にかけて、それがイギリス批評家の賞讃を得ようと云ふ自信もなく、不安のうちに消息を待ちわびてゐたが、終に友人がその讃辭をのせた新聞切拔を送つてくれた時、アーヴィングはあまりの喜びに「終日神經をたかぶらせ、その成功に殆んど瞻をつぶされた形で、これはとても眞實ではあるまいと心配し」たのであつた。そして『スケッチ・ブック』は、そんな評判や、ウォルター・スコット（Walter Scott）の盡力によつて、當時のイギリスの出版王たるジョン・マレイ（John Murray）に、從來アメリカ作家に支拂はれたことのない巨額の報酬を以て出版される幸運をかち得た。かくてアーヴィングは一躍（彼の友人の言葉によれば）「ロンドンで最も有名な男」となるのであるが、この祖國に於ける評判が、更にアメリカの世評に反映することは云ふまでもない。

この様な拜英的な態度は、また當然その作品自體に於ても、イギリス人の思想感情を傷けまいとする用意となつて現はれる。アーヴィングは、その『大草原紀行』（Tour on the Prairies）に序文を附して、アメリカの國土の長所を辭を極めて賞揚したが、同書のイギリス版ではこの序文をわ

さと削除してしまつた。また、ブライアント（William Cullen Bryant, 1794-1878）が當時のアメリカ文學者の大勢にもれず、その詩集をイギリスで出版することを熱望してゐた時、アーヴィングはその出版編纂の世話を引受けたが、彼はその詩集を特にその頃ロンドンで反アメリカ的態度の強硬な詩人ロジアズ（Sammel Rogers, 1763-1855）に獻げ、その上に彼の好意を得んとして陳辯的な書翰を送りまでしたが、更に驚くべきことは、その詩集中の The Song of Marion's Men と題する詩のうちの

The British foeman trembles

なる一行がイギリス人の誇を傷けんことを恐れて、これを

The foeman trembles in his camp.

と改める樣に計らつた。吾々はまたアメリカ小說家の大先達と云ふべきクウパア（James Fenimore Cooper, 1789-1851）が一八二〇年その處女作を世に問はんとした時、自己の名を記すことを避けて、Precaution, by an Englishman と表題をつけたと云ふ挿話まで傳へられてゐる。この樣な挿話をさぐるならば、作家の大小に拘はらず、隨所に興味ある例を見るであらうが、獨立戰爭當時すべての方面に狂熱的に爆發した反英的態度の反動として、この時代には一層濃厚な親英の氣風

が生れ、文學者の間にもその植民地的劣弱感を極端な程度に迄押し進めたのである。しかもそれは更により近代の作家の場合にまで傳はつてゐると考へることが出來るのである。

なほ、この樣な態度に關聯して、一層重大な結果をもつものは、アメリカの作家をアメリカ人が見るに當つて、意識するとせざるに拘はらず、自己の奉ずるイギリス的な範式に從つて、これを評價しようとする態度である。これは殊に、東部地方の古き植民地で、經濟狀態の充實と共に上層ブルジョアの階級が生ずる形勢に至り趣味教養の尊重が濃厚になつた地方に於て、著しく現はれた態度と云ふことが出來る。エマスン（Ralph Waldo Emerson, 1803-82）の時代はこの地方で植民地意識を征服しようとする文學者自身の努力が最も烈しかつた時代と云ふことが出來るが、それでもホーソーン（Nathaniel Hawthorne, 1804-64）の記す所によると、當時出版業者はアメリカ人の作品など相手にせず、稀に知名の作家がとりあげられるだけで、新作家は自分で損失の保證をしない限り全く問題にならなかつた。かう云ふ一般の風潮は、自然にまた文學者の態度を束縛して、理論としてはともかく、彼らの實際の作品に、イギリス的な特色を依然として保たしめる結果となつた。彼らの間から、思想・形式とも初めて最もアメリカ的な存在として現はれたホイットマン（Walt Whitman, 1819-92）や、少し降つて、西部地方の特色の一面を最も鮮明に具現したホ

ーキン・ミラア（"Joaquin" Miller, 1839-1913）が、その様なアメリカに拒否されて、却つてイギリス人のうちに支持者を發見した（ミラアの如きは故郷を見すてて一時ロンドンへ移住した）ことは、彼らの作品が單に非東部的と云ふばかりでなく、東部の植民地的コムプレックスが、イギリス的傳統を批判の規準としたことを示すもので、その様な成心をもたざる英本國が、却つてこれらのアメリカ的な價値を認識したと云ふ皮肉な結果に至つたのである。

なほ、更に附言するまでもなく、この様なアメリカ人の拜外傾向は、イギリスのみならずヨーロッパの古き文化諸國に対しても持たれたものであつた。アメリカの重要な思想家や文學者に、ドイツ、フランス、イタリア、或はスペイン等が、資材と影響を供してゐることを、吾々は容易に指摘し得るであらう。それは、それら大陸諸國への留學又は旅行等によつて直接その思想藝術のもたらされるものが多かつたとともに、文化の傳統又は根柢をもたざるアメリカにとつて、それら諸國の存在自身がひとつの權威として遠望されることは、當然のことであつたと云へるのである。

×

アメリカ文學は、この様な地盤と雰圍氣の中にあつて、自己を眞實につくりあげるためにかな

りの年月を通過しなければならなかつた。即ち、眞實「自己の精神」を以て「自己の現實」を受用し解釋し再現することが、容易に達成されなかつたのである。そしてそのためには、唯、文學的（或は文化的）自覺と　ふことが必要であるばかりでなく、それは根柢に於てアメリカなる國家の完全な獨立に、そして國民的意識の確立に連らなるべきものである。アメリカ獨立戰爭は一七七五年から八三年に及んだが、アメリカの獨立はその時眞實の意味に於て成就されたものでなく外はイギリスその他諸國との交渉が緊迫をつづけると共に、内には産業の開發政治の統整の急を要するものがある。尨大な國土に散在する民族は、またそれぞれの環境に規定される經濟組織を生み、從つてそれに適應する政策を要求し、それに向つて行動する。かうして、アメリカはその内訌する混亂の必然のクライマクスとして、更に南北戰爭（一八六一―一八六五）を勃發する。この戰爭は南部地方の農園奴隷制度の壞滅と　北部地方の近代的産業の確立を意味するものであると共に、アメリカ諸州の眞の合一を完成し、既に戰爭中より西方の未開拓地方に伸展しつつあつた人民の活氣は、それらの地方を逐次に國家の體制の中に吸收するのみならず、更に海外にまでアメリカの國族を押し進めようとするに至つた。即ち、アメリカはここに自國の組織と國力をかためし、進んで國際的な成長の段階にはいらうとするのである。南北戰爭は、かうして、アメリカの

眞の獨立を成就した最も重要な意義をもつのであつて、The Rise of American Civilization の著者ビアド (Beard) の如きは、獨立戰爭に對してこれを特に「第二革命」の名で呼ぶことを主張してゐる。

アメリカ文學も、まことに、この南北戰爭の頃より、はじめて眞實の獨立の足がまへをして來たと云ふことが出來る。しかも、國家或は國民が、その樣に重大な建設の事業に熱中してゐる時は、文學はなほ直ちに新しい態勢に移ることは困難である。それは、一つには、その樣な環境が文學の如きものを靜思する餘裕を與へないことによるが、他の一層重大な理由は、文學（乃至藝術）は、さう云ふ社會情勢がある發展の段階にまで達し、それが國民の生活或は進んで思想感情を、十分に規制する時に至つて、始めてそこから眞實に價値ある作品を生み出すものであるからである。かうして、文學は、屢々考へられる如く、常に他の學術に先だち、また政治經濟の展開に先だつ敏感な豫言者の役割をなすことは否定出來ないが、同時に文學が現實の動搖の中では躊躇する心が深く、しかも現實の安定をまつて、そこから他の何ものも及ぶことの出來ぬ眞實な再創造をなすことも事實である。かうして、アメリカ文學も、南北戰爭によるアメリカ國家の眞の獨立に、むしろ追隨する形に於て、徐々に自己の獨立を完成したと考へることが出來る。

ヘンリ・ヂェイムズ (Henry James, 1843-1916) はその『ホーソーン傳』(Hawthorne) に於て、ホーソーンのアメリカ作家としての比類なき天才的な藝術を讃へながら、彼の業績が、周圍のアメリカ社會の「巨大多樣豐富」なるに比べ、餘りに纖弱簡素であることを指摘する。しかし、その矛盾は、一つの「有益な教訓」を示すものだと云ひ、「藝術の花はただ土壤の深い所に開く、少量の文學をつくるために多量の歷史がいる、一人の作家を活動させるためには一つの複雜な社會的機構が必要だ。アメリカ文明は今日までに花をつくるより外にせねばならぬ仕事があつた。そして作家を生み出す前に、彼らが書く材料となるものをそろへて置くと云ふことを賢くもやつて置いたのだ。」と云ふ。ホーソーンの天才を以てしても、文學と環境のこの教訓（モラル）は破ることが出來ぬ。まして彼の如き天才の出づることは極めて稀であり、しかも一方アメリカの現實は、ホーソーンの製作時代より更にますます「巨大多樣」な發展をして來たのであるから、その文學がその現實から眞にアメリカ的な作品を、しかも（ここにアメリカ文學があると示し得る樣に）十分多量につくり出すことが出來るまでになるには、南北戰爭後、さらに時を經ねばならなかつたのは當然であらう。

×

かうして、アメリカ文學は、アメリカ國家の確立、國民意識の成熟によつて、一方眞實アメリカ的な本質と價値をもつ作品をつくり出すと共に、他方その様な國民的自覺は、長くこの國の文壇と讀書界を支配した拜外的な植民地的劣等感（コロニアル・コムプレクス）を解消する。吾々はその過程を、恐らく、一八七〇年頃から二十世紀初頭にまで置いてよいであらう。或は更に完全な國民化を考へるならば、世界大戰を超えて、アメリカの世界的な經濟制覇の時期にまで延長すべきかも知れない。しかし、それにしても、その大きな前段階として、一九〇〇年までに一時期を劃することは適當であるだらう。けれども、この關聯に於て、たとへば、ユージン・オニール（Eugene O'Neill, 1888-）の『地平の彼方』（Beyond the Horizon）がブロードウエイのモロスコ劇場に上演され、大きな成功をかち得たのは、一九二〇年のことであつたと云ふ事實の如きも記憶さるべきであらう。なぜなら、これはオニールの戯曲が商業劇場の手にとりあげられた最初のことであるばかりでなく、アメリカ人のペンによる眞に文學的な脚本が、アメリカ大衆の前に上演され成功した最初の記錄であると云ひ得るからである。即ち、アメリカ戯曲乃至演劇の、アメリカ的な獨立は、やうやくこの一九二〇年を以て一つの成就に達したと云ひ得るからである。吾々は更に、一九三〇年に至つて、ノーベル賞が初めて大西洋を渡り、シンクレア・ルイス（Sinclair Lewis, 1885-）に授けられ、つい

で一九三五年にはオニールに、一九三七年にはパール・バック（Pearl Buck, 1892-）にと、矢つぎばやにアメリカ作家に授與されたことも想起すべきかも知れない。少くともこのことは、アメリカ文學がこの三〇年代に入つて、今は世界的な認識のうちに、アメリカ文學としての存在をもつ様になつたことを示すものだからである。

アメリカ文學の獨立をここにまで辿つて來て考へられることは、それは一面に於て當然なことでありながら、この様な精神的な活動のそれ自體としての完全な組織化と、殊にそれに對する自己認識の確立と云ふことが、どれ程困難でありまた時を要するかと云ふことである。そもそも、アメリカ文學と云ふものが、アメリカ自身の學界に於ても、いつ頃から一つの明確な對象、又は價値ある主題として取扱はれるに至つただらうか。パティー（Fred L. Pattee）がその著 The First Century of American Literature (1935) の序文のうちで語るところによれば、最初の正式（レギュラー）なアメリカ文學史と云ふべきものは、ナップ（Samuel Lorenzo Knapp）の Lectures on American Literature (1829) であらうが、アメリカ文學史の最初の系統的（システマティク）な著述は、それより五十年後、リチャドスン（Charles Francis Richardson）によつて初めてなされたのであつて、即ち、A Primer of American Literature (1878) に始まり、History of American Literature (1886-1888) 二卷で完成したのであ

る。このリチヤドスンは、ダートマスの大學で一八八三年英語（イングリッシュ）の講座を擔任することとなつたが、彼は先づ科目表に一週三時間の「アメリカ文學」の講義を加へた。「この行動がどんなに過激（ラディカル）な性質のものであつたかは、今日の人々には理解できないだらう。當時國中の大學でこの講義目を認めてゐる大學は殆んど一つもなかつたのだ。」とパティーは云ふ。即ち Kate Sanborn は Smith College で一八八〇年彼女の所謂 "American Belle Lettres" の講義を開き、一八八一年にはミシガン大學で、Moses Coit Tyler が「アメリカ史」と云ふ擬裝の題目で講義を授け、それを後に植民時代の文學史として出版したが、その一年後即ち一八八三年には、ウィスコンシン大學の教授 J. C. Freeman がニュ・イングランドの諸作家について講義をしてゐた。數へればそれ位のもので、「それ以外アメリカの大學でアメリカ文學史の講義はどこにもなく、またアメリカの出版物のうちでこの題目を扱つたものはない。」とパティーは云ふ。これが今から僅か半世紀前、アメリカ自身の學界に占めてゐたその文學の立場なのである。

一つの強大な文明國に於て、その文學が「獨立」した經過をたづねると云ふことは、一つの奇異な仕事であると云はれ得るかも知れない。しかし、アメリカ文學にあつては、その「國土」に於ける文學的傳統と云ふものはないのであり、傳統としてはイギリスのそれが、しかも階級、教

養、職業に於て（餘り文學的ならざる）限られたる少數者によつて携へ來られたに過ぎないのである。その傳統は一つの惰性的な、また感傷的な本國崇拜によつてアメリカ人の文學觀を束縛する以外、それ自身として（イギリス文學の一部、又は一分派としての形に）順當な成長を遂ぐることは得られなかつた。そのためには、アメリカの國土は、あまりに特殊な風土と豐富な資材をもつて居り、從つて獨特な產業と政治經濟の組織を生み、その上に、イギリス本國に見るを得ない多くの異人種の流入混在を招いたのであつた。かくて、アメリカに、アメリカ文學なるものが生れ、その一見非文學的な困難な境遇の中から、次第に特殊の存在を現はして來たことは、當然な結果であつて、更にアメリカの政治的獨立と國家的統一は、それを、形式に於ても實體に於ても、完全なものへと導いて來たのである。

アメリカ文學の成立は、かうして　イギリスの傳統を受けながら、そして勿論その本質の重要な一部を引き伸ばしながら、一面その傳統の殼を破り脫ぎ、その蔭から、自已の新たな力强い體軀を成長させ現出させて來た經過であると云ふことが出來る。即ちそのコースは、一本の直線の上昇の形でなくて、一方下降する線とそれを斜に截つて上昇する線との交錯の上を通つてゐる。これは一つの文學の發達として、殊に近代の、吾々の眼前にまで展開されて來た事實として、特

異な例と云ふことが出來よう。そして、アメリカ文學なるもののもつ特質と、その將來の興味ある發展性は、この樣な「獨立」の經過に密接するものに外ならぬのである。

二、ピュリタニズム

ピルグリム・ファーザーズが一六二〇年アメリカに渡つて來た時、その人數百二名のうち眞に宗教的動機をもつて來たものはその三分の一に過ぎないだらうと推定される。即ちその他のものは、この新大陸に土を獲得し 苛稅を免れて、新たな經濟生活の途を開かうとして來たものである。このことは、ピルグリム・ファーザーズを全く聖なる使徒の群であるかの如く考へて來た單純な常識を破るものであると共に、既にその最初の移民の團體の中に、この樣に宗教的な分子と世俗的な分子が混淆してゐたと云ふことは、アメリカの其後の文化の（從つて文學の）發展が、結局この二つの分子の相剋と協同によつてつくりあげられたものであると云ふ見解を、具體的に圖

解する如き興味ある事實である。

けれども、それにも拘らず、この團體は、その少數の信仰者によつて、宗教のみならず、政治經濟の活動をも組織され指導されたのである。更にその十年後、所謂「大移住（グレイト・マイグレイション）」が始まり、ボストンを中心にマサチュセッツ灣植民地が形成されるに至つても、その樣な信仰者中心の統治體制は、いよいよその大きな規模のうちに強化されて行くのである。そして、プリマスのピルグリム達の信仰が、初めから自由平等の傾向を濃くもち、教會や政治の組織にもその精神を示してゐたのに對し、ボストンの指導者達の宗教には、ピュリタニズムの嚴格な統制服從の要求が、強く支配してゐたことも注意されねばならぬ。

即ち、アメリカの初期に、ピュリタンの分子がその強い精神的要素をもつて流入して來たとしても、彼らの中にはおのづから二つの種別があつた。その一つは、純正な意味の分離派（ディセンティア）であつてコングレゲイショナリズムの自由な自治的精神によるものであり、ピルグリム・ファーザーズにその流れを傳へるものであるが、これに對して、同じくプロテスタント運動のうちでも保守的なハイ・チャーチ的な右翼から渡來した一派は、その信條を嚴正なカルヴィニズムに置くものであつて、ボストンを中心に、一つの神政（シヨクラシイ）の社會を建設する。そして先の自由精神の分子は、次第

に地理的には分散し、正格な教會組織を求めようとしなかつたのに對し、ボストンの當局者は、プリマス植民地のコングレゲイショナリズムを踏襲しながら、その行政方針のあまりに民主的であることを感じて、教會を中心とする全く中央集權的な組織を結成して行つた。そしてその組織と精神が、壓倒的に所謂ニュ・イングランドの地域を支配することとなり、プリマス植民地の中に含まれてゐた自由精神は、獨立農民の間に排出され、地方的に自由な精神運動の形に動いて行つた。かうして、初期アメリカの思想界にあつては、ボストンを中心とするカルヴィニズムの教義が、全く優越的な立場を占め、しかも殆んど二世紀に亙つてその影響を保つこととなるのである。

吾々は勿論、かの眞正な分離派的な精神の行方を見のがしてはいけない。それは、結局後のアメリカの宗教界の樣々な展開のうちに重要に作用して來るものであり、アメリカの宗教思想從つて文藝思想の大きな特質をつくるものである。吾々はむしろ、アメリカの國民精神そのもののうちに、その活動が續いてゐることを認むべきであらう。けれども、初期アメリカの文學の思想的背景を考へるにあたつては、先づボストン的な清教徒思想の存在に注目せねばならない。

これらの清教徒は、大部分イギリスの中流階級に屬するものであるが、藝術乃至文化的教養に

必ずしも冷淡ならざる上層中流階級よりも、下層中流に屬するものであつた。彼らは文學藝術のすべての形式に同感をもたないものであると共に、宗教思想に於ても、溫かな潤ひある人間的な感情を尊重するよりも、正義（ライシャスネス）の意識强く、階級の區別に敏感で、中央集權による統制の嚴格さを喜んだ。そしてこの傾向は、實際の植民地の開發の困難、即ち、ただ命令と組織の力を以てこの新しい土地を征服し社會を結成すべき實際の必要のために、一層に促進されることとなつた。アメリカ初期の生活が、この樣な種類の（特に下層中流の）清教徒によつて組織され支配されたものであることは、殊にアメリカの文學の發達を考へるときに、（その文學の運命に大きな影響をもつたものとして）留意されねばなるまい。

×

しからば、これら初期清教徒の思想――所謂ピュリタニズムは、どの樣な特質をもつものであらうか。それは、カルヴィニズム中でも殊に嚴正な保守派に屬するものと云ひ得るのであつて、カルヴィニズムの基本信條とする、選拔（エレクション）または豫定（プリデスティネイション）（人間の運命は神によつて豫定され、ある一部のもののみ神の選拔にあづかつて救濟せられると考へるもの）、意志束縛（ポンデイウ・オヴ・デ・ウイル）（人間は自己の行動を決

定する何らの自由をもたぬとするもの）、堅忍恩惠（バアシヴィアランス）（選ばれたる聖者はその正義を執つて惡と闘ひ、終りまで忍ぶことによつて窮極の救濟にあづかるとするもの）、の如き信條を固執するものであるが、それらは結局、人間なるものの墮落性、その全惡（トータル・デプラヴィティ）の觀念に連絡するものであり、原罪を負ふ人間は、到底癒やすべからざる程邪惡なもので、自己の行爲によらずただ神の選びによつて救濟されるとするのである。

この樣なピュリタンの思想にあつて、文學の見地から殊に注目しなければならぬのは、そこに定められた人間の位置であると云へよう。即ち、吾々人間は、宇宙の外にあつてこれを支配する全智全能の神に對して、譬へやうもない位卑賤な位置にある。彼らは何ごとも自己の意志によつてなすことは出來ない。勿論それによつて自己の運命幸福をひらくことも出來ない。否、この世界自體がひとつの固定した被造物であつて、進化改善と云ふ如き可能性をもたぬものである。そして人間はその中で、神よりの啓示をうくる外、全く無智の暗のうちに生くる外ない。文學と云ふものが、結局人間のどの樣に生くるかにかかはるものであり、その意志と感情がどの樣にその環境に作用するかを資材とするものとすれば、この樣なピュリタンの人間觀が、文學の發芽成長に、どれ程不適當なものであるかは云ふをまたないであらう。實際に於て、アメリカの今後の文

學の發達は、植民地コムプレクスからの脱却と共に、このピュリタニズムへの反抗の形に於て、理解され得ると云ふことが出來るのである。

しかも、このピュリタニズムは、その宗教的信條としての選民（エレクト）と罪人の差別觀を、政治の實際に適用し、教養門地財產等に於て優越した少數者が、教會の教役者と結合して、多數の一般人を思想と生活の全般に於て統制支配する社會形態をつくつたのである。それはすべての點に於てデモクラシィの思潮と背反するものであるが、ピュリタニズムにこもる强靱な信仰性と、實際の新大陸の風土產業からの必要は、この樣な社會を堅固に持續させ、そのうちから次第にそれに適應する政治觀と政黨をつくり、一六二〇年から一八〇〇年の頃まで、（初期の純粹に教會中心の寡頭政治は勿論そのまゝの形で永續することは出來なかつたけれども）ニュ・イングランドの全域に、長くこの思想を君臨させたのである。牧師マザー父子四代にわたる所謂マザー王朝（Mather Dynasty）はさういふ權威の代表的なものであつた。

ナサニエル・ホーソーンの小說『緋文字』（The Scarlet Letter）は、この初期淸教徒の社會を背景にとつたものであるが、この名作の構成をつくりあげてゐる骨格は、「罪」の觀念であると云ふことが出來る。即ち、ここでは牧師ディメスデイルと、その間に愛欲を結んだ女性ヘスターと

ヘスターを結婚の罠に捕へた本夫ティリンワスと、それぞれに罪の荷を背負つて、その罪に苦しみ、その罪の刑罰を受けながら、その中から開かれる救ひの途に――この悲劇の解決のカタストロフイに縋り寄らうとする。清教徒の人々にあつて罪は一番の關心事である。「彼らは神の選民（エレクト）となるべきものである以上は、（その當然の證據として）罪なき日常を送るべきものと考へる。罪を既に明らかに犯したものは、もはや紛ふことなき凡下の一般人間であり、神の救ひに漏れたものである。かうして彼らは、その日々に於て常に罪を反省し罪に關心する。唯、この様な關心は、個人の（即ち自己の）救ひを眼目とするものであり、罪に墮ち行く他人を如何にして救ひ、或はかくの如き罪の現象をつくる社會の缺陷を如何にして治めるかと云ふ如きことは、その反省の中にはいらず、彼らはそこに責任を感じようとしない。『緋文字』に於ける各人物の罪の惱みも、結局この様な個人的な惱みであり、ホーソーンもその様なものとして、彼らの罪の世界を取扱つてゐるけれども、同時にここに注目すべきは その様な個人主義をもつ清教徒が、他人の罪に對し（それを救ふこと許し慰めることを考へないでも）、それを罰し責めようとする態度に於て、極端な不寛容（イントレランス）の方針をとつたことであつた。即ち彼らの個人主義は、個人の自由平等な生命の尊重の上に築かれたものでなく、神と自己との間の關係に於て、ひたすら自己を正しくし自己を救はうとする念

願から生れる、利己的な性格のものであると云ふことが出來る。そしてこの様な利己主義と、酷薄な他人干渉主義とは意外に近い距離にあるものであり、殊にそれが清教徒の場合の如く、「熱情」的な信念に驅られ、選民としての優越感に裏づけされる時は、一層無反省なものとならざるを得ないのである。『緋文字』はこの様な點に於て、ニュ・イングランドの當時の宗教思想や社會狀態について、興味ある示唆を與へるものであるが、更にこの様な「罪」と「罰」の小説として、この作品のもつ陰鬱な暗黑の色調も注意さるべきであり、それはまた當時の清教徒の心理の色であるとも云ふことが出來るのである。即ち、そのカルヴィニズムの信仰によれば、罪あるものが救ひを絶望するは當然であると共に、罪なしと自ら考へ自ら努力して神の選拔を期待するものも、その必死な希望は眞に樂天的な悅びの心地であることは出來ず、しかもその希望さへ、屢々自信をおびやかされることによつて、暗黑な不安への後じさりとなるからである。『緋文字』が、ヘスターの胸に縫ひとりした眞紅のA字の焰をのぞき、全面的な濃い闇の影に包まれてゐることも、當然であると云へるのである。

――ピュリタニズムは、ホーソーンの天才によつて、ともかくも『緋文字』の傑作を生んだ。しかし、當時のピュリタン自身の手から、文學の名に値ひするものを期待することは勿論不可能

である。彼らは、文學のいとなみそのものをも、それなりに是認することは出來なかつたであらう。この時代に書きのこされたものとしては、記實的な歴史や日記の類にすぎず、韻文には、ウイグルズワス（Michael Wigglesworth, 1631-1705）が、審判の日の人間の苦惱を描いた詩篇が、暗い民衆の心を長く殘忍ひきつかんでゐた事實を見るのみである。そしてアン・ブラッドスツリート（Anne Bradstreet, 1612-1672）が、その作品の中でも、抒情的な内省的な僅かの詩によつて、早咲の野花の様に、その存在をみとめられてゐるのである。

三、ヤンキイズム

ニュ・イングランドの神政政治（シオクラシイ）は、一六八九年、イギリス國王ウイリアムによつて、從來正規の教會員にのみ許されて來た參政權を財産資格に應じて一般市民に與へることに決定された事件によつて、一つの劃期的な崩壞過程に入つたと云ふことが出來る。即ち、それまでは教會中心の

一種の自治體であつたものが、單純な國王の植民地（ローヤル・コロニイ）となつたのである。そして以後、ニュ・イングランドは、教會派の種々な畫策や努力にも拘らず、必然的な世俗化（セキユラリゼイション）の途をたどるのであるが、この様な結果が生じたことは、既にこの植民地の發足の當初に於て、その因子を含んでゐたものと云ふことが出來る。即ち上にも述べた如く、その移民群のうちには、經濟的な動機により渡來したものの比率が、甚だ高いのであるが、ニュ・イングランドの風土と地勢は、これらの移民を生活につかしめるにあたつて、そのうちの非自由民（ノン・フリーマン）にも適當な面積の土地を、自由保有不動産（フリーホールド）として分け與へ、自作農として開墾を行はしむることを適切なりとした。そしてこの方法は（教會出席の強制等の束縛にも拘らず）當然教會統制の外に分立しようとする獨立の自作農民層を生ぜしめた。次ぎに、移民中の商業的傾向をもつ分子は、利益薄き荒地の農耕に從ふよりも、賣買交易の途によつて産を築かうとし、そこに有力な商人の階級を生ぜしめたが、彼らはその富の力によつて次第に植民地の支配權に大きく參與する様になり、勿論初めは教會と結び教會の忠實な支持者として行動したが、彼らの事業が産業主義の規模と實力をそなへて來るに從つて、封建的な教會統治の束縛をはなれ、個人本位の自由な商業活動の世界に入らうとするやうになつた。

サミュエル・シューアル（Samuel Sewall, 1652-1730）は、この様な商人階級の擡頭をしるしづけ

る大きな存在である。彼は當時の植民地第一の富を積むと共に、ハーヴァードの出身としての學歴もあり、長く行政の中心に參畫し德望たかき判官としてその職に盡瘁したが、自ら支配階級の一人として教會中心の古き制度に勿論反對するものでなかつたが必ずしもそれの絶對な擁護者でもなかつた。彼ののこした日記は一六七三年から一七二九年に及び、當時の社會生活の緻密な記錄として、歴史上文學上甚だ大きな價値をもつものであるが、その中で、ある時行列のうちで行政官らが聖職の牧師らの先頭に立つてゐると云つて、一人の牧師が怒つてシューアルにくつてかかつたと云ふ挿話が記されてゐる。シューアルはともかくあとで御馳走をしてその牧師をなだめたと云ふことであるが、この様な小事件も當時の過渡的な潮流の動きを示す指標として意味をもつと云はなければならない。

かくて、ニュ・イングランドに、固い根を張つたピュリタニズムも、次第に崩壞、或はある點に於てはむしろ變質して來る。そして、このピュリタニズムに代つて來た商業精神が、所謂ヤンキイズムである。元來、Yankee とは、恐らく初期ニュ・ヨークにゐたオランダ移民が、コネチカト州のイギリス移民を、John に對するオランダ語の Jan の指小辭 Jankin の名を以て呼んだことに始まるのであつて、コネチカトをも含む東北諸州ニュ・イングランドの住人を指したのであるが、それが南北戰爭から北部一般諸州の住人を意味することとなり、やがてすべてのアメリカ人を呼ぶ名稱となつたことは、一面かのヤンキイズム——その商業精神とそれがもとづく產業主義が、ニュ・イングランドの一角から、全アメリカに擴大するまで旺盛なものとなつた經過を示すものと云ふことが出來るのである。

ニュ・イングランドの清教精神は、勿論このヤンキイズムの氾濫のうちに沒してしまつたわけではない。文學の世界について見ても、例へば、ブライアント (William Cullen Bryant, 1794-1878) の作品に示されたもの、殊に初期の詩に於ける、「死」の諦念を中心とした神慮への畏敬と寂莫のうちに清澄な安心を求めようとする希願の態度の中に、吾々はカルヴィニズムから脈絡をひく嚴肅な感情の、よき詩的な現はれを見るのである。更にこのピュリタニズムは、同時代の詩人ホイッティア (John Greenleaf Whittier, 1807-1892) をも含む、かの奴隷解放運動のうちに表現されてゐると考へることも出來るのであつて、ホイッティア自身はカルヴィニズムよりも自由な傾向にあるクウエイカアの傳統に屬するものであるが、解放運動に於ける運動者の强烈な正義感と鬪爭の態度には多分にピュリタン的な色彩があり、ニュ・イングランドの清教徒の個人的な救濟思想が、ここでは社會的責任に立つ人道主義の觀念に移つてゐることが、重大な變化と云ふことが出

來よう。解放運動は獸身的な卽時解放論者のギャリスン（William Lloyd Garrison, 1805-1879）を中心動力として、嘲笑彈壓のうちに次第に力をひろげ、文學の世界に於ても、ホイッティアの外にローウヒル（James Russell Lowell, 1819-1891）の熱心な參加を得、更に、エマスンや、ソーロウ（Henry David Thoreau, 1817-1862）にまで反響を呼ぶのであるが、それは南北戰爭に連らなることによつて、終にアメリカ文學に決定的な變換をもたらす動因に働くこととなる。

南北戰爭後に於ても、ピュリタンの精神は、政治淨化の運動や勞働者生活の改善や禁酒の運動等の中に、その道義感と强固な禁斷的意志として動いて來てゐると云へよう。そして恐らくそれは市民大衆と財閥階級の中間にあつて、アメリカ人民の教養と輿論の中核をなす中流階級に、殊に强く生きてゐる精神であらう。卽ちこれら中流階級はまた、アメリカのプロテスタント教會の脊柱をなすものに外ならぬが、彼らの間には、勤儉眞摯克己と云ふ如き氣風と共に、初期ピュリタンの特性が、紛れもなく生きのこつてゐるのである。更に、吾々は、この十九世紀末尾の所謂鍍金時代（ゲルデッド・エイジ）の、致富と罪惡と俗趣味の時代に次いで、ジャーナリズムの世界に「下肥かき」（マック・レイキング）の風潮が起り、政治惡の剔發に民心を煽り立てた現象を見るのであるが、更に純粹文學の世界に於ても、マーク・ツウェイン（Mark Twain, 1835-1910）からドライザア（Theodore Dreiser, 1871-1945）ル

イスの線へと伸びるリアリズムの文藝に於て、惡への憎しみとその假借なき暴露が、一つの著しい態度として現はれてゐることを見る。實にそれはアメリカン・リアリズムなるものを他國のリアリズムから區別する一つの特質と考へてもよいかと思はれるのである。今假りにこのジャーナリズムと文壇を通ずる風潮が、多數讀者の感興を挑發しようとする商利的な動機を少なからず含んでゐるとしても、それは結局アメリカの一般民衆の間にこの樣な「他人の惡を憎み責め」ようとする精神の下地（したぢ）があることを示すものに外ならない。そして少數のすぐれた作家に於ては、彼らの作品がその樣な讀者を動かすことの力强さに應じて、それら作家の魂のうちに、この破邪の念が如何に燃えてゐるかを見得るのである。かうして、この一團の現象の中に含まれてゐる精神は、そのよき理想性とともに、時に不寬容な正義の態度に出ようとするピュリタニズムの傳統に通ふものがあると思はれるのである。

×

ピュリタニズム乃至カルヴィニズムの哲學的根據は、十八世紀の前半に至り、イギリスより傳へられたロック（Locke）の經驗論に基づく合理主義により、その豫定說（プリデスティネーション）や全的惡說（トータル・デプラヴィティ）

を破壊され、教會關係者のうちにも動搖と不安を生じたのであるが、産業機構の發展と實際生活に根ざす自意識の成長は、理論の上のみならず、政治經濟への働きかけの面から、ピュリタニズムを次第に排除してしまつた。けれども、これに代つたヤンキイズムの興隆と擴布のうちにあつても、ピュリタニズムは決して死滅したのではなかつた。その精神と作用のうちで、生くべきものがよく働いてゐることは、上に概觀した如くである。吾々は更に、ピュリタニズムが、ヤンキイズムと、その本質に於て如何に流通する所があるかに注意しなければならない。

ピュリタニズムが、物質的繁榮の地盤に立つヤンキイズムと矛盾し衝突するものであり、そのために崩落消滅の路を辿つて來たことは表面の事實である。けれども、さう云ふ事實の反面に於てピュリタニズムはヤンキイズムとの接觸によつて、適當な分解と變質をとげ、或はヤンキイズムのうちに有用の分子として吸收され、或はヤンキイズムに働きかける近代的な形と性能を得てヤンキイズムの是正に働いてゐることを認めることが出來よう。吾々は、上に、初期の植民の群の中には、全く經濟的な動機と性質をもつ人々が、却つて高い比率にのぼることを指摘したが、後のヤンキイズムの勃興が、この種類の分子と連絡のあることは勿論であると共に、一方の宗教的な分子も、決して單純に宗教的でなかつたことを注意すべきであらう。例へば吾々は、ニュ・

イングランドの歴史を見る時、その神政社會の中樞をなす聖者達が、政治や經濟の活動に於ても如何に堅固なる意志と拔け目なき知慧と、時には如何なる術策をも憚らない太い神經をもつてゐたかを知る。即ち吾々はここに、ヤンキイズムの實踐的な性質が、この信仰者の分子からさへも源流をうけてゐる事を感ずるのであるが、更に、ピュリタンの信仰自體に於ても、そこに後代の商利精神と必ずしも矛盾しない性活を見るのである。例へば彼らの日常の行持に示す如く、誠實な勤勞と克己節約は甚だ尊重すべきものとされるのであるが、これは適當な調節によつて、實利活動の世界にも有益に吸收され得る德である。事實に於て、後に鍍金時代（ギルデッド・エイジ）の氾濫に至るや、元來貧寒な物質的環境のうちに發生したキリスト教の傳來精神を、この新しい豐富な境遇に適應さすべき努力が行はれたことを見るのであるが、今ピュリタンの植民自體に於ても、その勤勉を以て供へられたる富を開發獲得するは善きことであり、更にその富を神の目的のために使用するとすれば一層の善きことであるとする考へ方は、彼らの生活の物的發達につれて、次第に行はれて來た一つの調節的な考へであつたであらう。

けれども、この樣な「調節」が、全體として見て、どこまで自然に、完全に、行はれてゐるかは一つの疑問であり得る。アメリカ人は、この二つの要素を自己の生活の中に調和させることに

よつて、大きな無理をしてはゐないか。彼らは物質的追求の努力の蔭に、その靈的な本能を塞いで來たために、（或はその矛盾を無理に調和と考へ込まうとしたために）、彼らの精神のうちには一種の病的な固著觀念（コムプレックス）が生じたと考へる論者がある。そして彼らの本能は、その中から時として抑制をはねのけて急激な噴出を見せるが、アメリカ映畫に見るあの母性愛の主題の樣な、過度に甘いセンティメンタルな感情の表現や公私の種々な機會に、この國民が示す感傷的な興奮や爆發はその證據であると云ふのである（Cf. R. Michaud: The American Novel Today, a Social and Psychological Study. Boston. 1923.）。

この樣な考察の中にも吾々は一部の眞理があることを認めねばならぬ。しかし、それにしてもピュリタニズムとヤンキイズムの間に、その相剋の反面に、協力乃至相互作用の一面があつたことは許容せねばならぬ。假りにそれが病的な結合を結果した場合でも、それはやがて、その樣な結合を可能にさせ暫くなりとも繼續させる共通の因子がそこにあつたことを證するのである。

この樣な二つの要素の微妙な關係は、結局初めアメリカに渡來せる十七世紀のイギリス（或はヨーロッパ人）のもつ複雜な性格に關聯する。彼らはルネサンスの人間的自覺の風潮をうけ、エリザベス朝の物質的興隆の波動にのつて、冒險企業の勇氣と生活充實の意欲に滿ちてゐたが、しかも一面、中世紀キリスト教の精神的な訓練と規制の影響はなほ力强いものがあり、物質的活動や快樂の彼方に聖の世界を望み、救ひと神罰の嚴格な觀念から脱れることが出來なかつた。かくしてニュ・イングラドに新天地を拓くべく來つた植民の群は、その組成分子のうちに、聖と俗の混淆をもつてゐたのみならず、その指導者たるピュリタンらの精神のうちに、同樣に二つの要素をもつてゐたのである。そして二つの要素が、既に分ち難く結び合つてゐて、彼らを志向に於ても行爲に於ても、決して單純に動かしめなかつたのである。それは結局に於て、伸びひろがらんとする力と、これを抑制し規定せんとする力の交渉と云ふことが出來る。そしてニュ・イングランドの地のみならず、廣くヨーロッパに結び、中世紀を通じてギリシャの古へまで遡る、人類文化の大きな歷史の波につらなるものと云ふことも出來る。そしてニュ・イングランド、續いてアメリカ全土に及んだ表面的な現象としては、この二つの力の爭ひは、規定せんとする力の敗北となり、ピュリタニズムに代るヤンキイズムの優越となるのである。けれどもこの過程が單なる勝敗でなく、一つの辨證的な進化の過程であつたことは、上に述べた如くであり、吾々はこの二つの力の性質とその交渉の經過を知ることにより、アメリカ人の精神の重要な部分を知り、アメリカ文學の特性とその發達を、一層正しく理解することが出來よう。

×

ピュリタニズムからヤンキイズムへの推移の期間に於ては、文學も當然過渡的な性質を帶びねばならなかつた。ピュリタニズムの最後の擁護者と云ふべき特なる雄的な人格エドワーヅ (Jonathan Edwards, 1703-175) に對して、吾々はフランクリン (Benjamin Franklin, 1706-1790) の存在に注目するのであるが、フランクリンこそは、ヤンキイズムの風潮をその實際的な思考に於ても、平明な文體に於ても、初めて文學の上に實現した先覺者と云ふことが出來る。吾々は彼の後、獨立戰爭の期間をくぐり、大きな社會的革新の進行と國家體制の整備の努力混亂の中に、文學が現實の問題に壓倒され攪亂されつつも、この過渡期の精神の、次第に整理されて來る傾向を、その雜多な作品群について親ふことが出來る。そして十九世紀初め平和の安定と共に、希望濃きロマンティシズムの色彩がアメリカの全土にひろがる樣になり、ニュ・イングランドの產業資本主義の發展は、一つのルネサンスをヤンキイの發生地に開かしめることとなるのである。

吾々はこの目ざましい開花の中に、ブライアント、ロングフェロウ、ホイッティア、ローウェル、エマスン、ソーロウ、ホーソーン等のすぐれた多樣の存在を見ることが出來る。そしてそれらがまた圈外の天才、ホイットマンやメルヴィル (Herman Melville, 1819-91) と連絡する。彼らを

取圍む學藝の空氣には、古い神政社會の何處にも見なかつた明るさと潤ひと、柔軟性をもつたみづみづしさがある。その思索や創作の上に感情や個性が束縛なく働き、ヨーロッパの傳統文化のよきものを吸收しようとする素朴な好奇心と細かな敏感さには、恰もわが維新の「文明開化」時代の青年たちを想はす樣なものがある。これらはことごとく、古きピュリタニズムからの解放の姿勢を示すものに外ならない。その新鮮な思潮のたぎりの中にあつて、その中核的な位置にあるものは、エマスンを代表とするトランセンデンタリズムの思想であつた。

それはイギリス傳來のピュリタニズムの陰鬱な決定論に對する、この新世界の新しい經濟情勢から生れた樂天主義の反抗だと云ふことが出來る。それは人間の善と社會の進步を信じ、個人がその意志と本能による行動の自由を說くものであり、カルヴィニズムの哲學によつて心理的にも社會的にも彼らの生活にまきつけられた超越神の束縛をきり放つものである。そしてカルヴィニズムに對する直接な宗教態度としては、かの分離派的な精神につらなるミスティシズムに立つものであり、神と自己の融合交通を信じ、從つてかくの如き自己並びに他人の個性を尊重する個人主義となる。

トランセンデンタリズムは產業精神に從つてヤンキイズムに決してそのまゝに贊同するもので

ない。それは一面ピューリタニズムに叛逆すると共に、上の如く物質に對する靈性の尊嚴を强調することによつて、産業資本主義の動きに對抗するものだとも見られる。即ちニュ・イングランドに形成されようとする新しい社會情勢に對して、殊に知識階級が自己の立場を定むべき一つのイデオロギィを提供したものと云ふことが出來る。從つてまたそれは、文藝や哲學の上の一思考でなく、實踐的な倫理的な意義を多分にもつてゐたのである。けれども、それと同時に吾々は、この主張が産業主義の勃興に應ずるものであり、そこに自己の足場を置いた事實を重要視しなければならない。即ちその個性の自由の尊重や人間の進歩の信念は、今この新大陸に思ふまゝ活動をひろげようとする産業主義の求むる精神であり、また産業主義の物質的希望は、トランセンデンタリズムの樂天性となつて反映するものでなければならない。吾々は、後に、エマスンの思想に於ける西部開拓地の影響を考へることによつて、この關係を一層明らかにしたいと思ふが、解放時代のイデオロギィとして、それが物質的な意義を深くもつものであり、決して言葉通りに「超越的」なものでないことを注目したいのである。結局それは十八世紀から獨立戰爭の期間をくぐつて、むしろアメリカの全地に流布したロマンティシズムの一部と見ることが出來るのであり、大陸やイギリスの政治思想經濟思想に於ける大きな解放の傾向（デセントラリゼイション）に通ずるものである。そして

十九世紀末、矢張その産業資本主義が非ロマンティクな本質をあらはにする樣になり、機械的な壓力を以て再び個人の上に陰鬱な集中の時代（セントラリゼイション）を來らす樣になるまで、このロマンティシズムの伸びやかな流は、アメリカの思潮を支配するのである。

四、南部の傳統

南部アメリカ、ヴアジニアの地に、イギリスの植民が行はれたのは、ニュ・イングランドのそれよりも十三年早く、一六〇七年のことであつた。その最初の移民團百五名のうちには、數人の職工と十二名の勞働者があるに過ぎず、半數は「紳士（セントルマン）」であり、それに四名の大工が加はつてゐた。即ち彼らは曠野の開拓よりも、漠然とした黃金の夢を抱いて來た者であつたが、なほこの傾向は、その後數回の移民群の渡來に於ても持續されたのである。この樣な移民は、一六〇六年設立されたロンドン・コンパニイによつて送られたのであるが、しかも、普通この南部の移民の目

的を全然物質的なものと解し、非宗教的な人々による全く世俗的な企業と考へる説は相當の修正を受けねばならぬ様である。即ち、その移民會社は初めよりその特許狀(チャーター)に未開蒙昧な人々に神を教へ信ぜしめることをその責務として標示し、その趣旨によつて移民を募集したのであり、また現地に設けられたアメリカ最初の代議機關(the House of Burgesses)も、教會禮拜の出席その他あらゆる日常生活の敬虔清淨な行持をその成員に要求し、教會の役員をしてそれを監視報告せしめたのである。從つて、南部植民地の性質を全く物質的なものとして理解することは、北部植民地のそれを全然ピュリタン的な宗教色を以て塗抹せんとするものと、同樣な誤に陷ちるものと云はなければならない。

更に、吾々は、南部植民地の傳統に於ける所謂 Cavaliers (or Royalists) 即ち王黨員の影響を過重する誤を警戒せねばならない。即ち南部を北部から分つ重要な特性である封建的で且つ文化的人本的な生活や精神は、十七世紀のイギリス政界の混亂を逃れ來つた王黨員の階級や教養から引きつがれたものと考へる説は、今日なほ唱へられてゐる所であるけれども、一層嚴密な研究によつて是を否定する説も有力である。一六四〇年頃までアメリカの植民は南北兩地方とも徐々と進行してゐたが、四〇年から六〇年にかけて南部の方が急激な增加を見せ反對に北部が減少した。これはイギリスに於てピュリタンが天下をとるに至つた反映であつて、王黨員はこの地に安全な避難所を求めたのであるが、六〇年以後は、王黨が政權を奪回すると共に、逆にピュリタンの移民が再びニュ・イングランドに增加し、南部への移民は減少し、王黨員の大部分は本國へ歸り去つた。かくて南部に於ける王黨員系の移民は、その最も多數であつた時も全體より見れば極めて微小な部分を構成してゐたに過ぎず、しかもその持續期間も甚だ短期であつた。從つて南部の貴族的な特性を王黨員の渡來に歸することは、正しい推論と云ひ得ないのである。むしろ、その初めにあつては、南部の移民もその主要な構成要素に於ては、北部の移民と全く同樣なプティ・ブルジョア階級に屬したものであることを吾々は認識すべきであり、かの南部的な貴族的な特性は、南部の特殊な風土氣候によつて今後植民地の獨自な發達と共に釀成せられたものと解すべきである。

即ち、南部に眞劍な開拓民として渡來し始めた多數者は、勤勉克己な勤勞階級であり、例へばその宗教觀や藝術觀の嚴格で固執的な點においても、ボストンの人々と異らない。そしてあの北部の人を熱狂させた巫女狩り(ウイッチ・ハンティング)が、この南部でも行はれた證跡さへ持つのであるが、若し、地理的產業的環境が同一であつたならば、南部の精神的雰圍氣は北部のそれと大差ないものに發

展して行つたであらう。事實この根柢的なブティ・ブルジョアの精神は、常にその強い存在の地盤を失ふことなく、今日の南部の民衆にまで持續してゐるのである。

この初期移民の進行と共に、展開して來た南部の特殊相は、先づその農業に於ける豐富な產出力と、從つてそこに要求される適當な經營方法であつた。殊にそれはタバコの栽培について發見されたのであつたが、北部と異るこの溫暖肥沃の土地に於ては、なるべく多くの勞働力を使用して大規模な農園を經營することが可能であり、また最も有利な方法であつた。かくてこの地方には農業勞働に適する人間が次第に盛んに要求されると共に、移民會社は自らその樣な勞働者を使用して農地を開き、そこから利益をあげる方法をとり、同時に一定の金額を會社に提供する資本家に對して土地を與へ、更にその資本家が農耕勞働者を現地に送る時は、一人の勞働者に對してまた一定の土地を與へることを規約した。けれどもその結果は、會社自身の經營農園は全く失敗に終り、個人經營の農園のみ漸次膨脹して、久しからざるうちに海岸地方一帶を占據して、小規模の獨立農民の如きは山地の奥に驅逐されるに至つた。

かかる經過の間にも、氣候風土の障碍は多くの人命を奪ひ、植民團の內部組織には絶えざる紛糾が起り、終に會社自體も一六二四年その特許狀を沒收されて植民地は直接イギリス國王の支配

に屬する運命に至つたが、その必然な成長力はとどまるべくもなかつた。卽ち永住の目的を以て渡つて來る移民家族が次第に增加すると共に、農園の勞働力としては、一定期間の雇傭契約による所謂「インデンテュアド・サーヴァント」を招き、或は犯罪者の流刑により、更に誘拐又は暴力による非法なものをも加へて、年々高まる需要を滿たさうとした。そして間もなく黑人奴隸（ニグロ）が輸入されることとなり、一六一九年オランダ船によつてその最初の一團が送りとどけられたが、それはなほ五十年程の間は白人勞働者に押されて、さしたる增加を見なかつたけれども、將來の南部アメリカの運命に根本的に關係する因子として、ここに早くもその萠芽を見せたのである。

南部農園の眞に驚異的な發展、從つて黑人奴隸の不可抗な激增は、イギリスに於ける紡績機械の發明による紡績業の躍進に呼應したものであり、その棉花の需要をみたすがために、能率的な繰綿機械（コトン・クリン）が發明されたことは（一七九四年）棉花栽培の事業に拍車をかけることゝなつた。かくて十八世紀の末まで、タバコ、米、藍を主產物として奴隸農業を行つて來た南部農園は、既にある程度の飽和安定の狀態に達してゐたのであつたが、ここに棉花なる產物を中心として、新たな活動を開始し、農地の限度なき擴大膨脹と共に、奴隸の賣買輸入を煽り、その後五十年にして南部全體を化して棉花栽培の王國とするに至つた。

×

吾々はこの過程に於て、十七世紀から十八世紀にわたり、南部の農園が一つの封建的な貴族的な傾側を整へて來たことを注意しなければならぬ。それは各農園の主人を首長として多數の奴隷を溫情的な（賃金勞働者と異る）大家族關係に包擁するものであるが、南部の開拓事業が、小規模の獨立農民によらずして、多數の勞働者を資本を以て使役することが適切有利であることが判明するに至つては、イギリスより渡來してこの地方を支配することゝなつたものは、當然そのブルジョア階級の、商利的な精神に鋭く、またその經驗に富める分子であつた。しかもこの分子は、その農園の事業が成功し、主從的な雇傭關係が安定し、年月の經過を經るに從つて、より新しき世代のものは、直接農耕の仕事より離れ、一種の貴族としての餘裕ある生活に移行する樣になつた。それが「農園貴族」（プランテイシヨン・アリストクラシイ）の名で呼ばるべきものにもせよ、貴族的な階級精神が支配力をもつたのは、全アメリカを通じ、この當時の南部を唯一の例とするのである。

南部移民の主體をなすブテイ・ブルジョアがその宗教的な本質に於ては北部移民と大差なきものであることは上にも指摘した所であるが、南部の地理的事情によるこの樣な農園の發達は、彼等のその宗教的傾向を欲するままの形に發動することを妨げた。即ち移民達が北部の如く町村を

つくつて群居することなく、廣漠たる區域に、相隔たる農園として分散する所にあつては、教會の當局者も禮拜出席を規則的に強制することが出來ず、教會員としての統制は、弛緩せざるを得ない。その上、この地方の各植民地に、勢力を占めてゐた教會は、イギリス國教たる貴族的な、監督教會（ヒビスコパル・チヤーチ）であつて、北部の分離派的な教會とは根本の精神氣風を異にする。かくして、南部に於ては、（限られたる一部を除き）純粋な宗教的分子のイデオロギイは、漸次農園所有者のそれに征服せられ、宗教は社會秩序の維持者としての役割を一般政治の手に讓る樣になつた。そして農園貴族の成長に並行して、始め熾烈な傳道精神を以て渡來した教役者の子孫も、圓滿快活な牧師となり、時には周圍の放縱な生活に和して、妥協的な存在を營むこととなつた。

この樣にして、南部の社會は、その發展の中心動力であつた商利的行動の露骨さを次第に緩和し、十八世紀後半に入る頃より、一種のカヴァリア精神をここに發現することとなり、禮儀正しく公私の生活に節操を守ること、寛容で人道的であり個人の自由と民衆の福利を重んずることはその地主貴族の最もよき特性として、その後百年に亘り、ヴアジニア地方の標識となるべきものであつた。けれども、この樣な社會狀態と道德思想の成熟の反面に、この地方の進展の勢が一つの停止期に達したことも認められねばならぬのであつて、その西方及び南方地方への農地開拓

の進出に反して、ヴアジニア自體には移民や資本の流入なく、社會的な商業的な都市を形成することなく、どこまでも農園中心の生活を持續した。從つてその經濟は農本的なコースを離れず、資本主義的な展開をなさうとしなかつた。このことは商工業の勃興と共に急激に變化しようとするアメリカ、古い貴族主義的な觀念を蔑視してますます中產階級的にならうとするアメリカにあつて、一個の特異な現象と云ふべきものであり、ヴアジニアは所謂 the Old Dominion としてひとりその停頓狀態のうちに引籠つた姿であつたのである。

この樣な農園王國にあつて採用せられた政治觀念は、ジェフアスン（Thomas Jefferson, 1743-1826）の重農主義であり、當時フランス及びイギリスに盛んであつた自由思想に裏づけされるもので、政治的正義の確立と國家權力の制限を主張し、從つて中央集權的な聯邦主義（フェデラリズム）に反對し、經濟上には於ては放任主義（レセ・フェール）の態度を迎へようとするものであつた。そしてこの動向は農業王國の二百年來の歷史の經驗によつて適切に消化され、强固な一つの農本主義的な思想を形成し、資本主義による他の新興諸州の大勢に對峙したのであつた。そして同時にこの地方の人士の間には、堅き封建的な結合感と共に、極めて鮮明な個人尊重の氣風が醸成されたのである。

けれども、この自由主義的な重農思想は、南部地方の進展（それは上に述べた棉花栽培の奮異的な

發展に殊に關聯するものであるが）と共に、漸く必然な變質をす示こととなつた。即ち一八三〇年あたりを境界線として、南部思想の指導權は、その事業の中心と共にヴアジニアを去つて、一層南部の、殊に南キャロライナ地方に移動したことが認められる。そしてヴアジニアの寛大な人本的な精神は、南部の新しい經濟事情に立脚した、より利己的な實際的な觀念に代はられる。ジェフアスンの平等主義の理想は捨てられ、キャルフーン（John C. Calhoun, 1782-1851）の政治觀に基く支配階級中心の差別的な思想が採用された。それは南部自體の上に於ける一種の帝國主義的な變化だと云ふことが出來る。それは經濟的發展をどこまでも推し進め、急激に增加する奴隷をも、不可缺な制度として、憚る所なく維持しようとする積極的な態勢をとるに至つた。かくてこれまで奴隷を家族の一部として養つて來た溫情主義の態度は漸く薄れて、彼らを全く一種の動產としまた搾取の機關として扱はうとする態度が强くなり、少數の上層階級のもとに中產階級と奴隷を隸屬せしむる社會形態を一つの理想となす所謂「ギリシヤ的デモクラシイ」の思想が、奴隷制度を正當化するために唱道された。そして、黑色の奴隷地域は西方開拓線の進出に伴ひ、無限な本能的な勢を以て擴大されて行つた。すべてこの樣な南部情勢の積極化は、北部との激突を必然な歸結としてもつたのである。

南北戰爭の結果は、南部の社會制度と經濟機構の掃蕩的な破壞であつた。その上層階級は巨大な財産である奴隷を失ひ、政治に參與する權利をも奪はれた。かくて、その後に露はれて來たものは、元來南部の住民の模範をなすプティ・ブルジョアの生活と思想であつた。暫く上層階級によつて形づくられて來た、ある程度まで古のカヴァリアを想起させる貴族的な豐潤な文化は、こゝにあとなく崩れて、嚴格陰鬱な精神傾向が、信仰の世界のみならず、その教育や政治の領域をも支配することとなつた。その上に北部に於ては、産業資本主義の發展による新しい社會情勢が宗教の問題について當然より文化的な寛容の傾向を馴致することとなつたに反して、南部にあつては、南北戰爭後も、産業の進出は容易にその程度にまで至らず、大部分なほ農本的な社會を持續してゐるのであり、從つてその知性的活動に於ては、逆に十七世紀の北部地方のごとく、プティ・ブルジョアの强固な規定的觀念の支配を脱け得ない狀態を呈してゐるのである。

×

この樣な歷史を辿つて來た南部アメリカは、文學藝術に對して、どう云ふ態度をとつて來たであらうか。十七世紀、なほ農園貴族の擡頭しない時代にあつては、ヴァジニアに於ける藝術の立

場は、マサチュセツに於けるそれと大差なく、分離派的な傳統に立つ移民によつて、無理解な取扱ひをうけ、劇の述作や上演の如きも禁止せられた。しかし、農園貴族が支配的位置に立つと共にこの關係は大きな變化を見ることとなつた。彼らの信奉する監督教會派（エピスコパル・チャーチ）の信仰は、元來貴族間の宗教として、傳統的な藝術に寛大な態度をもつものであつたが、そのために南部に於いては音樂や演劇や繪畫まで次第に盛んになつて行つた。そして文學も、北部地方とは異る暖い環境と支持をもつことが出來た。

けれども、この樣な現象は勿論、教會の信仰にのみ原因するものではない。それはその樣な信仰を適宜なりとする農園貴族の生活、彼らが世代を經るに從つて確立して行つた餘裕あり潤ひある生活に結んで考へねばならない。その宏壯な邸宅や耕地、そして多數の奴婢の上に行はれる族長的な生活、そしてこの地主邸を中心に、賭博や競馬の娯樂に熱中する朗らかなむしろ異教徒的な空氣、――それは貧寒なニュ・イングランドの農村や、粗野な西部フロンティアに見ることの出來ぬ世界である。

バード（William Byrd, 1674-1744）は、この樣な南部貴族の一番大きな先達と考へられるが、彼は丁度同じ頃北部に現はれた、かのシューアルと、教養富社會上の位置等に於て甚だ共通した

ものをもつてゐながら、彼の書きのこした旅行の記錄 The History of the Dividing Line (1841) は、シューアルの日記のまじめさに比べると、明るい機智や皮肉に富んでゐて、同じく過渡期ながら、北部と南部の根本的な風土と民心の差が、ここにまで反映してゐることが看取される。そして南部のこの農園文化が十分な成熟期に入つたのは一八〇〇年から一八三〇年の期間と見られるが、その中から恰も北部のトランセンデンタリズムと時代を同じうして、このヴァジニアの地に、矢張一つのルネサンス的な開花を見ることとなる。そしてそこに生れた文學は、アメリカ文學としても類の少ない、全く夢幻的なロマンティシズムを特性とするものであつた。その代表的なものは、ケネディ (John Pendleton Kennedy, 1795-1870) の Swallow Barn (1832) だとせられ、豐富な材料によつて忠實に描寫されたロマンティクな農園の生活は、其後の農園小說の範を示したものと考へられてゐる。

けれども、このヴァジニア文學のロマンティクな特性、そのあまりに現實性を缺いた特色は、同時に、その所謂貴族的生活の實體を示すものであることも注意されなければならない。卽ち、このロマンティク時代にまで至つた貴族は、その初めにもつてゐた生活の精神としての眞に人間的な自由思想への熱意を失ひ、一方ニュ・イングランドに於て、新しい理想と革新の動きが勃興

してゐるに反して、この南の一郭は、安易な無刺戟な氣持のうちに沈滯してゐたと見ることが出來るのである。かくて、その文學は唯、繪畫的な美しさをもつだけの、ロマンティクな作風に墮したのであるが、更にその樣な美しさ自體に於ても、それは眞に「貴族的」な典雅と豐潤をもつものとは稱し難いやうである。それはこの農園貴族の本質に關係するのであつて、彼等は元來、プティ・ブルジョアの階級から出たものであり、その新しく高められた位置に於て貴族的な生活を營まうとするものである。そしてその手本となるものはイギリス貴族の生活であつて、彼ら自らの根柢ある樣式(パターン)を創造することを考へなかつた。さう云ふ努力の缺けてゐる所に、價値ある文學藝術の發生することは考へられない。その上に、アメリカのみならず、すべて貴族が藝術に理解奬勵を與へるのは、多く都市中心の貴族の場合であつて、田舍在住の農園貴族は一層銷閑的な遊樂（狩獵・競馬等）に興味を向けるのを普通とする。かくて、ヴァジニアのルネサンスも、その作品に於て、眞實な貴族性と地方色を缺き、更に生活的な思想と活力を缺いたものとなり、特に傑れた藝術家と見るべきものを、產まないで終つたのである。そして南部文學の中心が、南キャロライナのチャールズトンに移動した後に於ても、そこに行はれたものは、この樣な意味に於けるロマンティシズムの趣味であり教養であつた。

けれども、よしその様なものであるとしても、農園生活のこの隆昌時代は、南部に於て文學藝術が最も幸福な生存をなし得た時期であることは否定出來ない。南北戰爭後、上述の如く、これら貴族の王國が崩れて、プティ・ブルジョア固有の思想が、支配的な勢力を占める様になると、文學藝術は再び冷淡な、非共感的な取扱ひに、身をまかさねばならなかつた。けれども、それは結局程度の差であつて、これを概觀する時は、その初期十七世紀十八世紀に於て藝術及藝術家に示された蔑視又は異端視の風は、農園文化の盛期を通じて、一般社會の大勢として持續したと見ることが出來る。その故に、南部にあつて少數の作家が、眞に積極的に、純粹文學の道にのり出したのは、十九世紀に至つて始まつたと見られるのであるが、彼らもこの冷い雰圍氣にあつては十分な成長をなすことは不可能であつた。かくて吾々は南北戰爭前後にまでたどつて來て、注意すべき名前としては先づポー (Edgar Allan Poe, 1809-1849) を、遲れてラニア (Sidney Lanier, 1842-1881) を見出すに過ぎない。ポーはヴァジニアの農園の特殊な文化に背を向け、自己の空想の世界の創造に沒頭したものであつて、その多分のロマンティシズムにも拘らず、彼を南部の文學者としてとりあげ得るかは疑問である。しかも彼の活動の舞台はニュ・ヨークであつた。その藝術的天才は說くまでもないが、彼がその知性に於て時代と環境から全く遊離した立場に立つたこと

は、彼の個性と境遇によるものであり、そのあまりに特殊な心理と生理は、彼をむしろアメリカ文藝思潮の主流から無關係な例外的位置に置いてゐると考へ得るのである。ラニアは詩の表現の音樂美を重んずる點に於て、ポーと甚だ相似てゐるのであるが、彼の作品は南北戰爭後の所謂鍍金時代に屬するのであり、彼のもつロマンティシズムは最も非ロマンティクな時代に行き當つて孤獨と不安をなめなければならなかつたのであつて、その詩の主題の狹さや技法の極度の細やかさは、南部ロマンティシズムの殘光期を示すものに外ならないと云へる。

この様なラニアの存在の後、詩歌散文を通じ、南部の文學は殆んど衰微の形にある。その原因となつてゐるものは、上述せる如き、戰後の物質的世相と、しかもその精神的方面を支配する强固な固有思想であり、純粹な或は生氣ある藝術の發生を塞いだのである。しかし、世界大戰を經た頃から、この様な南部にも新しい變化がきざし初め、文壇にも幾分活潑な動きが生じたことは認めねばならない。唯、その動きの大きな對象となつてゐるものは、過去の、滅びたる農園への回顧的なあこがれであり、或は傳奇的な存在としてのニグロの世界であることは、今日の南部地方の現實が、その現實のもつ雰圍氣が、なほどれ程非魅惑的であり、そのため文學者の眼が反動的に、過去の夢の中に向はざるを得ないかを、證するものであるとも云へよう。けれども、その

ことはまた、南部文化の傳統が、その偏向や複雜性をもつままに、アメリカに於ける一つの特殊な、少くとも常に回顧に値ひするだけの、實質をもつものであることを示すのであり、アメリカ文藝思想の一分野を占めるものとして、それは今後も何らかの形に影響を絶つことはないであらう。〔マーガレット・ミチェル（Margaret Mitchell, 1905-）の『風と共に去りぬ』Gone with the Wind（1936）はこの傳統から生れたすぐれた歴史的ロマンスである。また一九二〇年代後半から三〇年代にかけ、フォークナー（William Faulkner, 1897-）コールドウェル（Erskine Caldwell, 1903-）等が南部の生ける現實によつて深刻な文學をつくり出すことになつたのは、南部の最も重要な文學的展開といはなければならぬ。〕

五、フロンティア精神

"Frontier" は邊疆であり國境地帶であらうが、アメリカの場合、それは特にその開拓地が西方に前進する過程に於ける最前線であり、そこに一つの動的な意義をもつ。それは前方直ちに未開の原野に接するものであり、その稀薄な人口と原始的な開墾方法を以て、自己を次第に産業的共同社會に結成しつつ、しかも絶間なくその自己を置き去りにして前進する。それは云はば、野蠻と文明の波打際であり、そこに高まる波頭の一線である。

この意味でアメリカのフロンティアは、既に十七世紀、大西洋の海岸に、北マサチュセッツから南ジョオジアにかけて連鎖狀に發生した植民村の一列を以て、開始せられたと云ふことが出來よう。それは暫く、その海岸線に平行するアパレイチヤン山脈一帶の高地の線に、インディアンの抵抗を受けつつ停滯したが、獨立戰爭少し前その山地を越え、ミシシッピ河の沿岸に下降し、その大峽谷に地域をひろげつつ、次第にロッキイ山脈に向つて前進した。けれど、一八二〇年、その尖端がミズウリ河にまで達した時、その前途にひろがる餘りに不毛で人跡を絶つ山野のためにまた暫く逡巡の時期を經過せねばならなかつた。しかしそのうちに、少數の冒險家の通路啓開の努力があり、更にカリフォーニアの金鑛發見の報が大きな衝撃となつて、フロンティアは躍進的に、未開の部分を後ろにのこしつつ、しかも山地の奥まで資源探索の手をのばしながら、南北戰爭の頃、終に大草原の果にまで到達した。南北戰爭以後は、フロンティアにとり入れられたこれらの地域は、一般移住者を呼び迎へ、公有地は逐次無償地として分讓せられ、一八九〇年頃には

さしもに廣漠たる土地が悉く處分されるに至つたが、それは一方、太平洋岸の黄金地帯に飛火したフロンティアが、逆に東進しつつ、東からのフロンティアと合一した時期に一致するのであり かくて、開拓可能な未所有土地の完全な消滅と云ふ事實と共に、フロンティアなる存在はその終局に達したのである。

▲フロンティアがアメリカ國民性の構成にあづかつてゐる力は、他のどの様な要素とも比較することの出來ぬ位、絶大なものと云ふことが出來よう。既に上に見て來た如く、アメリカの風土は殆んどその全部が、かつて一度はフロンティアであつた歴史をもつものであつて、フロンティアの影響はその國土と共に廣く、また從つて古いものである。けれどもフロンティアが最も純粋な意味に成長したのは、ミシシッピ流域への進出以後のことであり、一方東部地方の近代的な經濟的社會的發達に押されて、開拓者の生活をなほ甚だ原始的な地理的環境におし進めるに至つてからである。「それは主として貧窮者が自己の途を開かうとする努力の上に築かれるものであり、從つてそこには、勞働と缺乏に耐へ得る體力と精神が尊重せられ、それをもたないものは、自然の容赦なき淘汰にまかされる」。かくてフロンティアには當然強度の平等思想が生れる。東部地方にはその植民の始めから、階級の觀念がもち來されて、そこに結成された社會は、少くとも形式上

には貴族中流及び奴僕の三階級をもつものとなり、獨立戰爭後までもその形態を持續した。これに對してフロンティアは、殆んど世界のいづくにも見ることの出來ない、全く單一階級の社會を作り、特殊な經濟觀念と共に、所謂 Jacksonian democracy の鮮明な民主的思想を生む樣になつた。ここでは富も門地も才智も物を云はない。反對に、極貧の者も、同等の機會を惠まれ、彼が必要な體力精神をもつ限り、どの樣な「成功」をかち得ないとも限らない。その上にこれらの開拓者は、インディアンとの戰鬪や道路河川の修築など團體行動を必要とする事件が多いために、當然共同の意識が濃くなり、競馬その他のスポーツにまで近隣一同が參加することを求め、獨善的な異分子を排斥する風になつた。」

▲かうして、フロンティアの平等思想には二つの面がもたれる。一つは經濟的向上のためには自主獨立の努力を尊び、その平等な機會を要求することであり、他は、その外の生活の態度や思想の型に於ては、自己の周圍と均一な形式を保たうとする傾向である。即ちそれは個人主義的と民衆主義的との二要素であり、結局アメリカ精神の特性を分析するものに外ならない。そしてこの後の方の、均一化の傾向に示されるフロンティアの強力な影響は、今日のアメリカの生活の、衣食住や娯樂や文學の、あらゆる部面に現はれてゐる單調な均一的な形式にまで波及してゐると考

へることも出來るのである。

フロンティアの經濟觀念は、至廉な土地と容易な生産による自足自給の可能性が、殆んどすべての住民に許されてゐることを背景として、個人尊重の徹底せる民主的傾向をもち、政治はこれら個人の勤勉節約の合法的な努力による富の獲得を決して妨げないことを、その第一義とすべきものと考へた。ジェファスンの平等主義は、南部農園の本據から、貴族と奴隷の存在を認めないフロンティアの環境にまで移入されて、初めて實際的な意味をもつことが出來る樣になつたと云へよう。そして西部に沸騰した活潑粗野な政治動向は、一八二八年ジャクスン（Andrew Jackson, 1767-1845）の大統領當選を重大な契機として、長く東部地方にまで支配的な力をのばすこととなつたのである。

×

以上の如く、フロンティアの思想を辿つて來て、吾々の感じることは、それが獨創的なまた組織的なものと云ふことが出來ないものであると同時に、思想と云ふよりも思考の樣式、或はむしろ一つの氣分として、意義をもつものであると云ふことである。フロンティアが、アメリカ國民

の思想に及ぼしてゐる影響は、この氣分、この考へ方としての影響であり、しかもその觸れるところ、何ものをもその色に染めないで置かない程の强みをもつものである。この考へ方の根幹にあるものは、獨立平等の個人への信念であるが、それが氣分として著しく表面に發散してゐるのは、樂天的な發展の希望である。開拓者は、東部地方の階級的社會をもたず、またかのピューリタニズムの統制とそのペシミスティクな人生觀から解放されてゐる。その上に、無限な經濟的の機會と天然資源の埋藏をひかへ、また刻々に進展する交通開發の活況は、彼らを夢想的な樂天家たらしめないではやまない。

けれども、そのオプティミズムはどれ程ロマンティクなものであつても、開拓者の現實の日々の生活は、疫病の脅威と勞働の困苦と、荒寥たる山野の空氣に閉ざされたものであり、從つて、彼らの精神には嚴肅で陰鬱な色調のしみ込んでゐることは免れない。しかも彼らが、なほその樂天觀を抱き得たことは、その暗鬱な半面の生活を救つてゐるものであり、また彼らが自己を力づけようとする心の自然な動きであつたとも見られよう。

この樣な西部の環境と氣分のうちにひろがつて行つた宗教は、當然非國教派のそれであり、殊にバプティストとメソディストであつた。個人の前に開かれた無限な發展の可能性は、カルヴィ

ニズムの冷酷な決定論を容れよう筈がない。神の選擇や人間性惡の信條や、それに伴ふ嚴格な倫理的要求は、開拓者の樂天思想のうちに、いつしかその姿を失つた。勿論この樣な宗教的發展はフロンティアの初期、人口が稀薄でまだ十分な集團社會を結成しない時期にあつては、殆んど見るべきものなく、十九世紀に入つて以後フロンティアが活況を呈するにつれて、宗教家の活動も盛んになつたのであるが、開拓地の地理的社會的狀勢、又開拓者の個人主義の精神のために、小規模の教團が隨所の小部落に生ずるままに互に干涉する事なく存在することが可能であつた故に有力宗派に並んで多くの小教派が興起し、それぞれ獨立の立場に立つて活動を續けようとした。そしてそのすべてにわたる特色として、神學の學說や教會の組織よりも個人の宗教的直覺を重んじ、從つて信仰復興的な感情本位の傾向が强く、時には極端な狂熱の態度に走るものもあつた。

フロンティアの文化に於て、當然最初に結成さるる部面となつた上の樣な宗教的背景は、進んでその文學の成長を考へるに當つて勿論關聯する所が深いのである。開拓地がアメリカの文學思潮に、直接關係をもつ樣になつたのは、十九世紀後と考へねばならぬのであるが、この時期に至つても、開拓者自身はその生活の現實を文字に移すまでの心構へには容易に達することが出來なかつた。そこに少數の讀書慾あるものに提供される文學は、多く眞實の開拓者以外のものの手に

よつて、フロンティアの荒寥と困苦を慰め或は粉飾せんとする目的をもつて書かれたものであつた。それはロマンティクな甘さをもつものでなければならない。また(これは開拓者がその精神の底に失ふことの出來ぬプライ・ブルジョアの本來の觀念から來るものとも考へられるが)その甘さに添へて、上品さ、清らかさと云ふ如き、適宜の道德性或は宗教性をもつたものでなければならない。それは小說のみならず、詩歌や演劇に於ても同樣の特色が要求されたのであつたが、この樣な態度に於て結局容認されてゐるものは、イギリス的な傳統であり從つて東部アメリカ的な精神であつた。かくてシェクスピアやミルトンの名が敬意を以て呼ばれると共に現代文人にあつてはヒイマンズ夫人の詩が愛誦され、スコットやバイロンが歡迎された。そしてまた東部アメリカから提供さる東部的な文學をそのままに受けいれようとした。

この樣にして、フロンティアは、自己を素材とする文學にあつても、また自己のために讀む文學にあつても、ロマンティクな非現實性の特色を容易に離れることが出來なかつた。その上にフロンティアを素材とする文學にあつては、それを讀む人は、實は多くフロンティア以外の人であり、彼らはフロンティアをその困苦と共に適當な幸福の夢をもつものと想像しようとする。そのために作家は感傷的な甘さや宗教味を配合し、ハピイ・エンディングを與へる用意を忘れまいと

する。かうして、フロンティアの僞らない現實が、眞實よき文學の素材として生かされるために
は、眞正の開拓者としての體驗と誠實な藝術家の魂をもつ作家の出現を待たねばならなかつた。

×

この樣な作家の數は、極めて少數であり、その上にその出現の時期は、フロンティア開發の一
層後期（殊に最後の半世紀）に屬すると云へるのであるが、吾々はその代表者としてミシシッピ河
の子マーク・ツウェインをあぐべきであらうし、またその獨特なリアリズムの成長の先導者とし
てエグルストン（Edward Eggleston, 1837-1902）を、續いてその系列にガアランド（Hamlin Galand,
1860-1940）ノリス（Frank Norris, 1870-1902）らの存在を注目すべきであらう。マーク・ツウェイ
ンによつて直ちに聯想される、所謂アメリカン・ユーモアなるものは、フロンティア文學の一番
大きな特性であるのみならず、アメリカ文學として初めてかち得た純粹にアメリカ的な性格であ
ると云ふことが出來よう。それは傳統文學の土壤である洗練や典雅と云ふ如き文化性を全く缺如
し、常に率直で粗野で喧騒で戲謔的な西部の民衆、そして舞踏や俗歌や荒唐無稽な作り話や道化
を喜ぶ民衆の、特殊な心理と文化に結びついたものであり、他に類例なき自己發展の舞臺と希望

をもつ彼らのオプティミズムに根ざすものである。このアメリカン・ユーモアの、あくまで野放
圖な笑劇風の賑やかさは、フランスやロシアやドイツやイギリスのユーモアのどれとも異つたも
のと感ぜられる。それは泣き笑ひの暗い影や、精巧な機智のたくらみをもたぬものである。マー
ク・ツウェイン自身が次の如く云つてゐる。——「"The humorous story is American, the comic
story is English, the witty story is French."」

「フロンティア文學のもつ大きな特性としては、このアメリカン・ユーモアと共に、そのリアリ
ズムの一面に注意すべきであらう。フロンティアの生活が、アメリカに於ける初めての最も獨自
な內容と發展性をもつ生活の出現であることは、上に考へて來た通りである。けれども、その獨
自な特色が、フロンティア人の思想と觀點の置き方の上にまで明瞭化するには、相當の時期の經
過を待たねばならなかつた。それは宗教の世界に於て、先づその變化を見せ、東部的な信條や規
制が必然な變質陶汰をうけたのであるが、文學に於ける變動も、結局イギリスやニュ・イングラ
ンドの典型の束縛を脫すること、換言すればフロンティアの文學がその初期より極端に示してゐ
た模倣の態度を捨てることによつて、開始せられたと云へる。かくて囚はれない觀察と自省の眼
で、周圍のフロンティア生活を見る樣になつて、その生活は、それがしかく獨自なものであるだ

け、一層きは立つた現實味を呈することとなり、またそれを表現する形式――作品の言葉づかひや律動や氣分に於ても、當然、從來のマネリズムを脱した、素朴な生命を盛つたものとなつたのである。

かうして、フロンティア文學のリアリズムなるものは、開拓者の自覺、自己の將來性についての確信の強まりに關聯するのであり、その初めは極めて粗野で狹隘で所謂「村落根性（ヴィレヂ・マインド）」の感情的な自己主張から始まつたものであらうけれども、フロンティア生活の發達と充實に裏づけされつつ、次第に獨立せる、深みと力をもつ、十分な特色ある一つの態度にまで成長した。そしてかのアメリカン・ユーモアと結んで、ここに全くアメリカ的な、文學樣式を生み出したのである。東部の文學者たちが、相當の努力にも拘らず、イギリス模倣の惰性を終に脱却することが出來なかつたに對して、西部の文學者たちは、全く非イギリス的な生活に生き、且つイギリスの影響を遠くのがれて、かの植民地的劣等感（コロニアル・コムプレクス）を征服する意義深い仕事を、初めて成し遂げたのである。

更に、この西部のリアリズムは、一面過去のコムプレクスを清算する性質をもつものであると共に、また將來のアメリカ文學の展開をみちびく立場にある。即ち、このリアリズムは、フロンティアが發展の極限に達して自然の閉鎖狀態に入り、且つ開拓者の事業と生活が、東部の金融產

業資本の進出によつて壓倒されるに至つて、當然その現實から陰鬱な色調を吸收し、反省や分析や暴露の態度を強めて來る。そして、かのアメリカン・ユーモアの樂天性も、それに應ずる苦味をかもして來る。吾々はその樣な特色を、後半期のマーク・トウエインに見、またガアランド、ノリスの作風に看取することが出來るだらう。後者では貧農の宿命的な生活、資本の農地侵入の問題などがとりあげられてくるのである。このリアリズムの、純粹にフロンティア的なものからの變質は、結局新しい產業アメリカの進展に沿ふものであり、そこに當然新しく產出さるべき次のリアリズムの文學に、フロンティア本來の率直性と、殊に粗野な動力を、渡さんとするものと考へられるであらう。

×

最後に、吾々は、この樣なフロンティア文學の成立を逆にさかのぼつて、西部文學者と云ふことは出來なくとも、極めて強い影響をフロンティアから汲みとつた文學者を、顧みて置きたい。それはエマスンと、ホイットマンに外ならぬのであるが、エマスンは一八五〇から七〇年に至るまで、幾度か巡回講演者として西部地方を訪ひ、その生活と人間に親しく接觸する機會をもつ

た。ホイットマンに至つては一八四八年、ニュ・オーリアンズに記者たるべく西部の地を踏んだのであるが、その水都の生活と往復に遍歷した山河の大觀は、一層多樣で直接な印象を彼の胸奥にのこした。しかもエマスンは、西部を訪はぬ以前より、既に甚だフロンティア的な、活氣あるエッセイを書いたのであるが、彼の信奉する個人主義、そのセルフ・リライアンスの教說は、開拓者の獨立克己の生活と、その強い樂天觀に照應するものと考へることが出來る。エマスンは空虛な理想論を云つてゐるのでなく、現實の可能性に眼を注いで語つてゐるのである。更にエマスンの絕對に個人の信仰的直覺を尊重して、教義や學者の權威や形式的制度を忌避する態度は、開拓者の宗教精神の傾向と一致する。

ホイットマンは、エマスンの思想の系統をうけつつ、それを一層徹底せる、奔放な形に強調した。そこには個人主義と平等主義の濃厚な融合があり、コムレイドの友愛と共に男女性の愛欲の憚らない讃美がある。それはすべて非東部的な大きな反動であるが、何よりもホイットマンに、フロンティアを想はすものは、素朴で開放的で、そして力の波動の豐かな、彼の健康な樂天の氣分である。それは彼の詩歌の、全く非定型的な形式の創造のうちに現はされてゐるものであり、この詩形とリズムそのものが、最も直接なフロンティアの生命の表現と云ふことが出來る。それ

はエマスンも、事實自己の文學の上には果し得なかつたものであるが、ホイットマンのこの眞實に西部的な作品は、アメリカ文學に於ける最初の、アメリカ的な一典型を完成したものと云ふことが出來る。

この樣なエマスンやホイットマンにも看取される樣に、フロンティアの新しい精神なるものは根柢に於て、個人主義の信念である。西部開拓者は、主として無產者であり、勞働者であつたに相違ないが、彼らの境遇は、第一に封建的な支配階級を上に持たないがため、第二にその勤勞によつてより良き生活に自己を高める可能性を十分に示されてゐたために、彼らをして、いつまでもプティ・ブルジョアの意識を失はしめなかつた。彼らはヨーロッパ諸國の勤勞者の如き團結の必要に追ひやられることなく、常に個人の立場を守らうとした。フロンティアが結局プティ・ブルジョアの觀念の圏內にあることは、マーク・ツウェインや、ノリスの作品を見る際に於てさへ彼らの社會意識の本質や性道德の先入見の上に看取することが出來るであらう。

けれども、このプティ・ブルジョア的個人主義は、西部フロンティアの環境にあつて その農本的な經濟機構の上に築かれた、全く必然な、從つて最も强力な實質をもつ觀念である。その故に、それはアメリカ國民性を決定する根柢的な要素となり、そのロマンティシズムを支へ、眞正

なアメリカ的文學の發生を促進し得たのである。エマスンはその屢々引用される言葉に云つてゐる——"America begins with the Alleghanies."（アメリカはアレガニイ山脈を以て始まる）フロンティアは、まことにその山脈以西に、眞實のアメリカと、從つて眞實のアメリカ文學を、造つたものと云ふことが出來よう。まことに、ホイットマンとマーク・トウエインに於て、吾らは最初の紛れなくアメリカ的な詩人と作家をもつのである。

六、産業主義

アメリカの産業主義は、その東北部の一角から發達したが、それは西部及び南部の農業地帶によつて、その進展を阻まれることが久しかつた。西部フロンティアは、その地理的環境と生活態の結果として、地方的な獨立の確保によつてその自由を享受せんとする要求が強かつたが、同時に西部地方の開發のためには、國家的の助力を借る必要があることはその十分に感じてゐる所であり、その上に、貴族的な奴隷維持の南部諸州とは、その徹底的な民主精神によつて到底相容れないものがあるために、西部は（その利害の共通するものが少いにも拘らず）次第に北部と連衡する形となり、北部の産業主義が南部の保守的な農本主義と衝突する時期に至ると、完全に北部と結合して、南部を潰滅せしめたのである。その間に、一八六二年、自作農場法（Homestade Act）即ち移往民に一戸あたり一六〇エーカーの土地を移讓する法律が、議會を通過したことは、西部住民に最も大きな滿足を與へ、北部はこの政治的讓歩によつて西部との聯合を一層固くすることが出來た。けれども同時に、北部は、高率關稅の制定、國立銀行の設置、大陸横斷鐵道の建設助成と云ふ如き、自己の熱望せる法律の成立に成功した。かくて、南北戰爭は南部の政治的經濟的組織とその勢力を完全に破壞すると同時に、北部は新たに開かれた舞臺と、それに適應する道具立により、壓倒的な勢を以てその産業資本主義を押し進めることとなつた。それは久しく南北抗爭の中心問題であつた二つの相反する態度の解消であり、自由貿易は保護貿易に、金融貨幣政策の地方分散主義は中央集權主義に全く制壓されたのである。かくて南北戰爭は、四年間の戰役そのものよりも、その含む社會革新としての意義が遙かに重大であり、これによつて、政治の中心權力が確定され、憲法の重要修正となり、階級の關係や富の分配に大きな變動がもたらされ、アメ

リカ全土はここに國家的統一の途に急速な前進をなすのである。

けれどもその統一にあたつては、南部の對抗が消滅した今となつては、當然東部の產業主義と西部の農業主義との間に、再び爭鬪が呼び起されねばならなかつた　そしてこの爭鬪に於て、結局東部はまた西部の征服者となるのである。

自作農場法の制定以後　西部開拓地にはますます活潑な移住民の流入を見るに至つたが、同時に東部資本家は、鐵道敷設の事業を進めて、政府より巨額の助成金と土地の讓與を受け、容易に莫大の利益をあげ、しかもこれらの鐵道は、豐富な鑛物石油資源、或は森林牧場の開發線となりそれら產業の各部門には、久しからずして多くの富豪が輩出した。そして大小の都市の出現は、次第に田園の人口を吸收し、そこに當然勞資の問題を生ずるに至り、執拗な勞働爭議を頻發し、その結果は、不快な階級對立の意識を植うるに至つた。

けれども同時に注意すべきことは、農場自身が產業化する現象であつて、新しき科學的な農具の輸入は、從來の單純質素な農耕生活を一變せしめ、しかも農民はその高價な器具と繁忙な經營法によつて、却つて所期の利益をあげることが出來ず、一方成金富豪の奢侈な生活は、田園にまで模倣の風を生んで、農家は殆んど常に經濟上の逼迫に惱まねばならなかつた。フロンティア精

神のもつ道德性は世代の移行と共に頽廢していつた。また、農園貴族が滅亡した南部地方にあつては、戰後農園の多くは、ブティ・ブルジョア或は解放奴隷の手に移つたが、小作人或は雇傭勞働者の使用による大農園經營の方法も、同時に次第に盛んになつて來て、從つて器械的な農耕法も一般に行はれる樣になり、かくて南部もまた、著しく產業化の狀態を示すに至つた。

農業地帶の產業化に伴つて、これに根柢的な衝擊を與へたものは公有地消滅の事實であつた。政府は南北戰爭前よりその所有土地を賣却してゐたが、一八六二年の自作農地法は、忽ち土地渴望者の殺到を呼び、しかも政府は、鐵道會社及び土地思惑業者のために莫大な土地を讓與したので、その後三十年を經過しないうちに（一八九〇年）未開地は悉く個人所有の手に歸してしまつた。かくて農民及び一般勞働者は、その財力を以てしては新たに土地を得べき希望を殆んど剝奪され、自己の立場についての不安と共に、政府の處置や鐵道會社の營利的態度に對して大きな不滿を感ぜざるを得なかつた。フロンティア精神なるものは、結局無所有の未開土地の無限な展望に依存するものであつて、そこにその樂天觀も獨立自尊の信念も生れるのであるから、この土地の消滅と云ふことは、西部農民の（生活のみならず思想の上に於ける）根本的な變動を意味するのであつて、一方農業自體の產業化に應じて、農民を全く產業主參の勢力圈內に置くこととなつた。

産業主義の西部征服（或はむしろアメリカ征服）と云ふことは、今フロンティア精神について考へた如く、その大きな意味を、國民の精神に於ける動動にもつのである。東部の産業主義が、その進展にあたつて敵としてもつたものは、一方は南部西部の農業主義であり、他方はロマンティシズムの思想であつたと云ふことが出來る。ロマンティシズムは殊に十七八世紀のピュリタニズムに反動して起つたものであり、個人の價値と自由の尊重と、自己發展の樂天觀を信條とする。それはまた、東部の神政的社會の中からさへ必然に起つて來た近代産業主義の動向に應ずるもので、産業主義の發展のためには、この樣な個人主義への解放を必要とせられたのである。その點に於て、それは新時代の道德であり、實踐の精神であつて、産業主義に全的に敵對するものではない。そのことは、例へばトランセンデンタリズムの主張についても、認め得られる所である。けれども、この産業主義が、次第に態勢を固め、そ飽くなき實利追求の活動をひろげるに至るや、個人の意志と殊に精神的な理想を尊重するロマンティシズムは、漸く自己との根本的對立を認識しそれに對して反抗の批判を加へざるを得なかつた。けれども産業主義の進展は、必然的な推進力を以て進行し、ロマンティシズムを次第に無力な地位に逐ひやつて、南北戰爭の頃までに

は、全くこれを壓服した。かくて、ピュリタニズムに代つて、一八〇〇年頃から半世紀以上、支配的な勢力をアメリカ國民の間にもつてゐたロマンティシズムの精神主義は、科學と常識の上に立つ産業主義の精神によつて代へられることとなつた。

産業主義の敵とするロマンティシズムは、勿論、その本據たる東北部に立て籠つたものではない。西部フロンティアの精神は最も活潑なロマンティシズムであり、南部農園地帶に支配する氣分もそれである。それは、本質に於ては、濃厚なデモクラシイの思想であり、しかもその思想は彼らの環境と歷史によつて、多分に理想主義的な、憧憬的な色調をもつものである。この個人的で且つ民主的な（云はば遠心的な）傾向は、今、産業主義が、東部の産業人を中核として、一つの國家統一的な勢力として發動して來た時期に會しては、矛盾せる非時代的なものと見られざるを得ない。産業主義は自己の立場より、それを統制の方向に、求心的に集中しようとする。その上に、このロマンティシズムは、新時代の中心動力たる「科學」に對して、あまりに盲目である。産業主義は科學によつて、重要な發明と有效な生産經營の方法を供給され、組織的な堅實な發展を遂行しようとしてゐる。これに對して、現前の事實に背いて、全く唯心的に、人間進歩の漠然たる信念に立つことは到底長く許されない。産業主義は、ロマンティシズムの夢想に代ふるに、

その事實的な思考を以てしたと云ふことが出來よう。

けれども、西部及び南部のロマンティシズム、或はその上に立つ農民が、産業主義に征服されたと云ふことは、思想の上よりも事實の上に、生活の上に、最も明瞭な、遲疑することの出來ぬ形勢となつて出現したものである。それは上に云つた如く、農業自體の産業化や、未開公有地の消滅や、農村の都市集中の傾向や、奢侈生活の滲潤等の事實により、彼ら農民に生活の緊迫困難と共に不安焦燥の氣分となつて迫つて來たものであり、必然の結果として、彼らは（むしろ無意識のうちに）從來の觀念を捨て、新たなる生活態と經濟組織に適應する觀念に移らざるを得なかつた。

けれども、その氣持は決して明るいものとは出來ない。ロマンティシズムの夢を捨てたことはそのオプティミズムから、露骨な現實のペシミズムに移つたことを意味する。そして實際、農業地に於て感ぜられる産業資本の壓迫と、また新興の工場、鑛山或は交通事業のうちに經驗されねばならぬ勞資抗爭の深刻な印象はこのペシミズムの影を一層濃いものとした。そして、かつてニュ・イングランドのピュリタニズムが、超越神のうちに人間の運命を決定する絶對的な力を見た如く、新しい時代の現象のすべてを支配する一つの不可抗な力の存在を感じて、そこに再び暗鬱

な一つの決定論的觀　を抱く樣になつた。そして個人主義的な努力の信念は當然にその素朴さを失はねばならなかつた。

×

かくて、好むと好まざるに拘らず、産業主義の大勢のもとに置かれたアメリカにあつて、人々は、次第に憚らざる氣持を以て、實利と財富を相競つて追求する態度に一致して來た。そして、アメリカ人がその植民の當初よりもつてゐた、中産階級的な勤勉克己の逐利的な性格は、ここにその制限と修飾を取り去られ、最も露骨に　自己の本質を徹底さすべき機會を與へられるに至つたのである。この富中心の時代、一八六五年より一八九〇年に至る四半世紀を、マーク・ツウェインとウォーナア（Charls Dudley Warner, 1829-1900）合作の小說 The Gilded Age (1873) にちなんで、「鍍金時代」と呼ぶ。

「鍍金時代」の社會特色としては、理想なき富追求者の集團から當然推斷される樣に、醜惡な政治道德の腐敗と、趣味教養の低俗化であつた。鍍金時代の勝利者であり支配者であるものは、常に鐵道鑛山工場等の資本主であつて、國民の富の大部分は彼ら少數者の手に迅速に集積されて

行つた。（一八六一年、國内に唯三人あつたミリオネアが、その後三十六年間に三千八百人となつたと云ふ統計があり、また世紀末には全アメリカ人の十分の一が、國富の十分の九を所有してゐたとも計量されてゐる）これら富の成功者が、その財力を以て要求する建築や繪畫や彫刻や室内裝飾の類は、唯派手で壯大で、物質的な誇を思はす樣なものであり、落ちついた美の本質から遠いものであつた。そして食卓の會話に最も盛んなものは、金錢に關する話題であつた。そして一方、富の希望から遮斷された勤勞者の群は、曲馬や拳闘の如き大衆的な觀覽物に樂みを求め、またその間にひろがる廣大な中流階級は、その舊來の宗教や道德觀念をいよいよ固守しながらも、その財力にかなふ慰安や教養を求め、質素勤勉を以て幾分とも生活の向上を計らうとする態度をとつた。

けれどもこの樣な趣味の一般的荒廢の中にあつて、新時代の富が貢献した點が全く無かつたわけでなく、たとへば繪畫美術品の蒐集や、樂團創設と云ふ如きことに、或は教育機關の充實に甚だ有益な努力をなした。それに關聯して、宗教歷史經濟學等の各分野に於て、この事實的な科學的な時代に應ずる重要な檢討と新しい解釋が、その思想學說の上に施されて來たことも、アメリカ文化の歷史の上に、意味深い變動として注意しなければなるまい。この關係はまた、美術建築等についても考へられるのであつて、それは富豪の趣味の支配のもとにあつたにも拘らず、その

風潮に反抗する一部の美術家は、新しい時代の一層深い精神を汲み、形式的な傳統的な典型を離れて、一般民衆の生活の世界から、眞摯で現實的なものを得來らうとし、或は科學の展開に連絡してそこに近代的な手法や樣式を創造しようとする努力を示した。

この現象は、文學に於ても、同樣に指摘出來る樣である。この時代に於ては、富の增大、殊に大陸内部への都市的文化の擴大とその人口の增加、教育の發達等によつて、文學的讀物の需要が激烈に增加して行つたが、一般に最も喜ばれる作品は、矢張「鍍金時代」にふさはしい華麗多彩なものや感傷的傳奇的なものであつた。けれども、この風潮の中にあつて、眞正の文學の眼、次第に開かれてゐたことを見のがしてはならない。それは時代の現實的な科學的な精神に應ずるものであり、その精神を以て、表面的な賑やかさや混亂の底に事實の姿を見ようとするものである。その「氣分」を染めるものは、當然かの樂天觀に代る新しい決定論のペシミズムである。その樣な文學が、西部フロンティアの傳統の中から出たものとして、マーク・トウエインやガーランドやノリスがあることは前章に考へた如くである。吾々は更に、その富裕階級の中からも、たとへばヘンリ・ヂェイムズの如く、自己の周圍の生活に懷疑の瞳を向け、そこからヨーロッパの傳統的文化をふり返ることによつて、その獨特な細紋の文學の中に、一つの批判を立てようとす

る文人が出たことを見る。或はこのマーク・ツウェインやガーランドやそしてまたジェイムズを早くより認識し推讃したハウェルズ（William Dean Howells, 1837-1920）が、西部フロンティアの出身で、東部ニュ・イングランドの傳統にひたりながら、殊に八〇年代から九〇年代に發表せる小說と評論に於て、時代の齎らす社會的な問題に十分な注意を拂ひ、その愼密な寫實的作風と指導的な批評を以て、次代のリアリズムの基礎を固めたことも、注目されなければなるまい。

この樣にして、鍍金時代は、その低俗や混濁にも拘らず、アメリカ文化の、疑ひもなき一つの活潑な展開期として、おのづから重要な文學の動向をその中から生み出したのである。しかも、この時代は、かかる產業文明の中心問題に眞摯な注意を限局したわけでなく、その躍進的な發達の反映として、文學の主題を多樣な興味ふかき面にひろげ、たとへば地理的範圍についても、西部南部北部の、僻遠な地方の異色ある風物や住民を使用することが、甚だ自由に、有效に行はれた。ブレット・ハート（Bret Harte, 1836-1902）らの所謂「地方色の文學」もそれである。カール・ヴァン・ドーレン（Carl Van Doren）の如きは、この事實に注目して、一八八〇年から一八九〇年に至る十年間は、アメリカの歷史の他のどの十年間にもまさつて多數の良き小說を產出してゐるとまで云つてゐる。

かくて、吾々はこの鍍金時代のうちに、產業主義の旺盛な汎濫が、東部のピュリタニズムの遺產や、南部西部のそれぞれの精神を、殊にそれらすべての底に宿つてゐたロマンティシズムの特性を、一つの大きな流動に溶融して來た經過を見ることが出來る。勿論それらの精神は、全く產業主義に消化されたものでない。それは一部の變質にとどまり、その變質が更に產業主義に對する反抗として作用してゐるものがあることも認め得る。けれどもその反抗もそれ自體が矢張產業主義の派生的現象とも見得るであらう。そしてさう云ふ形に於て、產業主義の大勢は、一層盛んな激しい流を以て次の時代に入るのである。

〔このやうな大勢の中にあつて、ヘンリ・アダムズ（Henry Adams, 1838-1918）は、ニュ・イングランドの貴族的傳統から出、現代の「雜雜」に絕望して中世の「統一」にあこがれ、しかも一方ダイナモに象徵される科學の前途に希望をかけた。彼の如き懷疑家（スケプティク）の出現もまことに時代的といへるのである。〕

七、機械時代

一八九八年の米西戰爭は、アメリカの世界的發足の大きな道標だと考へられる。アメリカはこ

の年また懸案のハワイを正式に併合したが、その内に充溢する物質力は、投資と輸出品の市場を求めて、既にこの前から様々な形に海外發展の衝動を示し始めてゐたのであるが、今後のアメリカは新しい世紀への進入と共に、その態勢を一層明瞭に強化して行く。米西戰爭の結果フィリピン群島を獲得したことは、リンカーンの當時より既に外交當局の夢想する所であつた太平洋上への進展に大きな足場を得たことであり、中國を中心とする列强の角逐に、門戸開放の標語を以て强力な關與をなすこととなつたが、中部アメリカ或はメキシコ一帶にも、機會あるごとにその支配權を確立する努力を弛めなかつた。そして西半球に完全な覇を稱しつつ世界大戰の決定力として參加し、ヨーロッパ列强の政治的經濟的ヘゲモニーを、大部分自己の手中に奪ひ去る結果となる。ここまで來て、アメリカ從來の植民地的コムプレクスも自然消滅したに近い。一九三〇年、シンクレア・ルイスがアメリカ文學者として初のノーベル賞を授けられた時、ある論者は、それはアメリカの文學がアメリカの資本と共にヨーロッパ諸國に迎へられたことを示すものであるとし、彼らの大半がアメリカの借金の中にありアメリカの實力を認識せざるを得ない時期に達した今、從來アメリカ文學一般に、まじめな考慮を與へようとしなかつた態度を、變更するに至つたのは當然であると論じた。

このアメリカの世界的進展の時代が、その產業主義の進展と表裏するものであることは云ふまでもない。科學の發達に連絡する新しい生產と經營の方法の、躍進的な發達によつて、產業資本の活動と業績は、自ら阻止することも得ない必然の勢を以て、增大して行つた。そこに包容されて行つた勞働者事務員或は販賣外交員達までの、產業群の大衆の巨大さは云ふまでもない。ミリオネア自體の數まで鍍金時代の增加とはまた格段の差を以て、比較的僻遠の諸州にまで多數に出現する樣になつた。けれども同時に、この樣な富の權力の增大は、鍍金時代に倍加する弊害と腐敗を生んで、當然それへの反抗批判を喚び起さねばならなかつた。殊にそれは西部農業地の悲境におしつめられた農民の中から强力に發生して來たものであり、また工場勞働者もこの動きに加はつて行つたが、更に廣汎なる一般中流階級が、その傳統の道義的觀念を地盤にして、社會的大勢をこの方向に傾けたことを認めねばならない。それは一つの廣いデモクラシイの主張要求である。

卽ち、政府及び政黨が常に少數富裕階級の自由と利益のために行動する弊を矯めんがために、彼らは上院議員の直接民衆選擧、婦人參政權、人民投票等の諸制度を獲得し、國有地處分、鐵道運賃制定、金融通貨勞働の諸政策を庶民本位のものたらしめ、所得稅相續稅の累進的增徵と、そ

の税收入の民衆福利への使用を實現し、更に石油砂糖鋼鐵等の獨占大トラストを制肘する法律の制定に成功した。このデモクラシィ運動の大きな指導者は、政治經濟と道德の一致を掲げたルーズヴェルト（Theodore Roosevelt, 1858-1919）であり　ついでウィルスン（Woodrow Wilson, 1856-1924）であつて、一九一二年ウィルスンの大統領當選の年は、アメリカ中流階級の最も得意の頂點にあつた時とさへ見られてゐる。しかも、その政黨所屬の如何に拘らず、彼らの前後の歷代大統領にあつても、この社會民主主義的な目標は常にその政策から見失はれることはなかつた。

けれども、大戰後一九二〇年、ハーディングが大統領となつた時は、ウィルスンの理想的政策はすべての方面に強い反動を喚び起してゐた。かくて所謂「常態（ノーマルシィ）」の新しい標語のもとに、內治外交のすべてに於て、實利的常識的な政策がとられ、それは更にクーリッヂによつて遂行されて行つたので、從來のあまりに强烈な民主的風潮も抑制されて、（例へば租稅率の輕減の如く）富裕階級もその束縛を緩和されることとなつた。然し、事實に於て、その樣な政策の調節如何に拘らずデモクラシィの旺盛な流動の間に於てさへ、ブルートクラシィの足場は少しも搖らいでゐたのでなく、一九一四年から一九一九年に至る高額納稅者の表は、ミリオネアの數が却つてその戰中に數倍の增加を見たことを示してゐる。鍍金時代に鑛山鐵道等の經營によつて出現したミリオネア

に、今は一層現代的な自動車電氣器具映畫等の諸事業によるミリオネアの多數が加へられたことを注意すべきであり、富の蓄積と事業發展の速度と容易さに於て、それは全く鍍金時代をも嘲笑するものと云ふ事が出來る。そしてこれらの事業に包容さるる勤勞者群は勿論のこと、一般中流階級も株の所有や貯金保險等の機關の利用によつて、この繁榮の利潤にあづかり、その生活に從來になき物質的な餘裕をもつに至つたことは否定できない。

けれども、この樣な一般的な光明の中に、アメリカの經濟界は決して長く安定し得なかつたのであり、大戰の餘波としての失業問題や世界的な恐慌と關聯して、勞資の相剋は一層直接なものとなり、農村は再び深刻な困難に陷つて行つた。かくて、ハーディング、クーリッヂの常態政策は、矛盾と混亂を含んだまゝ、三十年代に引きつがれたのである。

×

この時代の、かくの如き富の增大と活動の原因となつたものは「機械」であると云へる。一八九〇年以後今日までを、文學史上にも、「機械時代」と呼ぶ人がある。機械がその經濟的貢獻と共に、この時代の生活と精神に與へた效果には二つの側面が考へられる。一つはその大量生產（マス・プロダクション）

であり、他は電氣、ガソリンによる工業技術である。大量生産の發達と、更にそれに伴ふ活潑な販賣運動は、手工業の範圍を逐年に壓迫し、工場より臺所に至るまで、各種の能率的な機械器具を充滿せしめたが、更にこの生産方法は、家具裝飾衣服履物より蓄音器ラヂオの娯樂器具に至るまで、一般民衆のあらゆる生活の部面に、均一廉價な機械製品を提供し、これらの製品の産額とその種別の多樣さは、驚くべき速度を以て增大して行つた。衣食住をこの樣な大量生産品の包圍の中に營む時、その民衆の思考趣味の上に、どの樣な變化が起るかは想像するに難くない。既にアメリカのデモクラシイの中にその初めより現はれてゐた均一性(ユニフオミティイ)は、ここに完全に强化され、しかもそれが古典性と獨創性を全く缺いた甘美淺薄な色彩形狀の中に統制されるのである。

次ぎに、電氣及びガスを動力とする諸種の發明は、蒸氣機關がその設備運轉に費用と手數を要することにより、おのづから工場の都市集中を促し、一定の鐵道路線を固定し、田園と都會の境界を强化する傾向があつたのに反し、廣き範圍にまた容易に、生産と交通の便益をひろげ、飛行機自動車或は映畫、ラヂオ等の諸機械によつて、都市の文化を直ちに田園に傳達することとなつた。この樣な民衆の一般的結合は、さきの均一化の傾向と結んで、殆んど全國民の家庭や事務室や社交界の中に、標準的な一樣の、多くは都會的な、知識や判斷や趣味や風俗の定型を散布することとなつた。そして民衆は、その便益と刺戟のうちに、一樣に多忙で陽氣な生活を楽しまうとし、その公けの動きに於てさへ、その全部が一面的に規定された方向に向かうとするのである。

機械時代の、文化の諸相については、鍍金時代に見た所の現象が、一層濃厚になつたものと云ふことが出來よう。即ち、歴史法律經濟哲學心理學の各分野にわたつて、そこには富の活動と民衆生活の物質化に對應する態度が著しくなり、實踐を重視して唯心的な演繹的な解釋を避けようとし、理論や批判よりも、事實自體の蒐集や觀察に努力を向けようとする。また宗教は、一面自然科學や高等批評の攻撃の一層鋭くなることに耐へねばならなかつたと共に、それ自身のうちに青年會運動の如き實際的な傾向を强くし、社會問題や勞働問題にも積極的に働きかけようとする態勢をとるに至り、更にまたその反極として、保守的なファンダメンタリストの行動が鮮明に浮き出される樣になつた。

この樣な富の時代に於て、文學藝術が富自體から蒙つた利益としては、ミリオネア達がヨーロッパから購ひ來つたすぐれた繪畫彫刻やその美術館への寄附の如きを考へることが出來るであらうが、更にこれら實業家によつて、印刷出版の事業が、その生産と利潤に於て、資本主義事業の主要なるものとして取りあげられる樣になつたことを注意せねばならぬ。かくて各種の雜誌書籍

の旺盛な出版とその販賣政策は、當然文學の世界にも大きな效果を及ぼし、多くの作家は、恰もかの大量生産による均一的な日常雜貨の如く、大衆の趣味感情にかなふ手輕な作品を機械的に生産することによつて豐富な報酬を受くることが出來るやうになり、同時に一層まじめな文學の作家も、從來のどの時代にも見ることの出來なかつた好條件の待遇を與へられるやうになつた。更にこの關聯に於て演劇の方面を見ると、劇場は既に鍍金時代に於て商業の手に征服されたと云ふことが出來るのであるが、この時代に入つて、單調多忙な生活から安易な娯樂を求むる民衆の激增と、一面映畫の發達との競爭によつて、演劇はますます大衆的な涙と笑の作品を求める樣になり、作家はその樣な作品の大量生産に沒頭する形になつて行つた。けれども同時に、この樣な商業劇場の隆盛が、一層まじめな野心をもつ作家に、進出の途を與へる機會をもつことも否定出來ぬ所であつて、かのオニールの經歷の如きに、その適例を見るのである。

×

機械時代の文學の、そのまじめな側に於て、然らば吾々はどの樣な主流を見るであらうか。吾々は既に鍍金時代に於て、リアリズムの動きの起つて來たことを見た。それが產業主義による社

會的不安に基くものであることは勿論であるが同時にそれを裏づける思想的な因子のあつたことを看過してはならない。十九世紀最後の四半世紀に於て、內在神の信條をも失つたアメリカの青年に思想的活路を與へたものは、スペンサアの目的論的な進化論であり、これによつて人間の完成と社會進步の可能性は、よし生物學的にでもなほ信ずることが出來ると考へられた。新しい文藝傾向の選士となるべきガアランドやドライザアやロンドン（Jack London, 1876-1916）が、何れもスペンサアの哲學に學んだことは興味ある事實であり、更に彼の哲學がその本質に於て十八世紀フランスの革新思想や、またジェフアスンの民主主義に通ずる所のあることも、それが新文學に與へた動力の偶然でないことを說明する。然しやがて、このスペンサアの進化論も、目的論的希望を排するヘッケルの機械論的唯物論に代へられる樣になり、「進步」の觀念は消失して、人間は無意味無目的な物質的流動の一微分子と見られ、人々はここでも陰鬱な決定論の中に捲き込まれる樣になつた。この樣な思想的推移のうちに、吾々はまたリアリズム文學の深化の過程をうかがふことが出來るであらう。そしてドライザアの如きは、この過程の、最も重要な一標識であると云ふことが出來る。

ドライザアの作風には、バルザック、ゾラ等のヨーロッパ自然主義の影響がとり入れられてゐ

ると共に、またアメリカ作家としての特色ある主觀の沸騰が、それをヨーロッパ的なものより區別してゐることも明らかである。けれども、大體に於て、彼の作品には、生存競爭の人間苦の科學的諦觀に立つ自然主義的な客觀性が支配してゐると云へる。吾々はアメリカのリアリズムとして、このペシミスティクな自然主義の系統とならんで、一層攻勢的な主張的な社會批判のリアリズムがあることに注意しなければならない。それはガァランドの初期に早く現はれた傾向でありノリスやロンドンにも指摘されるものであるが、それが活潑な展開を見せたのは、今世紀に入つて、かのルーズヴェルト＝ウィルスン時代に於て、民主主義精神の昂揚による政治淨化運動が高調に達した時であつた。即ちそれは、一面ジァーナリズムと連結して、所謂「マック・レイキング」の暴露的な文字による挑戰を行ふと共に、多數の政治小說や經濟小說、即ち「問題小說」を出して、輿論に宣傳指導を行はうとした。アプトン・シンクレア（Upton Sinclair, 1878-）はこの運動の中心的存在であり、シカゴ屠殺場を問題とした The Jungle は一九〇六年烈しい反響を起した。そしてこの樣な喧騷の中に、（この種の文學が多くの場合根柢ある思考と說得力を欠くものであることは云ふまでもないが）、質實暗鬱なかのナチュラリズムの流は、一時壓倒される形にさへなつた。

けれども、この樣な文學運動が、アメリカの民衆に、政治と經濟の現實を示し、その社會的意

識を覺醒せしめたことは否定出來ぬ所であつて、かくて彼らの自由主義の興奮は、ウィルスンの新施政に滿足を發見しつつ、大戰末期にまで押し進むのであるが、吾々が文學の立場から注目すべきことは、この樣な表面的な現象の中核として、アメリカの一般知性人の中に、現實的な批判精神の流が一層確實にひろがつて行つたことであろう。

大戰後のリアリズムについては、大戰がリベラリズムに對する幻滅と反動を生む結果となり、他面、戰後の經濟的繁榮なるものが、一層の矛盾と困難をアメリカ社會にもたらしたがために、サティリカルなシニカルな色彩をもつて來たことを當然と考へなければならぬ。この變化は、だとへばルイスやアンダスン（Sherwood Anderson 1876-1941）の、中西部の地方都邑の人と生活を題材とする作品に明らかに示されてゐる。これらは、フロンティアから擧げられた新しい一つの反抗と考へることが出來ると共に、その反抗は政治的思想的に確實な動機に乏しく、一層洗練された知性と感情によるものであり、アンダスンにあつては心理的精神分析學的な興味に促されてゐることさへ見るのである。ただ彼らの批判の鋭さは從來に例のないところであり、それに關聯して「性」の現象の考察が執拗に行はれる。

かうして一九〇三年から一九一七年頃にかけて、アメリカの小說を支配してゐた社會的政治的

批判の態度は、大戰と共に終熄して、一九一九年頃から新しい文學の時代が開け、そのリアリズムにも特殊な變動が起つたのであるが、そこに現れてゐるルイスらの態度は、結局彼らがなほ個人主義的な觀點を離れないことを示すものであつて、同時にその樣な態度の究極から、アメリカのリアリズムが、また次の展開に促進される必然をもつことも判斷されるのである。〔即ちそれはより切實な連帶的自覺に立ち、一層深く民衆の体驗に根をおろしたもので、狹義の社會的文藝のみならず、二〇年代から三〇年代の一般的傾向は、このやうなリアリズムの深化を示してゐるのである。〕

×

鍍金時代から今日までの過程を、かく考へる時、アメリカの文學は、このリアリズムの成長によつて、初めてアメリカ文學としての本質的な價値を造りあげたと云ふことが出來る。それはアメリカの產業文化の獨特な展開に應じつつ、生活と思想の變動を手ばなすことなく、そこにまた獨特な自己を造つて來たのである。

アメリカの現代文學の特色は、勿論リアリズムの側にばかりとどまるものではない。文學が今

日の如き環境に於て、超越的な或は逃避的な態度をとらうとすることも當然であつて、情感的な美化性的な魅惑或は輕いアイロニィの文學をここにも見ることが出來る。そしてこれは、多忙單調な民衆の必然な欲求であるばかりでなく、アメリカの上層ブルジョアの貴族的洗練が、世代の經過と共に進行するにつれ、彼らの無拘束な生活の閑暇と趣味が、一層その樣な種類の文學藝術を要求する樣になつたことにもよるのである。

けれども、それについて吾々は、アメリカ文學の特性はその社會意識に基く現實性であると共に、また感覺的な心理的な新しい美感の把握にあることを、正しく認めねばなるまい。それはアメリカの物質的文化の進歩と、民衆生活の豐富化多樣化に關聯するのであつて、そこにアメリカ人は、一種の正確明快で速度的なものに對する美感を得來つた樣に思へる。それは飛行機や自動車のもつ合目的的な形態の美であり、スカイ・スクレイパアの線と面と量の包容するものであり、ジャズ音樂の狂燥の中に押し流れるものでもある。吾々はそれを、一九一四年頃から提唱されたImagism 詩の、新しいリズムや明晰な寫象の要求のうちに見ることが出來るであらうが、それはまた多くの散文作品のうちにもうかがはれるものである。この美感は一面無希望な頽廢の氣分に接するものであると共に、それが固定的形式の解消と、卽物的な理智的な精神の透徹を願ふ點に

於て、大戰後の世界的な動向に通ふものがあり、そこに積極的な未來性の一面を含んでゐることを否定出來ない。それは例へば、殊に劇の世界に活潑に行はれた表現主義の、リアリズムとして意義を思ふ時に、一層明らかになるのであつて、更に、この樣な感覺的手法が、社會的意圖をもつ小說に適用される傾向のあることも、偶然とは云へない。（たとへばジョン・ドス・パッスの場合）少くとも、吾々は、このアメリカ的な新しい美の感覺が、そのリアリズムと全く相排斥するものでなく、屢々そのリアリズムのアメリカ的な特性を助くることに作用してゐることを認めねばならないであらう。そしてこのやうな特殊の美とそしてリアリズムこそは、アメリカ文學を世界の文學の中に押し出す長所であらねばならぬのである。

――アメリカの文學は、この三百年の間に、ピュリタニズムの決定論から、ロマンティシズムの樂天觀に移り、また唯物的な決定論に引き入れられて、今日その中に、リアリズムの視線を定めることに、なほ不安な努力をつづけてゐると云ふことが出來る。この三百年の間に、アメリカの文學の眞實に文學としての呼吸をしたのは、最近の百年に過ぎぬと云へるのだが、その環境のなまなましさと、實際的活動の多忙さの中から、一方イギリス的傳統を脫ぎすてつつ、今日の姿にまで成長して來た。それは文學と云ふものの不思議な强い生命力を示すことでもあらうが、アメリカ自體のうちに　その非文學的な外觀の中に　新しい文學の糧のそなへられてゐることも否定出來ぬであらう。ホイットマンは詩集『草の葉』(Leaves of Grass) の自序の中で　「あらゆる國民のうち合衆國は、詩的材料の充滿した血管をもち、從つて詩人を要すること最も强いのであるが、必ずや最も偉大な詩人を得て、それら詩人を最も偉大に使用することとなるだらう。」と云つてゐる。その最大な詩人が既に出現したか否かは斷定出來ないが　アメリカがアメリカとしての特殊な詩的材料に滿ち、從つて自己の詩人を持つ樣になつたことは、そして今後もそれを持つだらうことは、疑へないやうである。（一九三七・三月）

アメリカ現代小説

一九三〇年代

ここに私はある、道の半ばに、三十年を —
三十年をほとんど空費して、二つの戦争の間、のその年を——
言葉を使ふことを學ばうとつとめつゝ、しかもすべての企ては
全く新しい出發であり、違つた種類の失敗なのだ。

So here I am, in the middle way, having had twenty years——
Twenty years largely wasted, the years of l'entre deux guerres——
Trying to learn to use words, and every attempt
Is a wholly new start, and a different kind of failure

T. S. Eliot : East Coker (1

T・S・エリオットのいふ「二つの戦争の間の三十年」に、文學は、或はむしろ世界の知性人

は、さまざまの企てを試みつゝ、その度に、新しく違つた失敗をくり返さねばならなかつたらしい。この空費された期間は文學にとつても一つの混亂、一つの荒野であつたと考へられる。そのやうな中にあつて、アメリカ文學はむしろよく勉めたといつてよい。この文學に現はれたさまざまな展開と變動と成就は、この文學にとつて大切なものであるばかりでなく、世界の文學にとつて大切だ。少くともそこには強い意欲と、それを力づけ又それによつて一つの成果にまで固まらうとする豐富な生命がある。それは世界の他の文學には見ない程度のものであり、この二十年間のアメリカ文學の、少くともその活潑な樣相は、吾々の特別な注意に値ひするといつてよい。

この二十年間を吾々は大体二つの時期に、一九二〇年代と三〇年代に分けることができるだらう。二〇年代はアメリカにとつては、大戰後の好況時代であり、世界の富の集中のなかに、自動車工業を中心とする製產工業の科學的な大量製產の發達、月賦販賣制の普及は、國民の各層に生活の安定を與へ、更に富の餘裕を與へ、その自動車ラジオその他電氣とガソリンによるあらゆる生活用品の供給は、彼らの日常の生活に、從來にもなき便益と安樂と明朗さを與へることゝなつた。アメリカ人がむしろその民族性としてもつ「よき生活の愛」(love of well-being)は今こそ充分にみたされるやうに見えた。時代の通り言葉である「繁榮(プロスペリティ)」によつて國民の、むしろ人類の、平

和と幸福は永久に保證されるやうに見えた。それはたしかに文明における一進歩であつた。文學に近い側からとつて考へても、ラジオ映畫の普及は、演劇の地方巡回興行に破滅的な打擊を與へながらも、それらの演劇に充分とつて代るよき映畫と音樂を、都會人に劣らず田舍のあらゆる階層にまで普及せしめ、文化を少しく水準を下げることによつて全國的に擴充する結果となつた。そしてかういう傾向は又、民衆の生活の餘裕(富の餘裕と、生活の便益化能率化による時間の餘裕)と、出版事業、ジャーナリズムの發展その產業化に伴ひ、文學(書籍)の需要、消費の昂進、普及化となつて現はれてきた。ヨーロッパ戰後において、アメリカの文學が自己の獨立を確認するやうになつた原因の一つは、アメリカで作られた書物が國內だけの消費で充分產業的な採算が立つほどアメリカ國民の讀書欲と購買力が增大してきたことにあると考へられてゐる位である。

このアメリカ文學の獨立の自覺は、もちろんこのやうな原因よりも、ヨーロッパ戰爭の實際の終結者としてのアメリカ人の誇と自信、そこから彼らがヨーロッパ人を離れて自己として考へ物を言ふことができると信じるやうになつたこと、政治經濟の支配者の立場から文化全般についても支配者的な感じをもつやうになつたことに、重大な原因があると考へられる。

ともかくもこのやうな社會を見て感ぜられることは、その物質の面と精神の面を通じての一つ

の膨脹である。しかもこの膨脹の藤に鋭い裂目が入り、そこに焦だち自由に自己を主張しやうとするものがある。自動車は便利であるが、その快速と、人を人目から遠くへ運ぶ自由さは、様々なこれまで知られなかつた悪徳をそこに生むであらう。青年男女はこれによつて容易に監督者の支配の外に出るであらう。その青年達はまた、外部の世界の豊富さと楽しさのために家庭を離れようとする。その家庭にあつても、一つの爐の邊に家族が靜かな長い夜を楽しむといふやうな空氣は薄れてきた。ラジオは絶えざる波動と刺戟をそこに送るのである。青年は家庭を離れ、また田舎の人々（殊に青年）は家郷を離れて都會に住まうとする。そこに道德と風習の混亂が生れる。この混亂には大戦中の氣風の影響がある。國民は自己犠牲の精神の反面に、自己の生命と幸福を運命にかける一種の「大膽（レックレス）」の精神を養ふことゝなつた。今その犠牲の精神が消えて大膽の精神ばかりがのこつたと觀察する論者がある。（cf. Fred B. Millet; Contemporary American Authors. p. 17.）ともかくもそのやうな感情は、この戦後の社會において無軌道に動きでようとするやうになり、殊に禁酒法の強制は必然に様々な不法行爲を生み、青年男女も叛逆的に却つて悪風に染まる傾向を見せた。スポーツや旅行は必然に盛んとなり、建物企業熱はスカイ・スクレーパーとなつてそゝりたち、土地思惑・株式思惑は堅實な事業家やブティ・ブルの家庭にまで浸潤した。——

すべてこのやうな十年間の現象は、膨脹と投機の現象といつてよい。そして二九年の十月の大恐慌にまでその現象が突き入るのである。

もとより、上に見てきたやうな現象が、當時のアメリカの社會の本体だと考へることはできない。しかし、文學が最も敏感に感受し、不可抗の反撥や非難の態度を以てこれを表現したものはこのやうな烈しい混亂の相であるのである。シオドア・ドライザーの（Theodore Dreiser, 1871-1945）の An American Tragedy (1925) が示すものは、この物質的關心の旺盛な社會の中において、どのやうに一人の青年が富める階級によじ登らうとして無智な犯罪をおかすやうになつたかの悲劇であり、シンクレア・ルイス（Sinclair Lewis, 1885-）が Main Street (1920) や Babbitt (1922) で示してゐるものは、村落（田舎町）の若い人々に生れてきた自己批判の反映であり、そこには田舎の傳統因習の無智と沈滯と偽善と憤病が暴露され、いはゆる「村落の戦」の攻撃側の主張が鋭く展開されてゐる。また禁酒法を背景とする青年男女の反抗的背德の實狀は、ジェイムズ・ティ・ファレル（James T. Farrel, 1904-）の三部作 "Studs Lonigan (1932-35) に最も精細に記錄されてゐる。そしてかういふ不安の陰鬱さの反面は當然官能ないし肉慾への陶酔となるのだが大戦直後に現はれて物議をまき起したジェイムズ・ブランチ・キャベル（James Branch Cabell, 1879-）の Jurgen (1919)

が含んでゐるものは、隱微にしてそれだけ刺戟的なエロティシズムである。この傾向はシャーウド・アンダソン（Sherwood Anderson, 1876-1941）を通じウィリアム・フォークナー（William Faulkner, 1897-　）に至ると、病的で殘虐な露出的なものとなるのだが、この肉感性はこの時代の作家のすべてに共通する著しい要素と考へることができる。また、肉への深い或は暗い陶醉でなく輕く明るくその表皮を撫でるやうな都會人的な遊戯的な快樂、一種のモダンな味といふものは、エフ・スコット・フィツジェラルド（F. Scott Fitzgerald, 1896-　）、ベン・ヘクト（Ben Hecht, 1894-　）、カール・ヴァン・ヴェクテン（Carl Van Vechten, 1880-　）らの文學に出てゐる。それは當時の流行のジアズ音樂の味と通じるものだが、フィツジェラルドの出世作 This Side of Paradise (1920) などは、このやうな皮肉な洗練された快樂、殊に遊戯的戀愛の中に、古く暗い家庭の退屈さを脱け出ようとする青年達の、朗らかに怜悧な行動と心理を描かうとしたものと見ることができる。アメリカ社會の困難な問題は、あらゆる刺戟と形態の中に自己を表現しやうとするのである。

ヨーロッパ戰爭の影響が、直接文學に現はれたものが、いはゆる戰爭文學であることはもちろんであるが、ジョン・ドス・パソス（John Dos Passos, 1896-　）の Three Soldiers (1921)、アーネスト・ヘミングウェイ（Ernest Hemingway, 1898-　）の A Farewell to Arms (1929)、或は E・E・カミ

ングス（E. E. Cummings, 1894-　）の The Enormous Room (1922) などは、それぞれ戰爭批判の鋭くまたよき表現の書物でありながら、ヨーロッパ人たちの戰爭文學とはおのづから違つた肌合ひをもつてゐる。それはアメリカ人がこの戰爭に對して一種の優超的立場をもつてゐた為めであり、そこに一種の誇り・餘裕・自由さといふものを保つてゐることが感ぜられる。ドス・パソスの U. S. A. (1933) 中の男女の對大戰態度に至つては、自由さそのものであるといつてよい。大戰は出征したアメリカの若者たちにとつては、大きな目ざましい經驗と教育であつたことはもちろんであり、それは合衆國の各地方と各階級の青年を集結して、それに一樣の訓練を、教養の平均化を施したことに大きな意味をもつといふことができる。しかも彼らのうちで一部の特殊の教養をもつものは、戰線の体驗を受けとること深刻であり、そこに幻滅と反戰の感情を強くもつやうになつたのであるが、彼らのあるものはヨーロッパ殊にフランスの文化と人間に接觸してゐる間に、アメリカに無きその傳統と洗練の味に魅惑され、戰爭の終つた後もその土地に留まらうとするやうになつた。そこにはやり所のない幻滅流浪の氣持と共に超國家的なコスモポリタンの精神が動いてゐるのだが、このいはゆる國籍拋棄者（エクスパトリエート）の現象も、アメリカ人特有のものといへるのであり、ワシントン・アーヴィングやヘンリイ・ジェイムズムらを祖先にもつたその系統をつぐもの

といへるのである。

二、一九三〇年代

三〇年代の失業恐慌生活不安の情勢は、三三年三月、フランクリン・ルーズヴェルトがハーバート・フーヴァーに代つて大統領に就任した頃そのどん底に達したと見ることができ、少くとも心理的には、この政治的轉回期から徐々とした立ち直りを見せるのである。けれどそれまでに至る國民の精神は、恐慌の重荷のために一種の麻痺狀態を呈し、アメリカ民族特有の敏活な反應性や積極的な行動力、または包攬的な協同の精神まで萎縮したやうにみえた。そして經濟界の停頓とそれを救治すべき政治の貧困が、彼らの日常生活の困難の上に暗くのしかゝつてゐた。産業界では當然にストライキその他勞資の衝突が頻繁になつていつた。

ルーズヴェルトの政治は、いはゆるブレーン・トラストとニュー・ディールによつて推進されるのだが、彼の明るい人柄と、巧妙な企畫と大膽な實行性は、困惑の中にある國民に希望を與へ、協同的な眞摯な努力、國家への忠誠・統一の態度に導くものであつた。しかしルーズヴェルトのその政治がある程度の成功を示し、安定の氣分が感ぜられると共に、彼に對する政黨的反對者や保守的な富豪や言論指導者の側から、彼の「過激的」な思想傾向が指摘され、それは大審院のニュー・ディール否認の宣告にまで進展する。けれども實際における社會救濟の必要は、更にまた新しい形においてルーズヴェルト政治を進行せしめ、彼の人氣は三七年の再選、四一年の三選となつて繼續する。かくてこの三〇年代を通じるアメリカの政治の性格は、大体において革新的な方向にあり、しかもそれがかなりの大膽さを以て、全體的統制的態度において實行されたとみることができる。

このやうなアメリカの政治は、さらに、國内的な意味をもつばかりのものではない。三〇年代前半から著しくなつてきたファシズムの思想と政治の進展は、民主主義國としてのアメリカに明らかな攻勢を感ぜしめるものであつた。アメリカは國際間の均衡と自己防禦のために、國力の充實と民心の統一を計らねばならぬ。それは三〇年代が進行するにつれ、ヨーロッパ及びアジアの形勢の深刻化に伴ひ、ますます強い必然性を以てアメリカの革新的統制的政治を決定して行くも

のであつた。かくて、三九年九月のドイツの對英佛開戰、四一年十二月の太平洋戰爭勃發によつてアメリカはつひに重大な段階にはいるのである。

一九三〇年代の初期、上に述べたやうな生活不安の最も烈しかつた時期において、吾々のみる文學は、當然勞資の鬪爭やそれに伴ふ革命的イディオロジイの主張でなければならぬ。三〇年に出たメリイ・ヒートン・ヴォースの (Mary Heaton Vorse) の Strike! はその口火を切つたものといへるのであり、數多い同種作品のうちニュー・イングランドの織物工業町の凄慘な事件を扱つたウイリアム・ロリンズ (William Rollins) の The Shadow Before (1934)、ロバート・キャントウエル (Robert Cantwell) の The Land of Plenty (1934) などが目立つ。このやうな勞働者の苦難は、當然農民の世界にもひろがつてゐるものであり、かのアースキン・コールドウエル (Erskine Caldwell, 1903-) の問題作（小說及び戲曲）Tobacco Road (1932) の如きは、その淫虐と滑稽味の蔭に、南部貧農の沒落的な境遇を描きだしてゐるのである。（この南部のいはゆる貧困白人（プア・ホワイト）の經濟的位置は作者が早くから關心事とした問題であつた。）また、この作者の同系統の小說 God's Little Acre (1933) にも紡績工場地の男女勞働者の不安な生活と騷擾が背景に扱はれてゐる。このやうにして、この三〇年代の前半の緊張期の間に、アメリカの文學者には社會改革的な思想が

ひろくしみわたるやうになつた。ドライザーやアンダーソンの如き老大家が、左翼運動に協力する態度をとるやうになつた事實も、このやうな動向の强さを示すものである。

けれども改革的文學の缺點として、あまりに露骨な思想や直接な情熱が、作品の眞實な藝術價値を破壞することは普通のことであり、アメリカのこの時期の鬪爭的文學も長い生命をもつことはできなかつた。ただそれが作者のすぐれた藝術的個性と結び合ふ時、それはそのやうな運命をまぬかれることができる。上のコールドウエルの作品や、この年代の末 The Grapes of Wrath (1939) に結實するジョン・スタインベック (John Steinbeck, 1902-) の諸作品はこのことを證するものである。かのファレルの Studs Lonigan にも、その後半において、シカゴの革新運動の潮流が印象的な筆を以て記述せられてゐるのを見る。更にドス・パソスはかなりな左翼的經歷をもつものであるが、U.S.A. その他の作品において、その教養された知性と生來の詩人的素質によつて自己の文學を露骨な宣傳性から救つてゐることも注意すべき一例といへよう。

しかし、このやうな現象からも知られるやうに、アメリカのこの時期の文學の改革欲なるものは、作家の中でもより多く教養的な（從つて非宣行的、批判的な）インテリのものであり、まして一般勤勞階級の關心からは遠いもので、彼らに働きかける力をもつことはできなかつた。けれども

この社會的意識とその情熱が、アメリカの文學を一層眞摯ならしめ、その視界をひろげた效果は著しいものであり、その影響はアメリカ文學の殆んど全般にわたつて、この年代に一つの重要な成長をそれにもたらしたのである。

つぎに國際的な思潮闘爭がこの時期の文學に及ぼした影響も極めて著しく、こゝではヘミングウェイやドス・パソスや詩人のアーチボールド・マクリーシュ（Archibald MacLeish, 1892-　）などが、スペイン内亂に對してファシズム排擊のために起ち、それが思想人の自由、出版發表の自由のために重大な事件であることを呼號したことが目立つ。ヘミングウェイの For Whom the Bell Tolls (1940) がこの内亂を背景とし、第一次大戰後 A Farewell to Arms (1929) などに示した幻滅虚無の氣持を脱して、人類の正義のために今は「武器をとる」ことを是認する態度に移つたことも注目される。そこには一つの行動的な精神が動いて居り、それはファシズムに對する思想的な闘爭であると共に、國際的な新情勢の進展に對してアメリカを擁護しその態勢を强化しなければならぬとする直接な愛國的情熱が働いてゐるのである。そのことはトマス・ウルフ（Thomas Wolfe, 1900-1938）が最後の小説 You Can't Go Home Again (1940) で、ナチス・ドイツの暗黒を指摘し、同時にアメリカの自己再建の必要と將來の光明を說いてゐる態度に一層明瞭である。そ

れらはすべて國内的、國外的なアメリカの難局に對して必然に呼び起された實行の精神であつて批評家のヴァン・ワイク・ブルックス（Van Wyck Brooks, 1886-　）は、エリオットをプルーストやジョイスらと共にその虚無な知性によつてデモクラシーの希望をくじきその理想の實現を妨げるものと攻擊した。ウルフは自己を「ロスト・ジェネレーション」に屬さぬものとしたが、この三〇年代の實行的空氣にあつては、ヘミングウェイらも既に「ロスト・ジェネレーション」ではないのである。詩人であり社會主義的信念に立つカール・サンドバーグ（Carl Sandburg, 1878-　）が六卷のリンカーン傳をこの時期に完成した事もアメリカ的傳統の自覺と指導精神の探求をめざす愛國的動機に關連すると考へられるのであり、上のブルックスがやはり、ニュー・イングランドの傳統精神をたづねて The Flowering of New England (1936), New England : Indian Summer (1940) とその勞作を進めてゐることも同樣の見地から解釋される。なほこれらの愛國的熱情が、さらに振返つて國内の革新欲求と結びつくことも當然であつて、たとへばマクリーシュが The Fall of the City (1937) でファッショ獨裁者を諷刺しつゝ、Land of the Free (1938) では勞働者の窮狀や爭議彈壓の不法を描寫してゐることなども、興味ある例として擧げられる。

三〇年代はかうして、ある意味で愛國的文學の時代とも言ひ得るのだが、そのやうなシーリア

スな文學の反面に、一層快樂的な又は慰安的な文學が要求されたことも、この不安時代の當然な反映だといへるのである。生活の困難と異常な空氣の暗さは、國民を緊張せしめ協同せしめたのみならず、それぞれの家庭にあつても、二〇年代の放縱な自由さが消えて、青年も爐邊に歸り、一家の和合と協力が見られるやうになつたが、このやうな眞摯な態勢はいつまでも維持され得るものでなく、何らかの氣持の解放を、そして投機的な獲利の喜びを求めるやうになつた。かうして競馬や競犬の流行となり、街頭にも自動金錢投入箱（スロット・マシン）や球ころがしの如き投機的な遊戯が繁盛するやうになつた。そして娯樂としてはアモスとアンディ（Amos' n' Andy）の漫才的對話や、それに類する安價で煽情的な寄席藝や映畫が歡迎された。そしてその享樂には、やはり、明日を問はず今日を樂しまうとするレックレスの精神が烈しく働いてゐたと觀察される。かの禁酒法は一九三三年に廢止されるが、それはこの法律の不合理と實行難を理由とする外に、國民が「憂を忘れる」飲料を要求する力が拒み難いほど強くなつてきたからであると考へられる。

このやうな時世において、文學にも娯樂的、刺戟的、煽情的、慰安的なものが求められるのは當然で、ジャーナリズムの世界の讀み物、探偵もの、スリルの類はいふまでもないが、二〇年代に既に盛んであつたエロティシズムの傾向が衰へることなく、すべての作家に侵入してゐること

丁度かの社會改革思想と同一のものがあり、コールドウエルやスタインベックにおいて、そのシーリアスな社會的主張と平行して、濃厚な官能性が驅使されてゐる異樣な現象をみる。そのやうな烈しい刺戟でなく、讀者の興味を誘ひ空想や好奇の世界に遊ばしめるものに、主として歴史を題材とするロマンスや、異鄕の風土文物を用ひたエキゾティシズムの讀物がある。西部開拓地のあまりにロマンティックな煽情の物語はもはや流行にはづれたけれども、アメリカの樣々な地域の特色ある自然と人間を地盤とするいはゆるリージョナリズムの文學は、一層に盛んになつた。この地方主義の文學と歴史文學とは又、アメリカの再發見、國民の誇と統一的自覺を強める意味において、上に述べたこの時代の愛國的傾向に應ずるものでもある。すべてこのやうな文學の流行は、當時の不安な社會の一現象であつても、それは單なる大衆文學でなく、よりシーリアスな傾向に連結し、文學の正しい機能を果さうとする。大衆文學と純文學との境界線が明瞭でなく、純文學の傑作が大衆的なベスト・セラーであることはアメリカ文壇の特色であるが、このことは三〇年代において殊に著しい。〔パール・バック（Pearl Buck, 1892-　）の『大地』The Good Earth (1931)、マーガレット・ミチエル（Margaret Mitchell, 1905-　）の『風と共に去りぬ』Gone with the Wind (1936)、そして上のスタインベックの『怒りの葡萄』、ヘミングウェイの『誰が

ために鐘は鳴る」など。）

かうして、混亂はしてゐるが、疑ふべくもない豐富さの中に、三〇年代のアメリカ文學は、活潑な分裂と成長を見せつゝ、第二次世界戰爭にまで行進する。それはたしかに、アメリカの政治のみならずその文學の、極めて重要な一時期だつたといへるのである。

三、その性質と特色

アメリカ現代小說の性格の根幹をなすものは、リアリズムの精神であらう。このリアリズムは前世紀末からのスティーヴン・クレーン（Stephen Crane,1871-1900）、フランク・ノリス（Frank Norris, 1870-1902）、ハムリン・ガーランド（Hamlin Garland, 1860-1940）或はジャック・ロンドン（Jack London, 1876-1916）などの努力を通じて、一種の自然主義の方向に發達する。そしてドライザーに至つて一つの峯に達するのだが、ドライザーはその進化論的な生存競爭の世界觀、不可知論的な

哲學から、對象に對する客觀的凝視の態度をとることができた。しかし、ルイスやアンダーソンに移るに從つてそのやうな性格は變化する。そこには作者の主觀による鋭い歪み（たとへば諷刺）があり、特にアンダーソンの場合には、表面的客觀から內面の心理的、生理的解剖に進まうとする。そしてその根本をなすものは、對象に對する何らかの批判、主張或は改造の要求である。そのことは、表面冷靜で不器用にさへ見えたドライザーの文學にも通じることであり、彼のその內面には人生と社會に對する暗い憤りがうづくまつてゐたのである。

元來アメリカ人はその民族性として道德的である。實行的、意志的だといつてもよい。それはピューリタニズムを根柢とするその宗教的精神にも出てゐるところだが、文學においてもその特徵は著しい。それは何らかの實行的な刺戟、動機を持たうとし、道德的な批判主張や、問題に直接働きかける意志或は主義を示さうとする。フランス文學に見る均齊ある知性の透入や、ドイツ文學の神秘な情熱、ロシア文學の豐かな人間性や宗教的直觀は、アメリカ文學のもち合はさぬものである。そしてアメリカ文學のこの特徵は、アメリカ文學からしばしば藝術としての正しい性格を奪ふものであることは否定できない。すなはち藝術は第二次的な立場に落されようとするのである。

かういふ文學にあつて、純正な自然主義が、成長することの不可能なのはいふまでもない。アンダーソンの主觀的自然主義は、彼の直接な庇護影響のもとにあつたウイリアム・フォークナー(William Faulkner, 1897-　)に至つて一層深刻なものとなり、その分析とそれに伴ふ特異の表現は病的な妖しささへ感ぜしめようとする。同時に他方、同じアンダーソンの誘導をうけたヘミングウェイは、反對に客觀的自然主義ともいふべきものを展開する。しかしこれも、自己の感情や思想の抑壓の上に一種冷酷な精神的擬態をとらうとするもので、決して純正な客觀でなく、かへつて異常に凝縮された主觀的態度と言ひ得るのである。そしてあのルイスにおいては、彼のもつ一種の社會主義的主張と自然主義の結合によつて、特殊の刺戟的効果ある文學をつくりだしたといへる。このやうな結合は、アメリカ文學にあつては既に古いものであり、一九〇〇年の初期から第一次大戰開始の時までに流行した社會小說、問題小說、アプトン・シンクレア(Upton Sinclair, 1878-　)を中心とするあの盛んな現象も、その一例に外ならない。このやうな結合は、上に述べたアメリカの民族性(從つて文學)の意志的特性から當然に生れるものであり、又アメリカ文學としてそこに特殊な効果を發揮し得ることも當然なのである。それは更に、二〇年代の末から三〇年代に盛んとなつた革新的文學の大勢の中に極めて明らかに現はれてきてゐる。かうして、現

代アメリカ文學の根本性格はリアリズムとは言ひながらも、それは特殊な主觀的或は行動的色彩をもつものであり、そこにアメリカン・リアリズムとして獨自の文學系統が成長してゐることを吾々は認めるのである。

しかし、それにしても、現代のアメリカ文學が、從來の文學のいはゆる詩的な甘いセンティメンタリズムやピューリタニズムと連結する無批判な道德的觀念に反抗して、人間と社會の現實を見、眞實な人生を立てようとする所に、强い(また貴重な)リアリズムの性格をもつことは明らかである。そしてこの性格はアメリカ文學のいろ〳〵な部門を必然に特色づけてゐるのである。

たとへば歷史文學をとつて考へてみても、それは前時代の歷史文學の、いたづらな浪曼性や愛國的獨善的な興奮を排斥して、科學的實證的となり、專門の歷史學者の研究をさへ訂正しようとする。それはケニス・ロバーツ(Kenneth Roberts, 1885-　)が植民時代に取材した Arundel (1930), Rabble in Arms (1933) 更に Northwest Passage (1937) の如きすぐれた作品に見られる所であり、ロバーツはこれらの作品の材料蒐集調査研究のために常に數年を費し、その使用濟の文獻を公衆圖書館に寄贈してゐる程である。マーガレット・ミチエルの『風と共に去りぬ』もまた、「調べた藝術」である。そしてかういふ傾向は、たゞ科學的精神の現はれといふやうなものではな

くアメリカの歴史と人物を正しい姿において把握し、その傳統を現代のうちに、虚僞を交へず誠實に（從つて最も有力に）働かせようとする意圖を含む。かうして上に言つた、現代の歴史文學の愛國的意義といふものも正しく發揮されるのである。

歴史文學は、上のロバーツの諸作の如き十八世紀獨立戰爭時代と、南北戰爭時代が最も盛んであり、殊に後者は歴史小説の好題目として繰返し様々な作家によつて取りあげられた。南北戰爭を從來のロマンティックな色彩から引きはなして、これに現實的な取扱ひを與へたのはスティーヴン・クレーンの The Red Badge of Courage (1895) に始まるのだが、現代文學においてはこの傾向は一層著しく、それは戰爭そのものよりも銃後の人々の生活に視野をひろげ、又北部の産業と南部の農業の經濟的鬪爭の意義を追求しようとすることにより、ます〳〵單なるロマンティックな戰爭小説の型から離れて行くのであつた。南北戰爭物の眞の流行は、一九二七年のジェイムズ・ボイド (James Boyd, 1888-　) の Marching On によつて始まるのだが、世界戰爭の試煉をくぐつたアメリカとして、その記憶はまだなま〳〵しく、戰爭を魅力あるものの如く描くことは不可能でもあつたのである。このボイドは一九二五年に獨立戰爭に取材した Drums を發表して居り、現代のアメリカ歴史文學の流行はこの時期から始まるものと見ることができる。その前期

の流行は米西戰爭（一八九八）の刺戟から第一次大戰勃發の時期までであつて、一九一四——二五年の期間は何ら目ぼしい歴史文學を生んでゐない。そして後期の流行は三〇年代の中頃に至つて最盛期に達するのである。そして婦人小説や探偵物に劣らない位大衆の興味を捕へるやうになるものだが、上のマーガレット・ミチエルの『風と共に去りぬ』（一九三六）は、その流行の一つの象徴といふべきものである。この作の成功は女性の纖細な眼によつてこの古い主題が新しく見直された所にあるが、戰禍におびやかされる南部農園地の華麗な生活の描寫に、現代の歴史小説の現實性が最もよく發揮されてゐるのを見る。

このミチエルの作品を見てもさうであるが、歴史文學は直ちにリージョナリズムの文學につらなる。廣大な國土と多様な氣候風土とその上に雜多な人種を包容してゐるアメリカは、地方色の文學を生むに絶好な地盤である。それは既に南北戰爭後の時期に、ブレット・ハート (Bret Harte, 1836-1902) ら、いはゆる「ローカル・カラー」の作家をもち、彼らはセンティメンタルなそしてユーモラスな態度をもつて、珍奇な地方の風土生活を活用し、しかもその一種のマネリズムは、しば〳〵その人物を類型的なものに終らせてしまつた。それに對して今日のリージョナリズムの文學はセンティメンタリズムないしロマンティシズムからリアリズムに轉向しようとする所に大き

な特色をもつ。それは唯繪畫的な多彩な外面に滿足しないで、その背後の經濟的社會的な機構にまで觀察を向けようとする。そしてその地方的な文學に國家的な意義を與へようとする。たゞもちろん地方色なるものがロマンティックな魅力をもつことは常に變らないのであり、現在でもそれは歴史小説或は一般讀物と結んで、その特質を發揮してゐる。殊に南部の古き農園地や西部開拓地にあつてそれは顯著である。

リージョナリズムは大體田舍の特色だといふことができる。都會の特色はニュー・ヨークを巨大な代表者として、シカゴもサン・フランシスコもその陰に埋沒してゐる形である。アメリカ小説の大部分はニュー・ヨークを背景としてゐる。しかしそれら多數の都會相互の間の特色の差がないわけでない。かうして都會と田舍を通じ、アメリカ文學の地方色の多樣さは素晴らしいものであり、一面、その民主的な機械主義的な傾向がアメリカの生活を標準化し均一化してゐる現象は有名なものであるとしても、現代のアメリカ文學を理解鑑賞するには、吾々は作家がどのやうな地方について書いてゐるかを先づ注意する必要がある。それは世界の文學のどこにも見られないほどの特色である。

さういふ地方を大別するならば、ニュー・イングランド、南部、中西部、南西部、北西部、及

び太平洋岸（カリフォルニア地方）となるであらう。ニュー・イングランドで特異な作家としては、ペンシルヴァニアからジョゼフ・ハーゲスハイマー（Joseph Hergesheimer, 1880-　）が出てその初期の作品 Mountain Blood (1915), Tol'able David (1923) に寫實的な地方色を示してゐるがその後の作品ではむしろ逃避的に過去の歴史や異國趣味の世界に美を求めようとしてゐる。南部ではその華麗な傳統を追慕し現在の沒落を悼むロマンティクな哀調は、スターク・ヤング（Stark Young, 1881）の評判作 So Red the Rose (1934) などに顯著だが、そのやうな貴族趣味を剝奪して主題の自由な（或はむしろ强烈な）取扱ひを試みたものに、フォークナー、コールドウェル、ウールフの三巨星がある。Birthright (1922) から The Forge (1931) 等に至るT・S・ストリブリング（T. S. Stribling, 1881-　）はかういふ傾向の先達をなすものであり、また The Yearling (1937)『一歳仔』を以て知られる Kinnan Rawlings (1896-　）も、この地域の極めて特異な地方色をすくひ上げたものである。中西部からはドライザー、ルイス、アンダーソンの一層大きな三巨星が出る。中にもルイスの『本町通り』と『バビット』の二作は中西部の田舍町の典型的な表現をなしたものである。ドライザーの Sister Carrie (1900) やアンダーソンの Marching Men (1917) は田舍から都會へ（シカゴへ）移動することとなるが、ミシシッピ流域の中心として出現したこの新

都は、その活氣と冗雜な特色によつて、多くの文學者を引きつけると共に、それ自身の文學を生み出すのであつた。H・L・メンケン（H. L. Mencken, 1880-　）はシカゴは「アメリカの文藝首都」だと言つた。こゝにはその土地柄、現實主義的なものと、社會的、現實主義的なものとが生れるが、後者の流れはノリスの The Pit (1903) やシンクレアの The Jungle (1906) によつて先導される。フアレルの三部作は徹頭徹尾シカゴ的なものであり、またかのベン・ヘクトらのモダンな文藝の一派もこの都にたむろしたのである。

つぎに北西部と南西部は、大平原の牧場地帶をひかへて、カウ・ボーイたちのメロドラマ的な文學の養育地となつたものであり、その傾向は容易に薄れようとしないのであるが、北西部で幼時を過したウィラ・キャザー（Willa Cather, 1876-1947）の O Pioneers ! (1913) My Antonia (1918) などは女性らしい纖細味をもつたものでありながら、忠實な寫實性をそなへたものである。彼女はアメリカのリージョナリズム文學の一つの代表者とも見らるべきであつて、後の作で Death Comes for the Archbishop (1927) は南西部のニュー・メキシコの荒野が舞台とされ、Sapphira and the Slave Girl (1940) では故郷ヴアージニアの農園生活が濃い南部的な潤ひを以て再現されてゐる。最後にカリフォルニアは、ジャック・ロンドンやシンクレアと緣故ある地帶であるが、

こゝには生粹にカリフォルニア作家といふべきスタインベックが出て居り、又輕快で一種の詩情をもつた短篇及び戯曲の作者として擡頭した若きウイリアム・サローヤン（William Saroyan, 1908）も、カリフォルニアならでは出ない作家である。以上の如く、アメリカのリージョナリズムの色彩は實に多樣活潑であるが、その上に、南部のニグロ、ニュー・ヨーク市のユダヤ人とイタリア人、シカゴ市のアイルランド人はじめ雜多な他人種、そのやうな人種的要素の混在は、地方色なるものを一層複雜深刻ならしめ、その文學をますゝ特色深きものとしてゐるのである。

「リージョナリズムの興味は、その地方を知らないものにとつては、一種の異國趣味（エキゾティシズム）である。アメリカ現代文學のエキゾティシズムは、殊にあの大戰後の國籍拋棄者たちによつて昂揚されるのだが、〈ミングウェイの鬪牛趣味の如きは中でも顯著なものであり、又同じエクスペトリエートのルイス・ブロムフィールド（Louis Bromfield, 1896-　）は、フランスからインドにまで興味を伸ばせて、The Rains Came (1937), Night in Bombay (1940) の如き異色ある作品を書いた。東洋人なるものは、一般白人にとつて、何となく怪奇で氣味惡きもの、そして他面古めかしい滑稽味をもつものと見られ勝ちであつたのだが、さういふ觀念を修正し東洋的題材の正しい取扱ひを示したのはラフカディオ・ハーン（Lafcadio Hearn, 1850-1904）であり、彼はそのアメ

リカ滞在の時代から實に豐かなエキゾティシズムの作家だつたといふことができる。このやうな正しい東洋的文學は、パール・バックの『大地』に至つて最も明瞭な一つの實りを示す。そこには又アメリカ人のよき世界主義（コスモポリタニズム）が働いて居り、人類的な同感がこの異郷の印象的な再現の裏にしみわたつてゐることが感ぜられる。エキゾティシズムは歴史文學と結ぶ時、二重のよき効果を呈し得ることも當然であつて、それはあのハーヴィ・アレン（Hervey Allen, 1889-　）の Anthony Adverse（1933）に見られる所であり、不況時代のどん底にある大衆を捕へ、その魂を忘苦の境に遊ばしめることによつて、前例なき好評を博したのである。しかもこのアレンもまた、この大衆的作品のために、數年間實證的文献的な準備に沒頭したものであることを附記したい。更に、こゝでも變り種であるトマス・ウルフの、第二作 Of Time and the River（1935）が、青年藝術家の遍歴時代の記錄として、イギリスの大學町や南フランスのエキゾティシズムを濃厚に盛つたものであることを附記したい。

四、結　語

G・K・チェスタトンはそのアメリカ印象記 What I Saw in America の中でいつてゐる。——

自分は少年の時に『朝食卓の獨裁者』（The Autocrat of the Breakfast-Table）といふ如き書物を讀んだ。そしてそれをアメリカの本とは考へず、たゞ一つの本とだけ思つた。その機智（ウイット）もイディオムもイギリスの文學の傳統と全く似たものなのだ。その言葉はラスキンに劣らずイギリス的であり、カーライルよりずつと多くイギリス的だ。ところが最近は流行のO・ヘンリィの短篇を讀むやうになつた。一瞬間も自分はそれがアメリカ人によつてアメリカについて書かれた物語だといふことを忘れることができない。「それらの短篇のもつ第一の事實はそれがアメリカのアクセントで語られてゐること、即ち、一人の才氣あり魅力ある外人の紛れのない語調で語られてゐるといふことだ。」それと同じことが大西洋を渡つて評判の聞えてきた最近のどの書物についても言ふことができる。「吾々は『スプーン・リヴァー詞華集（アンソロジー）』を新しい本だとはいはない、しかもアメリカからきた新しい本だといふ。それは丁度、ロシアやイタリアから非常に現實的な小說が出たといふ報道を受けた時のやうだ。吾々はもはやこの本を『田舍の墓場（ヒルツリー・イン・ア・カントリー・チャーチヤード）の哀歌』と混同するやうな危險はない」（2）

チェスタトンはこんなことを「大西洋は狹くなりつゝあるか」（Is the Atlantic Narrowing?）といふ章で語つてゐるのだが、アメリカとイギリスとは、決して常識が考へてゐるやうに歴史の展開文

明の進歩につれて互に引寄せられてはゐない、却つてその逆だといつてゐるのだ。更に言葉といふことを彼は注意して述べてゐる。即ちも一度ホームズとリ・ヘンリについていふ。――「ホームズの時代の眞正なジャーナリズムとヘンリイの時代の眞正なジャーナリズムを比較してみる。それはスタイルの少しばかりの相違をイディオムの豐富な相違に擴大したことなのだ。際限なくこんな過程を續けて行くとそれはたしかに全然違つた國語を生むことになるだらう。」

アメリカの現代文學がどれ程イギリスの文學と違つてゐるか。その言葉が又どれ程違つてゐるか、それは指摘するまでもない。チェスタトンが上のやうなことを言つてから二十年位たつてゐるだらうが、その間にその相違間隔は一層甚しくなつてゐるのである。現代のアメリカ文學は、南北戰爭以前のアメリカ文學よりも却つてフランス・ロシア・ドイツの文學に似てゐると觀察する論者がある。そしてそれは主として一八八〇年以降の北歐及び南歐からの移民の大流入によるのだと考へてゐる。アメリカ文學がイギリス文學を離れてきたこと、そしてそれ自身の性格と存在をこれほどはつきりとしてきたことには、人種の問題は根本的だといつてよい。即ち純正なアングロ・サクソンでなく、新しい一つのアメリカ人なるものが造られてきた。それは西部開拓の進行の間に造られ、新しい移民の流入によつて造られてきた。即ちそれは一面風土と衣食住の順

應によるものであり、他面新しい血の混和によるものである。そこに精神的のみならず、肉體的(フィジカル)に新しいアメリカ人が造られてきた。顏貌から肢體まで、一見その特徴をもつたアメリカ人が造られてきた。このことは文學にとつては非常に重大なことである。肉體的にまで新しい民族から新しいそして獨自な文學が生れるのは必然なことである。

言葉といふことについていへば、現代アメリカ文學の表現、そのスタイルやイディオムは、アメリカ文學の獨立性を十分に支へるまでに獨特なものとなつてゐる。それはメンケンが主張してゐるやうに、英語を離れたアメリカ語なるものが存在し發達してゐるといふ事實に基礎を置くものだが、そのアメリカ語を生かせ活用し、それに眞實な特色を與へるものが「文學」であることはいふまでもない。現代作家のうち、ヘミングウェイ、ドス・パソス、フォークナーら、それぞれ極めて獨特な表現をもつてゐる。それらは一面彼らのエクスペトリエートとしての性格に關連するもので、ヨーロッパ文化への陶醉の中に一つの渾沌とした氣持をもちながら、そこに何らかの精神の革命を求め、その革命に伴つて言葉の革命は（彼ら文學者として）必然のことだとした。そしてアメリカ語としても從來のジェンティールな定型を破つて、その點は非國家的な面にまで出ることによつて彼らの獨自な表現を獲得した。それは Broom, This Quarter, transition 等の當時

のヨーロッパの尖鋭新様の文藝誌に共通する世界的な傾向に參加するものだつた。そしてしかもそのコスモポリタンな傾向に刺戟されつゝ、それによつてアメリカの中から最も鮮明にアメリカ的なる表現を抜き出したのである。ヘミングウェイのハード・ボイルな冷酷で硬い客觀的單綴語の文體、ドス・パソスのまた一種の客觀性をもつた、形象的な斷續明滅の手法、フォークナーの「意識の流」の一層暗く粘着力をもつた肉感性。そして彼らすべてと、コールドウェルやスタインベックにまで通じる日常語、方言、スラングの驅使。それはアメリカの地域的人種的な廣さと複雜さを思ふ時一層その重要さがはつきりするもので、これら作家はそれぞれの最も親しい俗語を活用することによつて、始めて自己の文體を獲得し、現代アメリカ文學の獨自性を完全にしたと言ひ得るのである。

アメリカ文學はこのやうな表現をもつて、その性格には、肉感への粘着と焦躁するやうな社會的改革的意慾をもつて、その獨自な展開を二〇年代から三〇年代へと進めてきた。それの精神として根本にあるものはピューリタニズムの傳統であり西部フロンティアの魂であることは勿論だが、それよりも資本主義の發達に伴ふ機械時代の現實的數量的科學的な、酷薄な然し明晰な精神がそれを支配してゐると考へられる。そしてその上に、科學そのものの、今後にもますゝ發達

すべき發見と應用は、アメリカ人の生活のみならず、その世界觀人生觀をも變改する意味において、アメリカ文學の精神にも極めて重要なものを注入しつゝある。かういふ文學の性格、精神を通じてその地盤にあるものは、アメリカの社會的個人的生活の現實に對する關心であり、それへの働きかけの興味である。そこには想像や瞑想や論理や形式づけは乏しい。その尊重するものは現實の人間的な生活、今日の存在の力强さと幸福である。結局それは、アメリカのヒューマニズムなるものゝ大きな特性だと考へられるのである。

アメリカの文學は完成したものでない。どこの國の文學でも完成するといふことはないだらうが、アメリカの文學はまだ一度の洗練期成熟期さへ經過してゐないのである。アメリカの文學は若い。國家が若く、民族が移民の流入によつて一層若く、アメリカ人は若い旺盛な精力とそして興奮や活動を興奮活動自體のために喜び求める敏感な活力をもつてゐる。それがこの國における資本主義や民主政治や科學的生活の獨自な急激な發展の中にたえまなく觸發される。アメリカ文學は、かうしてかういふ民族の精神と生活の表現として、その必然な形態をとつてきたのである。二〇年代から三〇年代に至るこの前例なきアメリカの激動期にそのやうな文學が活潑多樣な展開を示したことは當然であり、その期間のヨーロッパのどの文壇にも見ない程の伸展であつたと考

へることも不可といへないのである。そしてかういふアメリカ文學はなほ未完成であり、殊にヨーロッパの傳統文學の洗練味や仕あげ(ポリッシュ)の味はもたないとしても、その特殊な表現にこもる粗雜で生氣ある一種の美や、そして鋭く直接な社會思想や人生觀の故に現代のヨーロッパの文學者や知性人の認識を得るやうになつた。たとへば、現在フランスでエグジステンシアリズム（實存主義）を提唱して文藝界思想界に大きな波動を起してゐるジャン・ポール・サルトル（Jean-Paul Sartre, 1905-）は、一九三八年八月號のN・R・F誌上で、ドス・パソスを論じ、彼が內面的にして外面的な人間、個體的意識から集團的意識に溶け込む現代人の生態を描きだす藝術の効果を讃へ、彼の世界の矛盾に滿ちた美を讃へ、「私はドス・パソスを現代の最大の作家と考へる」とまで言つてゐる。（參照、「世界文學」昭和二十一年十月號）昨年（一九四五）スウイス亡命中のアンドレ・ジイドがヘミングウエイ、フォークナー、スタインベックらについて、それぞれに適切な認識と尊敬の評語を下してゐることも、いち早く報道されたことである。（參照「世界」昭和二十一年一月號）。そしてこれらアメリカ作家或はコールドウエルなどのものが今盛んにフランスに紹介飜譯されつゝあるらしい。かつてエクスパトリエートとして、フランス文化にあこがれ一種の放浪情調にひたつてゐた彼らが、（スタンベック、コールドウエルは別として）、さういふ生活の中から造り育てゝき

た藝術が、今獨自なアメリカ文學として、同時に充分な世界性普遍性をもつ文學として、彼地に迎へられ理解鑑賞されてゐる事實は興味あることである。彼らのそのやうな經驗或は勞苦が、アメリカ文學の世界的な成長のために必然なそして有効な過程であつたことが今にして返り見られるのである。現代アメリカ文學がこのやうにフランス（ヨーロッパ）に迎へられるのは、その活動的な感覺、活力ある原始性、非個性的な外面的集團的な關心、速度的映畫的な表現など、そのヨーロッパの傳統文學に對蹠する特性による所が多いだらう。しかもこのやうな對蹠點を通じて兩者は交流しつゝあるのである。それにしても世界の今後の文學に對して、アメリカ文學のもつ意味は大きい。文學美とは何ぞやと言ふ問題、そこからくる表現の問題、そこに一つの革新的なものが、アメリカ文學の如き文學を通じて、今後の文學に生れてくるのではないかと考へられる。

第二次大戰の結果、アメリカの政治或は科學は、一つの重大なまた宏壯な世界に進出したことは明らかであるが、その新たな國家生活社會生活の中からどのやうな文學が生れるか、現代アメリカ文學の激動する生命の今後の成長は注目される。既に一つの事實として、終戰後のアメリカの貿易の好況は、前大戰後の一九二〇年の記錄（從來の最高貿易記錄）を突破する勢にあるといふ。このやうな好景氣が二〇年代の文學に與へたあの深刻な影響を記憶する吾らは、今度の好況が政

治上どのやうに處理され、從つて又どのやうに文學上に反映するか、前大戰後と異つた新しい、然し同程度に重大な展開がそこに行はるべきことを豫期するのである。アメリカ文學はこのやうに、アメリカ文化の一環として深くそこに關連しつゝ、他面アメリカ文化の世界的進展によつて世界の文化・文學に深く關連して行く運命をもつ。そして或は將來の世界の文學の先驅的な位置につくだらうこと、またそのやうな實質をもつものであることが感ぜられるのである。

「二つの戰爭の間」のアメリカ文學の觀察は、このやうな重要な示唆をもちながら終結する。エリオットが歌つたやうに、今後の歲月が空費される歲月でなく、すべての企てが新しき失敗に終るやうなことがないことを、アメリカ文學のみならず、人類文化全般のために願ふのである。

（一九四六、十二月末日）

（1） The New English Weekly, March 20, 1940.

（2） G. K. Chesterton: What I Saw in America, Hodder & Stoughton, London. p.220.

〔なほ「スプーン・リヴァー」はエドガー・リー・マスターズの諷刺詩（一九一五）で、グレーの「哀歌」の如く田舍の墓場を背景とする。〕

アメリカ文學の宗教性

アメリカ人の宗教を考へる時、吾々は勿論ピューリタニズムをとりあげなければならぬ。けれどもそれと同時に、それと同じ鮮明さに現はれてくるものは、ピューリタニズムの對立者としてのミスティシズムである。否、文學の宗教性を考へる範圍にあつては、ミスティシズムの重要さが前者を壓するとも思はれるのである。

一

ニュー・イングランドの最初の渡來者であるピルグリム・ファーザーズを、その後の渡來者そして植民地の實際の建設者であるピューリタンズと嚴格に區別しようとする論者がある(例へばA・モーリス・ロー『アメリカ人・國民心理の研究』(一九〇九)これにはピルグリムの分離派(＋バラティスト)としての特色を重んずる見地であり、即ち彼らは思想信仰の自由を眞實に求め、從つて他著の信仰に對して寛容である その性格は溫和であり、反逆者に非ずしてむしろ平和を求める者とする。

それに對してピューリタンは　却つて英國國教の護持者（アドヒーレント）であり、少くともその精神を異郷に延長せんとする者であり、從つて自己以外の如何なる信仰形式をも許すまいとする。彼らは國教會から分離する者でなく、ただその腐敗から分離せんとする者である。その信仰の實行、宣布を求めるにあたつては、頑強であり戰鬪的である。かうしてその男性的性質の故に、彼らは事實に於てアメリカの民族、その精神制度文化の形成者となつた。彼らの影響は、アメリカの脊骨として、一貫して今日に至つてゐると：ふことができる。けれどもこれに對して、既にその當初からピリグリムの一群によつて護持されてきた寛大なる自由の精神は、云はばピューリタニズムの冷嚴な色調に對して軟らかな匂ひを含めんとするものであつたが、その自由の精神は、イギリス民族の深い個性として、容易に安逸な雰勢にとどめ置かれるものでない。それがピューリタニズムの餘りに偏狹な壓力に反撥するには、それ自身一つの鮮明な叛逆者として現はれ來ざるを得ない。ロード・アイランド植民地建設者としてのロージャ・ウイリアムズ（一六〇三？一六八三）に見る如きものはそれであり、そこには自他の信仰のために絶對の自由を求める精神が、柔軟且つ寛容にして、而もそれなりに、その精神の特質を純粹明確にあらはしてゐることを認めねばならない。吾々はかうして、アメリカ文學の初めからピューリタンの文學に對する宗教的自由主義者の文

學のあらはれを見、しかもそこに文學として價値あるものゝ初めて出現してゐることを見る。嚴格尊大なピューリタンの指導者たちのこした文學は、神學の論議や教界の記錄や內省の日記の類で、煩瑣且つ乾燥であり、屢々「讀み續ける（インポシブル）に耐へぬ」ものであるにもかゝはらず、自由主義者の文學、或はその精神から芽ぐんだ文字には、軟らかで不滅な詩の匂ひが常につきまとつてゐる。それは藝術としての文學が、いささかの虛僞や硬化的形式をも忌むものであり、從つてピューリタニズムと本質的に相容れぬものをもつためと考へられる。文學者は、政治に於ける民主主義的思考に於ても、結局アナーキズム――無の境地に落ちつかうとする傾向があるが、その如く宗教的思考にあつても、彼の最も自然にそして快適に落ちつかうとする方向はひろやかなミスティシズムの分野にあると考へられる。そこには自己の全く自由な發動があり、何らの形式や仲介物のない、神或は自然との直接の融合、從つてそこに注ぐ情意の豐かな湧出がある。文學は、宗教のこのやうな側面にのみ、最も純粹な芽生えを見せようとするのである。

ジョナサン・エドワーヅ（一七〇三―一七五八）は、ピュリタン神政政治の崩壞期に出て、その護持のために努めた最後の偉大な鬪士（チャンピオン）であつたが、教會の主宰者としては徹底的な同心の自覺を會員に要求して讓る所なく、神學の思索者としては一意志の自由」（一七五四）の論文に緻密な論

理を展開して、神の絶對な支配力に讀者を平伏させねばやまなかつた。しかも、かういふ嚴正なピューリタンである彼が、ミスティクとしての資性を濃く持ち、その自傳的叙述の中に、屢々幽玄な神の世界のヴィジョンを提供してゐることに吾々は打たれるのである。彼は冥想する人であり「私は屢々坐していつまでも月を眺めてゐることがあつた。また晝間は、雲と空を眺めるに多くの時を過し、これらのものに神の榮光をみとめるのであつた。」彼は雅歌の「われはシャロンの薔薇谷の百合なり」の言葉をめでて、それが「イエス・クリストの愛らしさと美しさを香高く現はす」ものと感じた。彼の心には「神の輝やかしい威嚴(マヂエスティー)のみならず慈愛(グレース)の甘美な觀念」が、様々の事物と共に寧ろ感覺的に入つてきた。「眞正な基督者の魂は、年の春に吾らの見る小さな白い花の如きものと見えた。地の上に低くつゝましげに、胸を開いて太陽の輝きの快き光を受けようとする。あだかもそれは靜かな歡喜にひたる如く、うましき香りをあたりに放ち、安らかにまた優しく周圍の花のまなかに立つ。その花たちもみな、同じく胸を開いて日の光を吸うてゐる。……」こゝに描出された白く小さな野花の姿は、その詩情と鮮やかな感覺性の故に、この嚴格な說教者の論議の中に、最も不滅ないのちを點ずるものではないか。エドワーヅは、アメリカの文學史（或は哲學史）の上に大きな名となるべくして、その稀有な天才を狹い頑な信仰の溝の中に

誤り封じたものと考へられてゐる。しかも吾々がこのやうなエドワーヅからも知り得ることは、どのやうな片寄つた信仰でも、それが眞實の信仰のいのちを持つものである限り、そこにミスティシズムとのつながりを持つに相違ないこと、卽ち神との直接な自由な交流の門がひらかれてゐることである。アメリカのピューリタニズムにもこれがある。ピューリタニズム自身の中にこれが含まれ、後にミスティシズムがそれへの叛逆者として對立するやうな場合にあつても、それはむしろピューリタニズムから投出され、そしてそこに起ちあがらせられてゐる一つの分身とも見られる。少くとも、吾々は、アメリカの國民性を考へ、それの宗教との關係、宗教に於ける變遷を考へる時、彼らのミスティシズムがピューリタン的脊骨以外のものでないこと、この國民としてはすべての宗教的樣相がピューリタニズムの本質の上に造られるものであることを認めないでゐられぬであらう。」

このやうなアメリカ的なミスティシズムの、しかし違つた現はれを、吾々はエドワーヅとほゞ同時代のジョン・ウールマン（一七二〇—一七七二）の文學（彼の『日錄(ジヤーナル)』一七七五）の中に見る。彼は卑賤で無學な裁縫師であり、その宗教的熱情は、奴隸廢止の遂行に注がれ、また戰爭やインディアンへのラム酒賣り込や動物虐待や、さういふ實際の社會惡の上に働きかけた。從つて、彼に

は神の性格や罪と救ひの關係や、さういふものについての煩瑣な思索及び論爭などは興味なく、又エドワーヅに見るやうな知性のきびしいまでの昂揚といふ如き素質もなかつた。彼の見る神は平凡な人間及び動物に影を映してゐるものであり、それは事實的世俗的であると共に、單純に明瞭な印象をもつものであつた。そしてその影を捕へたものは彼のクエーカー教徒としての寂靜主義(クワイエティズム)、そしてそこにたくましずして敏感に網を張つてゐる自然な感覺の働きであつた。かうして吾々は、この改革者の素朴に書きのこした文字の間に、形式的な信條や偏狹な主張に歪められぬ、神と人間の靈性の姿或はその息吹きの、紛れない表現を屢々見て、それに打たれるのである。詩人ホイッティアはこの『日錄』を「內的生活の古典」と呼んだが、その內的生活がそのやうに生きてゐるのは、それが自由なミスティシズムのいのちを持つてゐたからに外ならない。彼が周圍のピュリタン達の固守する人間性惡の觀念に反して、その善へ向ふ素質を力說したことも當然である。卽ち人間の心は「見えざる神を愛する」と共に、その「神を見ゆる世界に於けるあらゆるその示顯の中に愛すべく」「ひとつの內的な原理によつて動かされてゐる」と彼は記す。見ゆるものの中に見えざるものを愛すること——これこそミスティシズムの精髓に外ならぬ。そしてこの「內的な原理」が、これから後アメリカに生れてくる文學の、いやしくも宗教性と名づけ得る性格

のいづくにも潛在してゐる事實に、吾々は注目したいのである。

アメリカ現代の批評壇の中心的存在と考へられるヴアン・ワイク・ブルックスは、その名著『アメリカの成人』(一九一五)の中で「アメリカ精神の二つの主流」はハイ・ブラウ(獨善高踏的な知性人)とその反極としてのロー・ブラウ(卑俗實踐的な行動人)であるとし、前者の代表はエドワーヅであり、その系統はエマソンに流れてゐると見、後者の代表はフランクリンだと見る。吾々はこゝにフランクリンと對置されるエドワーヅが、どれ程精神家として高く評價されてゐるかを知るのだが、ブルックスが彼の高邁な特質について云つてゐる言葉は熱情をさへ帶びてゐる。——「ジョナサン・エドワーヅの知性はマタホルンの峯の如く、嶮しく、氷結し、尖塔をなしてゐる。その麓には綠の傾斜させゝらぐ谷があり、あらゆる種類の小さくかよわい野花が滿ちてゐる——彼は最も優しい人間であるからだ。けれどもその地面が眞劍に高まつてくるや否や、あらゆるこの綠の生命は突然に消滅する。一個の綠のものの生けるものも、その凍つた土その青ざめた高みの上には生存することができぬのだ。」エドワーヅはそこに「論理の孤獨」の中に住む。而もその「孤獨から發するすべてのものはそれ自身の光に輝いてゐる。」——この氷の峯の器をまとふ綠の草葉と小さな野花こそはピューリタン精神の嶮しさをなごめ、しかもその源はピューリタン精神にこそ發してゐるミスティシズムの、鮮やかな比喩ではないか。

二

ラルフ・ウォルド・エマソン（一八〇三―一八八二）のミスティクとしての特性については、說くまでもないであらう。「見ゆるものの中に見えざるものを見る」こと、その能力は、彼の最初のエッセイ『自然論』（一八三六）の中に既に豐かに働いてゐる。彼は雪解けの薄明りにボストン公有地（コモン）を歩いてゐる時、突然「神の一部となり」全身が「透明な眼球となつた」やうな「完全な歡喜」の體驗をさへ持つた。彼が聖餐の儀式の意義に疑をはさみ、牧師の職を辭するやうになつた事件も、あらゆる形骸を離れた靈の直接の交流を求めるミスティクの個性から出るものであり、その行動にはイギリス國教會を離れてきたセパラティスト達と同樣な心の動きが感ぜられる。エマソンはその周圍のトランセンデンタリスト達と共にアメリカン・ピューリタニズムからの分離を遂行した偉力であり、時代の必然な要求の體現者であつた。

けれども、エマソンはその個性の一面として實際家であり、その關心が常に道德の主題から離れなかつたことを吾々は認めなければならぬ。彼はインドの宗教思想をよろこび、そこから『ブラーマ』（一八五六）の如き詩を作り得たが、その神秘感のあやは幽玄なりとしても、彼の精神がどこまで徹底的にその心境に融合し忘我したかは疑問としなければならぬ。殊にこれら東洋の宗教の含む或る隱微なるもの、肉慾に根ざした暗い陶醉の魅力の如きは、ピューリタン正系の血をうけたエマソンの到底同感しがたいところであつただらう。このやうな觀點からすれば、ウォルト・ホイットマン（一八一九―一八九二）は一層自由なミスティクであり、彼の融合感はエマソンの如く「自然」を通して「神」に到ると共に一面暖くかつ不完全な「人間」の世界に流れこんで凝滯するところがなかつた。彼に同性愛的な詩があり、街の女に呼びかけた詩のあることも偶然でない。ミスティシズムの究極は、どうしても汎神論的觀念に到らうとするが、かくして超越的な人格的な神を見失ふことは、エマソンには決意できなかつたことであるらしい。彼を訪ねる後進者がこの點についての疑ひをたゞすと、エマソンは曖昧に言葉をそらしたとも傳へられる。それはかかる根本問題について輕々しく自己の信念をもらすことの危險をおそれたエマソンの實際家らしい用心であるとも見られるが、ホイットマンにあつては、このやうな遲疑はなかつたであら

う　彼の神は宇宙に遍滿し萬物の個體に内在する生命であり、同時に超越的な威容ある暖い存在として漠々と大地を蔽ふやうなものとして感ぜられたであらう。而もこの様な生命の中心として把握されたものは、人間各自の自己（ホイットマンが絶えず慣用する大文字のI）であり、「地上のあらゆる生命を含み神を含み、救主と惡魔を含み、空靈にして萬物に滲透するもの」（『神々しき死のさゝやき』）であつた。かうしてこの詩人にあつては、「個人の生命の内觀の中に、あらゆる存在の矛盾が滅却され、信條や道德律やそのやうな規範の障害（或は慣習のしこり）は、おのづからに溶解される。そこには旺盛な「吾」の存在があるのみであつて、しかも、その吾は、肉體五感をそなへた生けるまゝの完全な吾であり、こゝにビューリタニズムの「神」は、その王座を完全に「人間」に讓る。吾々は、こゝに、アメリカのミスティシズムの一つの極點を見るのであり、しかも文學が元來「人間的」なものであり、その上人間の完全に自由な姿、虚僞と形式の歪曲なき姿、即ちあらゆるしこりを離れた生命の誠實な流動を第一條件とするものであるために、吾々は當然ホイットマンに至つて、始めてアメリカ文學に於ける直實文學の名に値ひする作品の出現を見る。即ちこゝにミスティシズムは、その宗教性を十分に保ちつゝ、人間の文學として、しかも紛れないアメリカの風土社會の律動の中に、生き〳〵した存在を現してゐるのである。

witchcraft

（アメリカ・ピューリタニズムの宗教的道德的なしこりのいつ迄も溶けないものを持ち、その爲に眞摯に惱んだ作家はナサニエル・ホーソーン（一八〇四―一八六四）である。彼はその祖先の中に、セイレム妖術師迫害の判官をもち、その呪ひが家系のうちに流れてゐるとさへ思はれた。彼はその血と性格の中に明らかにピューリタンの遺傳を受けてゐる。その寡默で用心深く又勤勉な性質から、その作品の手法のどこまでも手堅く、緻密で均勢ある構成を求めようとする點や、その作品のどれにも行きわたつてゐる一種の清純な眞潔（チャスティティ）の匂ひまで、この作家をビューリタンとして示さゞるものはない。しかもかういふ彼は、ビューリタンの神――怒りの神――を畏れ憎み、それより離脱せんがための努力を弛めることがなかつた。『緋文字』（一八五〇）はもちろん、それに續く長篇『七破風の家』（一五八一）の如きも、さういふ苦悶の産物である。それは神及びそこから派生する思想と戒律の一面的な强制に抗し自由な呼吸を求める人間の姿をあらはしてゐる。

『緋文字』の女主人公は、その迫害におし伏せられながらも究極に於て救ひの喜びを自覺することができ、『七破風の家』の善良な男女たちは、呪ひの神化の如き老判官の頓死によつて明るく自由な光の中に解放される。それは一應『神』に對する『人間』の勝利と見られるけれども、その神の峻嚴で陰鬱な印象は、容易に拭ひとることができぬ程度のものである。ホーソーンはその神

に反撥しつゝ、それによつて却つて神の存在をあらはしてゐるとも見られる。而もピューリタンの裔である彼は、ピューリタンの精神から肉體に至るまで、それをあとづけること正確緻密であつて、自らその生命を共感しそれを生きてゐるとも感ぜられる。『七破風の家』の判官ピンチョンの描寫の如きはそれであり、吾々はそこに謹嚴でしかも柔和に、すべての人に微笑をふり蒔きつゝ、重大な關心事に出あへば忽ち冷酷な苦面を見せ、相手を威嚇しつゝ自己の權益を押し通さうとする、この老人のしたゝかな魂、その僞善で利己的で、しかもすべてを一つの規格の中に統制せずに措かない意力、そしてそれを貫かしめるだけの體力、――さういふピューリタンの資質がさながら生ける化身として再現されてゐることを見る。

ホーソーンは、ホイットマンのもつたやうな自由さ、藝術家としての自由さをもたなかつた。彼は屢々神秘的だと評されるが、それは好んで心靈や幻影の世界に遊び、そこから幽玄で怪奇な者或はさういふ氣分をもつて來ようとする傾向で、時としては唯作品の筋立ての道具として用ひられるやうなこともあり、却つて作品の眞價を減じようとさへする。即ち彼のミスティシズムは、神と人間との完全な融合、そこからくる豐かな生命感といふやうなものでなく、むしろ眞實な宗教的ミスティシズムからは遠いものである。彼の文學の宗教性は、さういふ側になく、ピュ

ーリタニズム自體即ちその獨特な本質に結合したものと考へられる。神はこゝで人間を威嚇し、人間は罪と罰のくびきの中にある。ホーソーンを捕へて離さなかつたものはこの罪と罰の問題であり、それは彼自身ピューリタンとして祖先以來うけてゐる呪縛だとも考へられる。かういふ彼には、善と惡とはきはだつて對照的な存在と見られ、それは彼の作品の人物を、複雜な生ける人間といふよりも、單色の型(タイプ)に分類しようとする。そのことはまた彼の作品の缺點でもあるが、併しこれら善惡のタイプの間の鬪爭相剋の深刻さは、屢々異常な藝術効果をつくりだしてゐることも否めない。このやうな效果こそ、ピューリタニズムがもち得る正統な文學性であり、またその類型對照の手法そのものがピューリタン的頭腦の產物であつて、今問題とするアメリカ文學の宗教性が、このやうなホーソーンに於て、一つの鮮明な代表をもつてゐることは否定できない。即ちそれはミスティシズムへの自由な解放でなく、ピューリタニズムの傳統的規制のうちに閉されたものであり、從つてこのやうなホーソーンは、未來より過去に面するものであり、その點ホイットマンと大きな相違がある。しかし吾々は、この二つの側のいづれにもアメリカ文學の宗教性を認むべきは勿論であり、しかも正統的ピューリタニズムがアメリカ人の精神にしみわたつてゐる事實は、ホーソーンを以て打ち切らるべきでない。かうして吾々は、後にも觸れるやうに、現代

作家のうち、たとへばオニールの戯曲にまさしくホーソーン的な、善惡對立への關心、またその對立の類型的な表現といふ如き特徴が、深刻陰鬱な色調まで共通に現はれてゐることを見るのである。

三

アメリカ文學のルネサンスとも見られるエマソン、ホーソーン、ホイットマンの時代を以て、アメリカ文學の宗教性も、ひとつの豐かな開花期に達したと考へられる。この時代以後、吾々はその宗教性の鮮明な存在を尋ねても失望に終るかも知れない。それは稀薄化し、また分散して諸所に潜在してゐるとも考へられる。南北戰爭以後の物質的な逐利本位の國民的盛分と、その實踐の尊重、趣味の低俗化と、そして他面に於ける自然科學と合理的思想との進出は、傳統的宗教の勢力をかき亂し、その性格にまで影響するに十分であつた。そこには嚴然としたピューリタニズ

ムと、それより生れそれに反するミスティシズムの對立的存在を、明瞭にあとづけることができない。まじめな懐疑がありまたは失ひたる信仰の歎きがあれば、それもひとつの宗教的空氣として珍重されよう。それさへも少いやうに思はれる。アメリカ人の實際的殊にその產業的活動といふものもピューリタニズムに含まれてゐる實踐的な勤勞精神の現はれに外ならぬのであるが、吾々はその精神が宗教的氣品を失つて、實效的衝動としてのみアメリカの現實社會にひろがつてゐるさまを見ると共に、一方ピューリタニズムの高き層に於ける精神性、その可視的な世界を脱して空靈な境地に昇らうとする性格が、氣むづかしい潔癖性となり、また乾燥した信條の墨守となつて、實際人の生活から遠い片隅に固定してゐるさまを見る（たとへばフアダメンタリストの場合の如く）ピューリタニズムがこのやうな分裂の中に本來の生命を失ふとすれば、それはアメリカ人の宗教性――從つてアメリカ文學の宗教性の破滅に外ならない。そして時折に露出するミスティシズムの面も、殊に西部開拓地に見られる如く、集團的暗示的なリヴアイヴアル的熱狂の形をとらうとする。それが文學の精神に遠いものであることは云ふまでもない。

けれども、これは宗教と文學とその何れの側からも云ひ得ることであるが、アメリカ人（或ひは廣く現代人）の從來の宗教的文學的思想の型は、一應破碎してゐると云へる。文學も宗教と同じ

く、その傳統的な考へ方、從つてその表現樣式も失つてゐる。アメリカ人について云へば、その文學はホーソーン時代まであつた細心な然し落ちついた明晰さを失つてしまつた。このことは、ピューリタン的信仰傳統の喪失と平行する現象である。若い國民であり、その傳統と云ふものも民族と國土に芽生えた本來のものでなく、むしろその傳統の揚棄によつて新しい自己の傳統をつくらうとするアメリカ、　にそれを多忙な動搖やまざる伸展の生活の中に達成しようとするアメリカにあつては、このやうな變動ないし不安は當然のことである。けれどもこのやうな破碎は、文學または宗教の眞實の死滅を意味するものではない。即ちアメリカの文學は嘗ての沈靜明瞭な形態を失つても、その變動の中から却つて眞實にアメリカ的な文學を創造しようとしてゐるのであり、吾々はその混亂した然し活力のみなぎつた形態の中にこの事實を認識する。それは舊い文學的思念或は感覺から云へば、非文學的な墮落であるかも知れない。しかし文學は、そこに最も自然な從つて眞實な姿で生きてゐるのである。

かういふ文學について吾々がその宗教性を尋ねる時、その宗教性なる觀念も變化せざるを得ない。宗教はアメリカ國民の一應非宗教的な變動に沿うて、その傳統的な形態を解體し或は弱化したやうに見えても、そのほどかれた形に於て宗教の本質は各所に散亂してゐる。そして國民の激

しい活動の生活の中に、云はゞ海面の白い波頭の如くその存在を現はす。そしてそのことは、同樣に破碎してゐる文學のうちに殊に明瞭に（そして文學である故に美しく）認められる事實である。

吾々はかうして、アメリカのルネサンスの後、或は南北戰爭の後、半世紀ほどの間は、吾々の觀察を飛ばせてもよいやうである。それは文學にも宗教にも、あまりな混亂俗化の時代であり、破碎しつゝも彼らが生命を得きたるにはまだ暫くの時の經過を待たねばならない狀態にある。けれども、かうして現代のアメリカ文學にまで視線を移して見ても、吾々はまだ滿足するほどの宗教性の閃めきを發見することはできない。そのことは新しいアメリカ文學の創成がまだ長い過程を經なければならぬと共にそこに含まれる宗教も一種の未完成（或は新しい變革）の段階に低迷してゐると考へる外ない。結局それはアメリカ人の精神の未完成を示すものに外ならないけれども、このやうな未完成の中にこそアメリカが世界の文化國の中で負うてゐる役割の意義があり、彼は最も先頭の冒險者として舊文化の行き詰つた困難を解かうとしてゐるのである　それは政治經濟や科學の面にあると共に文學宗教に於ても同樣であつて、人間の知能と生活の發展に相應する新しい世界的な形態に成長するまでその未完成な動搖をやめないであらう。そこに興味と希望をかけつゝ、吾々は現代のアメリカ文學を、上にたどつてきたアメリカ文學の經過とはちがつた心構

へで眺めようとするものである。

四

このやうな現代文學の展望にあたつて、筆者の眼は隅々まで屆くことはできないし、この隨筆で十分に叙述する餘地もない。それは動搖の中に辿る點描のやうなものに過ぎないが、上にも云つたオニール（一八八八-）の戯曲から見て行くと、彼にはピューリタニズムへの批判があり、それは最もアメリカ的の精神として、それを表現する人物に鋭い注意がそゝがれ、その偏向や缺點を叩きだして容赦なき審判にかけようとする。その代表的な作品は『楡の木蔭の愛慾』（一九二四）で、その主人公たる老農夫は、その神の名を口から捨てない古風な敬虔さに於て、そして仕事慾と物質慾とその上に肉慾の苛烈さ、老いて衰へぬ活力すべての注意の弛みのない敏活さ、また不屈な意地に於てピューリタンの一つの典型を現はすものであり、その像は諷刺と戯畫の強調をもつことは勿論であるが、歪められたまゝにリアリスティクな印象を與へる描線の深さは異常だと云へる。作者はかゝる人物に興味を感じ、憎しみ愚弄と共に、その人物のもつ強い持味に一種の讃歎を拂つてゐると思はれる。吾々もこのやうな人物が、古いピューリタニズムの散亂した遺物としてニューイングランドの田園に生息してゐることを想像して、アメリカの宗教性の特殊な一面しかもその國民への滲透の深さを思ふのである。そしてオニールは、ホーソーンのごとく、こゝでピューリタニズムの傾向に反抗しつゝ、却つてそれの强靱さと威嚴について立證してゐると云ふことができる。

オニールはその後の作品にあつては、人間の魂の内部に深入りすること甚しくなり、その分析は病理學的とまでなつて、あまりに分解的人工的で生きた全人の印象を失ふ結果となつてゐる場合も少くない。彼がかういふ手法で提出した戯曲のうち、宗教的と考へられるものは、『偉大なる神ブラウン』（一九二六）『ラザラス笑ふ』（一九二八）であり、それが『ダイナモ』（一九二九）『果しなき生』（一九三四）に至つて、次第に極限化する。即ちこゝでは、人間は生ける接觸の面よりは個人の心奥について見られ、意慾や本能が元素的に抽出される。かうして人物は、屢々善惡正邪の型（タイプ）として表現され、それがあまりに一面的に硬化する場合には、むしろ滑稽な印象を與へて